

宮城県文化財調査報告書第 201集

中野高柳遺跡

宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書

平成 17年 3月

宮 城 県 教 育 委 員 会
宮 城 県 土 木 部

宮城県文化財調査報告書第201集

中野高柳遺跡

宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書

序 文

新たな世紀を迎え、ゆとりと豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保存・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、一方では道路建設や宅地造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、大規模な公園場整備などの各種開発事業も年を追うごとに激化しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきています。なかでも土地との結びつきの強い文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底することに努めてきております。

本書は、宮城県土木部との保存協議に基づき、仙台港背後地土地区画整理事業に先立つて実施した仙台市中野高柳遺跡の発掘調査のうち、住宅地区の平成13・14・16年度の一部について調査報告をまとめたもので、背後地関連調査報告書の3冊目にあたります。発掘調査の結果、室町時代から江戸時代に営まれた武士階級の屋敷跡の様子が明らかになりました。また、平安時代末期のゴミ捨て場から多くの遺物が出土しており、なかでも土製の食器や鉄製の馬具は、当時、遺跡に屋敷を構えた主が政治的・経済的・宗教的な中心地であった平泉とつながりがあったことを示しています。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成17年3月

宮城県教育委員会

教育長 白石 晃

例　　言

1. 本書は宮城県教育委員会が行った仙台港背後地土地区画整理事業にともなう中野高柳遺跡の発掘調査のうち、平成13・14年度の住宅地区（4区と5区西端）、平成14・16年度の流通地区（A区とB区北東部）について調査成果をまとめたものである。仙台港背後地関連発掘調査報告書の3冊目にある。内容は、本遺跡の発掘調査が現在も進行中であることから、事実報告を優先した。なお、住宅地区の道路部分と流通地区の北に隣接する都市計画道路部分は、発掘調査を担当した仙台市教育委員会から成果が公表されていないため、今回の報告では触れることができない。
2. 調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 本書における土色の記述については、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1973）を使用した。
4. 発掘調査の測量は、遺跡北西部の第X系国家座標X = -191,850.000、Y = 12,860.000を原点とした東西・南北の基準線をもとに3mの方眼を設定しておこなった。本書に掲載した遺構図中に示された方位はすべて座標北を指している。なお、磁北との偏差は西に8°30'40"である。
5. 本書の遺構番号は、遺構の種別に関わらず、発掘現場で付されたものをそのまま使用した。その際、仙台市教育委員会による遺構番号との重複を避けるため、1000番から付している。また、遺構は種別にしたがって、以下の記号を使用した。
掘立柱建物跡（S B）、塙跡・柱列跡（S A）、溝跡・河川跡（S D）、井戸跡（S E）
水田跡・畑跡（S F）、土壤（S K）、道路跡・竪穴遺構・その他の遺構・遺物包含層（S X）
6. 発掘調査および整理・報告書の作成に際して、以下の方々と関係機関から指導、助言を賜った（五十音順、敬称略）。

飯村均、井上雅孝、入間田宣夫、及川司、大石直正、尾野善裕、川又隆央、久保智康
佐藤甲二、高桑登、田中則和、千葉孝弥、羽柴直人、藤沼邦彦、堀江格、本田泰貴
松本秀明、八重樫忠郎、柳原敏昭、吉井宏、吉川義彦
岩手県教育委員会文化課、多賀城市埋蔵文化財調査センター、東北歴史博物館
平泉町文化財センター、宮城県多賀城跡調査研究所
7. 本書の整理、遺構・遺物の実測・トレースは、村田晃一・白崎恵介・浅野明美・加藤明日香が行った。
8. 遺構のトレースは、平成13・14年度の平面図・断面図と16年度の断面図は、1/20の実測原図をスキャナーで、平成16年度の平面図は電子平板のデータをコンピューターに取り込み、それらを下図としてデジタルトレースを行った。
9. 遺物の実測・トレースは、実測原図をスキャナーでコンピューターに取り込み、それを下図としてデジタルトレースを行った。
10. 本書の執筆・編集は、調査担当者との協議ののち村田晃一・白崎恵介が担当した。
11. 陶磁器の产地や分類、時期については、主として以下の文献を参考とした。

【中世陶器】
・中野晴久 1994 「生産地における編年について」『中世常滑焼きをとて』資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所

- ・藤澤良祐 1994「瀬戸」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』資料集 瀬戸市埋蔵文化財センター
- ・藤澤良祐 1997「中世瀬戸窯の動態」『研究紀要』第5輯 瀬戸市埋蔵文化財センター
【輸入陶磁器】
- ・山本信夫 2000『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編』太宰府市の文化財第49集 太宰府市教育委員会

12. 遺物観察表で簡略化した表現は以下のとおりである。

外→外面 内→内面 完形→完形もしくはほぼ完形

13. 遺物実測図に示した塗りは、以下の特徴を表現している。

黒色漆・漆 ■■■ 赤色漆 ■■ 漆(付着物) ■■■ 曲物の桙皮 ■■■ 油煙吸 ■■■

14. 本遺跡の調査成果については、平成13・14・16年度宮城県遺跡調査成果発表会や宮城考古学第4・5・7号、木簡研究第24号、中世みちの研究会第7回研究集会資料でその内容の一部を報告しているが、これと本書の記載内容が異なる場合は、本書が優先する。

15. 発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

調査要項

遺跡名：中野高柳遺跡（宮城県遺跡登録番号 01146）

遺跡記号：K X

所在地：宮城県仙台市中野字県道前ほか（旧地名：中野字高柳）

発掘面積：約5,700m²（A区、B区北東部、4区、5区西端 うち確認調査300m²）

調査期間：平成13年4月9日～11月6日、平成14年4月8日～11月12日

平成16年4月12日～11月9日

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：平成13年度

　　村田晃一・相原淳一・天野順陽・千葉直樹

　　鈴木朋子（亘理町職員技術研修）・中鉢琢也（山元町職員技術研修）

平成14年度

　　村田晃一・茂木好光・岩見和泰・吉野武・西村力

平成16年度

　　村田晃一・保原恒雄・白崎恵介

目 次

第 一 章 調査の方法と経過	1
1.はじめ	1
2.調査の方法	1
3.調査の経過	1
第二 章 基本層序	6
第三 章 発見した遺構と遺物	8
1. A・B区	8
2. 4区	50
3. 遺物包含層	62
第四 章 まとめ	79
報告書抄録	91



遺跡全景（南東から）

第 章 調査の方法と経過

1. はじめに

本書は、仙台港背後地土地区画整理事業にともなう中野高柳遺跡の平成6・7・13・14・15・16年度発掘調査のうち、住宅地区の4区、5区の西端、流通地区的A区、B区東端の中世より新しい遺構に関する報告書である。宮城県教育委員会が発行する中野高柳遺跡の報告書の3冊目にあたる。「調査にいたる経過」、「地形環境」、「歴史的環境」については、『中野高柳遺跡誌』(宮城県文化財調査報告書第194集) 第一章、第二章で述べているため、そちらを参照していただきたい。

同事業にかかわる中野高柳遺跡の発掘調査は、平成6・7年度に県文化財保護課(以下、当課とする)が担当したのち、仙台市文化財課(以下、市文化財課とする)が平成7～11年度まで調査を行い、平成12年度からは再び当課が担当している。

2. 調査の方法

平成12年度からの調査は、住宅地区北西隅に測量原点(第X系国家座標)を設置し、それをもとに東西・南北に基準線を延長し、調査区全域に3m方眼を設定した。方向は真北を基準とし、グリッドの呼称は原点からの東西・南北方向の距離で表した。

検出した遺構の平面図作成や遺構の写真撮影は、平成14年度までと同15年度以降で異なる。前者の平面図は原則として縮尺1/20で作成した。その際、図は前述したグリッドを基準に作成している。遺構写真は、35mmと6×7cmのカメラを使用し、それぞれモノクロとリバーサルフィルムを使用して行った。平成15年度からは、平面図の作成を電子平板を用いて行い、遺構写真は通常6×7cmモノクロフィルムとデジタルカメラで撮影し、重要度が高いものについては6×7cmカラーリバーサルフィルムも用いた。各年度とも調査成果がまとった段階で、空中写真を撮影している。

3. 調査の経過

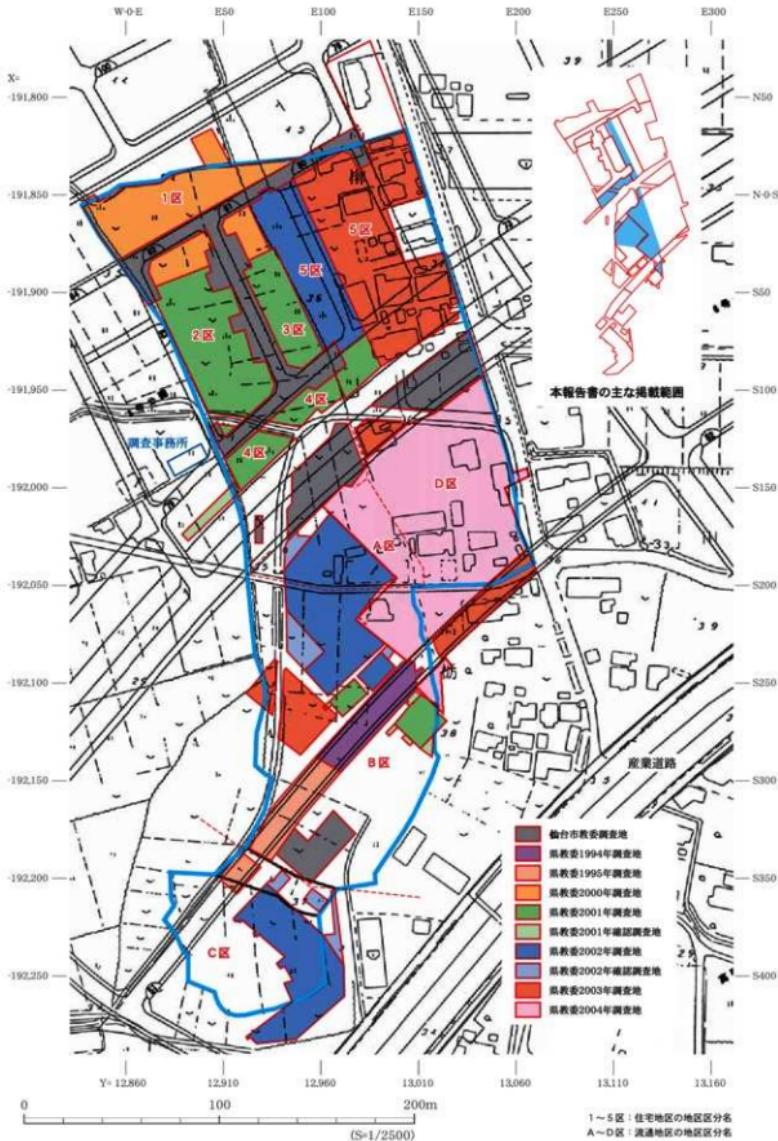
中野高柳遺跡の発掘は遺跡全体が事前調査の対象となるため、調査面積が広大で多年次にわたると予想された。そこで、平成12年度からの発掘調査では、住宅地区を市文化財課の調査区や湿地跡を反映した低地部分を境にして1～5区に、流通地区は既存道路や湿地跡を反映した低地部分を境にしてA～D区に区分した(図版1)。本年度までに県文化財保護課が行った発掘調査の概要是、以下の通りである。

平成6年度の調査

平成6年度は、流通地区内を都市計画道路「中野線」に平行して南を走る幅12mの道路予定地のうち、北半部の調査を行った。調査面積は1,050m²である。その結果、鎌倉～南北朝時代の在地領主(=武士階級)の屋敷跡(区画G)を検出した。主な遺構は掘立柱建物跡、井戸跡、土壙、溝跡などである。特筆すべき出土遺物としては、ゴミ穴とみられる大型土壙から出土した修驗者もしくは僧を墨で表現した「人物墨書き」があげられる。

平成7年度の調査

前年度に続き、道路予定地南半部を調査した。調査面積は950m²である。主な検出遺構は、南北道



図版1 遺跡の範囲と調査地点

跡の東側溝、区画溝跡、掘立柱建物跡などである。区画溝跡は前年度に確認した屋敷の南辺を画する可能性が考えられた。

平成12年度の調査

本年度より仙台市教育委員会から発掘調査を引き継ぐこととなり、住宅地区の1区・2区と3区の北端部について調査を実施した。調査面積は3,250m²である。その結果、平安時代と中世より新しい遺構を確認した。平安時代は河川が住宅地区中央を南へ流れ、右岸の自然堤防縁辺から後背湿地は水田として利用されており、10世紀前葉に降灰した灰白色火山灰で廃絶した。その後、自然堤防部に烟がつくられるが、河川の氾濫で廃絶しており、平安時代の遺構は2度の自然災害を受けていることがわかった。

中世より新しい遺構は、幅3mの溝で方形に区画された屋敷跡が新旧2時期確認された。その規模や出土遺物から、屋敷の主は在地領主層と考えられる。古い屋敷（区画A）は単独の区画であるが、新しい屋敷（区画C・D・E）は三つの区画で構成されていることがわかった。なお、古い屋敷は発掘調査前に策定した遺跡の範囲（以下、遺跡の範囲とする）外へと延びたため、東辺を一部拡張したが、北辺は確認できなかった。

平成13年度の調査

発掘調査は本年度から通年（4月～11月）となり、中野高柳遺跡の事前調査と東に1km離れた竹ノ内遺跡の遺構確認調査を行った。

中野高柳では、住宅地区が昨年度の継続部分（2・3区）と4区、流通地区ではB区の2箇所で調査を行った。調査面積は事前分が6,200m²、確認分が300m²である。平安時代の遺構は住宅地区に認められ、2区や3区で昨年と一連の畑跡や水田跡を確認したほか、4区で灰白色火山灰より古い畑跡を検出した。また、河川は灰白色火山灰後下後の氾濫によって流路が他所へ移動し、元の場所は窪地となつて湿地化したことがわかった。湿地は12世紀代にゴミ捨て場（=遺物包含層）となり、土器・陶磁器・漆製品・木製品・石製品・金属製品・動植物遺体などが出土した。

中世より新しい遺構は、住宅地区的屋敷跡が2時期加わって4時期となり、年代は古いほうから鎌倉～南北朝時代（区画A）→室町時代（区画B）→戦国時代（区画C・D・E）→江戸時代（区画F）とみられた。また、鎌倉～南北朝時代の南北道路跡を検出した。道路の路面幅は3～4mで、両側に側溝を伴っている。流通地区は、平成6年度の調査区の南北両側を調査した。その結果、鎌倉～南北朝時代の屋敷（区画G）に伴う建物、ゴミ穴とみられる大型土壙などを検出した。屋敷の東側は湿地でゴミ捨て場となっており、土器・陶磁器・漆製品・木製品・石製品・金属製品・動植物遺体などが出土した。

特筆すべき遺物としては、12世紀の遺物包含層から出土した「鉄地銅象嵌唐」があげられる。象嵌技法から平泉の製品もしくはその技術系譜に連なること、さらに、土器・陶磁器の組合せが平泉と共通することから、12世紀に屋敷を構えた主は、平泉藤原氏と密接な関係にあったと考えられた。

中世より新しい遺構の調査が一段落し、全体の見通しが付いた段階で、記者発表（7月5日）と現地説明会（7月7日）を行った。説明会の参加者は、150名ほどであった。

平成14年度の調査

住宅地区は5区西端と5区北東隣接地の2箇所、流通地区はA区で4箇所、B区で3箇所、C区との隣接地で2箇所、あわせて11箇所で調査を行った。調査面積は、事前分が9,280m²、確認分は1,120m²である。5区西端では、湿地跡とその東で平行して南北に延びる溝跡や新たな近世屋敷（区画H）の区画溝跡を検出した。湿地跡からは12世紀の遺物が出土したが、その量は昨年度の4区に隣接する南側に多く、北にいくほど希薄となった。5区北東隣接地は遺跡の範囲外であったが、工事に伴う掘削で遺構が発見されたため急速調査を実施し、平安時代の烟跡や室町～戦国時代とみられる大型土壙などを確認した。

C区は、南東側の隣接地に中世遺構が延びると予想されたため、仙台港背後地地区画整理事務所（以下、事務所とする）と相談の上、調査区を南へ拡張した。一方、C区中央は遺構数がきわめて少なく、近世より古い遺構が認められなかつたため、西側の事前調査は行わなかった。



図版2 遺跡周辺の空中写真

（写真上が北、白線は遺跡の範囲 縮尺=1/10000）

※「国土画像情報（昭和59年度カラー空中写真、整理番号：CTO-84-2） 国土交通省」を一部加工して転載

流通地区的遺構は、平安時代がA・B区で灰白色火山灰に覆われた畠跡、区画溝跡を検出した。また、住宅地区と一連の河川跡がA・B区東縁を南へ流れ、C区北東部で向きを西へ変えていることを確認した。中世より新しい遺構は、昨年度検出した南北道路跡をA～C区で検出し、遺跡内を継続（390m）してさらに南に延びることがわかった。B区では、平成6・7・13年で確認した鎌倉～南北朝時代の屋敷跡（区画G）の北辺と西辺を検出し、屋敷の規模

は東西70m前後、南北50～53mであることが

判明した。また、A区では住宅地区の室町時代頃、江戸時代の屋敷跡の南辺を確認した。

平成15年度の調査

中野高柳遺跡と竹ノ内遺跡の調査を実施した。中野高柳遺跡は、住宅地区で5区中央から東側、流通地区はB区西端で1箇所、D区は北端と南端の2箇所、あわせて4箇所で調査を行った。調査面積は、6,930m²である。その結果、住宅地区は立ち退きの終了していない宅地部分を除いて全て発掘調査が終了した。住宅地区的検出構造は、平安時代が河川跡左岸で灰白色火山灰に覆われた畠跡を検出した。中世以降は、昨年度発見した南北溝跡と一連とみられる溝跡が東へ折れること、近世屋敷跡の北辺区画溝が東へ延び、屋敷の規模が南北52m以上、東西60m以上あることを確認した。また、北東部で新たな屋敷跡を確認したが、南北40m、東西45m以上と小規模であった。

流通地区では、B区で前年度検出した畠跡の南端を確認した。畠跡は4区で検出したものと一連と考えられ、耕作域は東西16～32m、南北164mと判明した。中世以降のものとしては、南北道路跡などを確認したが、全体に密度は希薄であった。また、D区で湿地跡東側の調査を行ったところ、古代の畠跡が遺跡の範囲外に延びることを確認したため、事務所の了解を得て発掘調査を実施した。その結果、灰白色火山灰に覆われる畠跡と区画溝跡を確認し、後者からは10世紀前半頃の土師器食器がまとめて出土した。一方、中世より新しい遺構の分布は希薄であった。

竹ノ内遺跡は、平成13年度に実施できなかった部分について構造確認調査を行った。その結果、堆積土に灰白色火山灰が入る東西溝跡1条を除くと、近世以降の屋敷や寺に関わる遺構などを確認するにとどまった。したがって、構造精査の対象は古代の溝跡のみで、他は確認にとどまることから、事務所と協議したのち、継続して事前調査も実施することになった。調査面積は1,850m²である。近世屋敷の区画溝跡から、整形した割材に墨書きを施した木簡が出土した。

平成16年度の調査

中野高柳遺跡の流通地区はA・B区東側とD区について調査を行った。調査面積は、8,200m²である。検出構造は、平安時代が河川跡两岸で灰白色火山灰に覆われる畠跡を検出した。左岸では、5区から延びる区画溝の南北長が415m以上であることがわかった。中世以降は、A区で室町時代頃（区画B）

調査年度	調査地名	東西面積(m)	南北面積(m)	備考(区名は調査時)
平成6年	流通 B2	1,050		
平成7年	流通 B2	950		
平成12年	住宅 1, 2～3の一部	3,250		遺跡範囲外295m ²
	住宅 2～4, 5の一部	5,550	210	遺跡範囲外210m ²
平成13年	流通 B2	650	90	～ 区
	小計	6,200	300	
	住宅 5	3,650		E・N区 遺跡範囲外1,070m ²
	流通 A	1,560	270	～ S・N区
平成14年	流通 B1・B2	1,800	470	区
	流通 B2	170	90	～ 区
	流通 C	2,100	290	～ 区 遺跡範囲外1,050m ²
	小計	9,280	1,120	
	住宅 5	5,000		E区
平成15年	流通 B2	960		脱区 遺跡範囲外220m ²
	流通 D	330		区
	流通 D	640		生区 遺跡範囲外545m ²
	小計	6,930		
平成16年	流通 D	8,000		代区 遺跡範囲外430m ²
	流通 Bの一部	200		畔区
	小計	8,200		
合計		35,860	1,420	

第1表 調査年度と調査面積

と江戸時代（区画F）の屋敷跡の南西隅を検出し、それぞれの規模が確定した（B：東西45m、南北103～107m、F：東西43～53m、南北65m）。

D区でも幅1mの溝で囲まれた方形区画を三つ確認した（区画I：東西60m以上、南北95m、区画J：東西30m以上、南北25m、区画K：東西59m以上、南北96m）。これらは、遺跡西側で確認した屋敷（区画A～G）と比較して区画溝の幅が狭い、内部の建物構成が異なる、出土遺物が少ない、といった特徴が認められた。こうした違いは居住者の階層差を示すと考えられ、D区の区画は西側の屋敷の主と主従関係にあった人々、一般農民や職人などの住まいと考えられる。A・B区の東端は湿地跡で13年度調査地の北にあたる。鎌倉時代から南北朝時代はゴミ捨て場（＝遺物包含層）となっており、土器・陶磁器・漆製品・木製品・石製品・金属製品・動植物遺体などが出土した。遺物の出土状況は、西側の南よりも多く、北へ行くほど希薄であり、在地領主の屋敷である区画Gより多く出土する傾向がつかめた。

中世の調査が終了し、古代の調査が一段落した段階で、記者発表（10月22日）と現地説明会（10月24日）を行った。説明会の参加者は、80名ほどであった。

第 章 基本層序

遺跡内の表土から遺構面までの基本層序は、大別で7層に分けられた。図版3は、住宅地区北端と流通地区2地点の基本層序を柱状図にして模式的に示したものである。

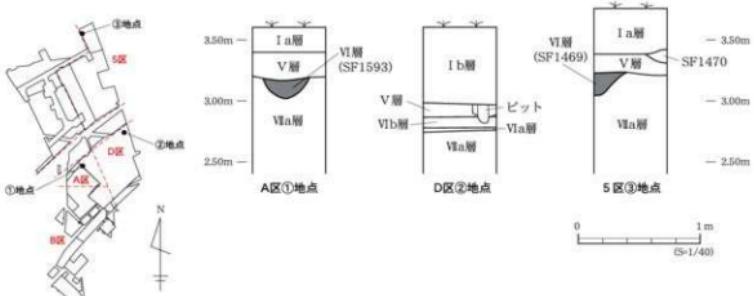
遺跡内の微地形をみると、住宅地区の中央から流通地区の東縁に古代の河川跡（SD1100）が認められ、その両側に自然堤防が形成されている。自然堤防の幅は右岸が50～60m、左岸は60m前後とみられる。住宅地区的河川跡右岸は、河川跡の凹地に接続する東西方向の凹地が4条あり、それらをつなぐ南北の凹地が観察できた。流通地区的河川跡右岸もまた、それに接続する東西方向の凹地が2条認められた。発掘調査の結果、これらの凹地は中世の屋敷をめぐる区画溝であり、近世以降になると、区画溝跡や河川跡の凹地は水田（第c層）として、水田で囲まれた高い部分は、宅地や畑として利用されていたことがわかった。これら水田・畑・宅地によって遺跡全体は削平されており、中世以降の旧表土である第d層は、D区の一部で確認したのみである。

第 層

表土である。盛土（a層）、畑耕作土（b層：黒褐色～黄褐色シルト）、水田耕作土（c層：褐灰色～灰色粘土）に分けられる。c層の上にはa層が認められる部分が多い。厚さはa層が20～80cm、b層は30～40cm、c層は10～50cmある。

第 層

にぶい黄褐色（10YR5/4）シルトで、中世遺構を覆う。面的な広がりは確認できなかったが、B・C区の中世遺構の最上層で認められた。



図版3 基本層序

第 層

暗褐色（10YR3/4）や黒褐色（10YR3/2）シルトで、中世以降の旧表土である。1区東部やD区南端で認められたが、他の場所では確認できなかった。厚さは10～20cmある。

第 層

にぶい黄褐色（10YR4/3）の砂質シルトもしくはシルトを主体としており、河川の氾濫を起源とする層である。SD 1100河川跡を中心に認められる。氾濫によって、畑（S F 1303・1333）やその区画溝（SD 1150・1151・1309・1330）は、河川と接する部分などを中心に壊されている。住宅地区のSD 1100では、厚さが260cmあった。層の細分が可能で、砂や粘土も認められる。

第 層

にぶい黄褐色（10YR5/3）シルトを主体としており、河川の氾濫を起源とする層と考えられる。遺跡全体で認められ、第 層の残りが悪いため中世より新しい造構は本層で確認したものが多い。層の厚さは自然堤防上で10～20cm、その縁部では30～40cmある。

第 層

灰白色火山灰層である。1次堆積（a層）と2次堆積（b層）に細分できる^[21]。第 層の造構の多くは第 a層に覆われており、厚さは10cm前後ある。第 b層は遺跡のほぼ全域で認められ、厚さは自然堤防上で10～20cm、河川跡は岸付近で20～30cmあり、最大で80cm認められたところがある。これに対し、C区の第 層は中央部の湿地（S X 1608）から南で認められた。検出レベルはA・B区に較べて80～90cm低く、その下で水田跡は検出できなかった。したがって、C区は中央部以北を河川（SD 1100）が流路を変えながら流れ、その南岸は湿地となっており、1・2区西側のように水田はつくられなかつたと考えられる。

第 層

a層は灰黄褐色（10YR5/2）やにぶい黄褐色（10YR5/3）の砂質シルトもしくはシルトを主体とする。自然堤防部に認められ、厚さは20～30cmあり、畑（S F 1334・1593・1919・1920・2401）や区画溝（SD 1256・1257・1468・1592・1910・1911・2400）が掘り込まれた。1・

2区西端の自然堤防縁辺部には、グライ化した暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土の第 b層が認められ、水田(SF 1199)や区画溝(SD 1155)がつくられた。一方、C区南端では、100~120cmの厚さで褐灰色粘土質シルト(第 c層)が認められ、その下層は砂層であった。

(註1)これまでの報告書では、1次堆積を b層、2次堆積を a層と呼称したが、遺構の作り替えを示す際、一般的に aは古い方を指すことから、1次堆積を第 a層、2次堆積を第 b層と改めることとした。

第二章 発見した遺構と遺物

今回報告するのは、A区、B区北東部、4区、5区西端である。5区西端を除いて古代の畑耕作痕・区画溝跡・河川跡を確認したが、畑耕作痕はA区で発見したものが昨年度報告したSF 1593と一緒にあり、河川跡は来年度報告予定の調査区へと延びる。したがって、古代遺構については来年度まとめて行うこととし、今回は中世や近世の遺構について報告する。中世より新しい遺構は、第・層で確認した(図版4)。

本遺跡の発掘調査報告書は、過去に2冊刊行している。以下の記述にあたりそれらを引用する場合は、「中野高柳遺跡」(宮城県文化財調査報告書第194集)を『』、「中野高柳遺跡」(宮城県文化財調査報告書第197集)を『』と略すことにする。また、『』・『』で確認した中世以降の屋敷跡(=方形区画)は、区画A…区画G、大別7期の遺構期は第期…第期と表記する。

1. A・B区

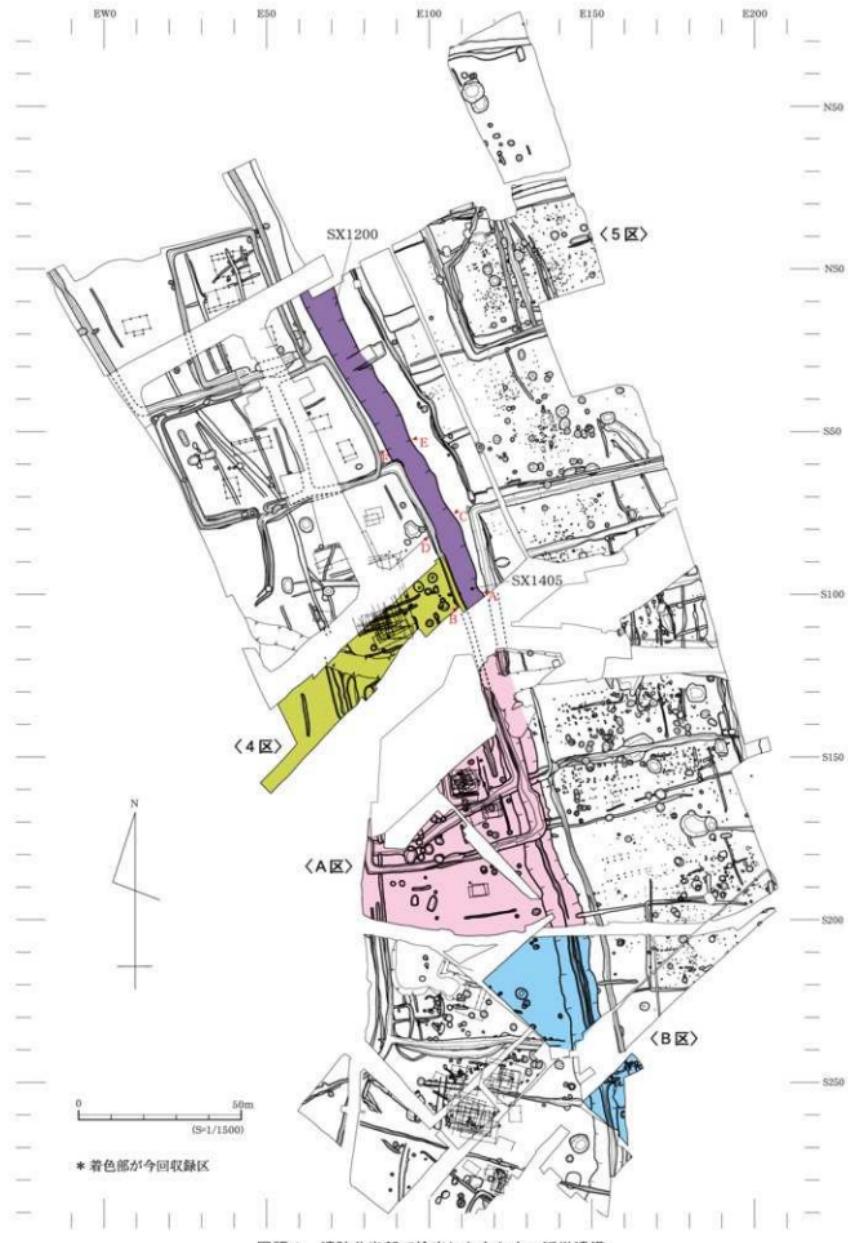
A区は、4区と道路や市文化財課の調査区を挟んだ南にあり、流通地区全体からみて北西隅に位置する。東端にSX 1397遺物包含層が形成された湿地跡があり、西端はSX 1600道路跡が南北に継続している。中世より新しい遺構は、道路跡や区画溝跡のほか掘立柱建物跡、井戸跡、土壙、溝跡などを確認した(図版6)。

B区は、A区と東西に走る市道を挟んで南側にある。内部は屋敷の区画溝跡を反映した凹地によつて3区に大別している。今回報告するのはB1区東側と、B2区の北東隅付近である。中世より新しい遺構は、井戸跡、土壙、溝跡などを確認した。B1区やB2区で検出した遺構は数が少なく、A区から延びる溝跡もあることから、A・B区を一括して記述する。

A. 区画溝跡

【SD 1650区画溝跡】(図版6・7)

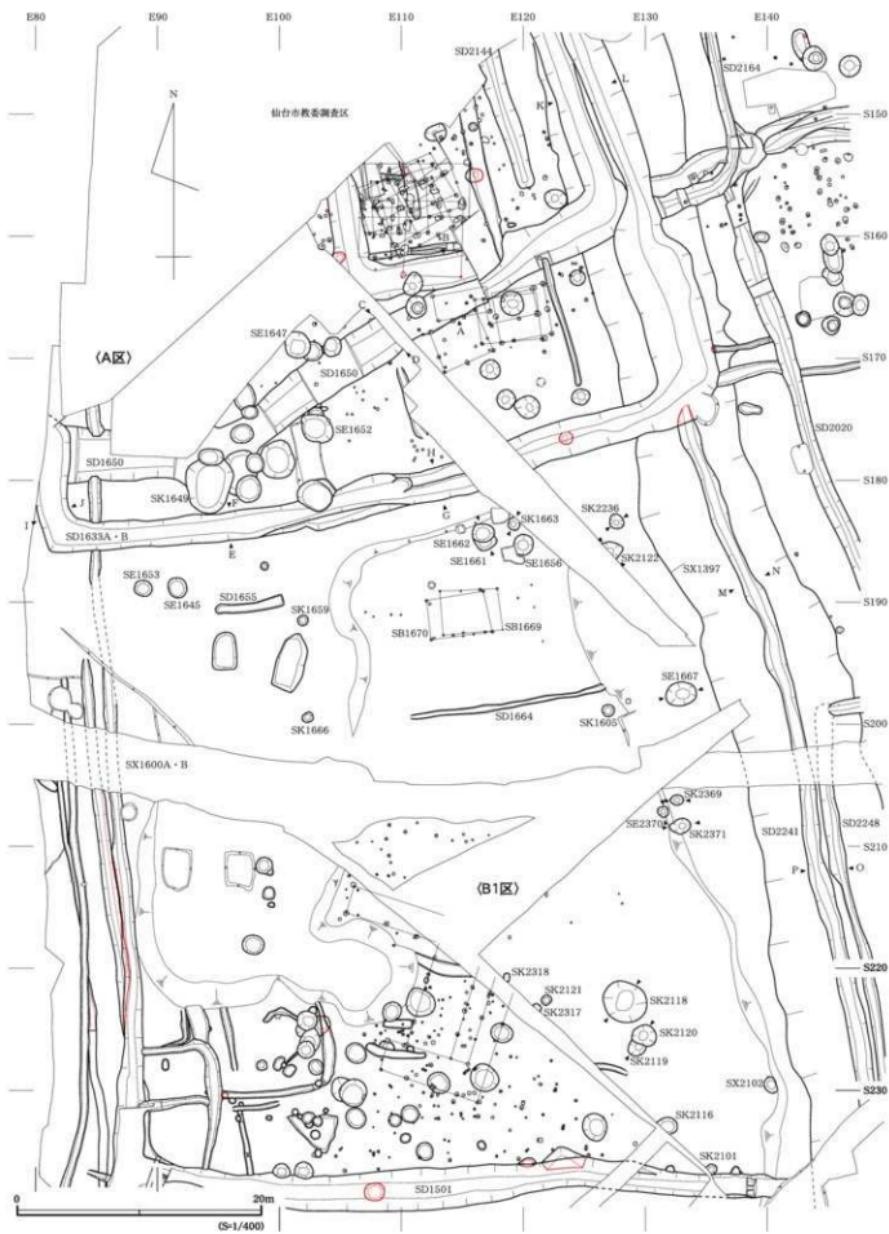
A区北部で検出した東端が北に折れるL字形の溝跡である。東西51m、南北33m分を検出した。東西部分は、西端付近で「く」字状に折れる。2・3・4区で検出した区画Bの溝跡SD 1248・1289と一緒に遺構と考えられる。SX 1600道路跡、SX 1397遺物包含層^(註1)、SD 2138溝跡より新しく、SD 1633・2130区画溝跡、SE 1636・1643・1642・1646・1648・2134井戸跡、SK



図版4 遺跡北半部で検出した主な中・近世遺構



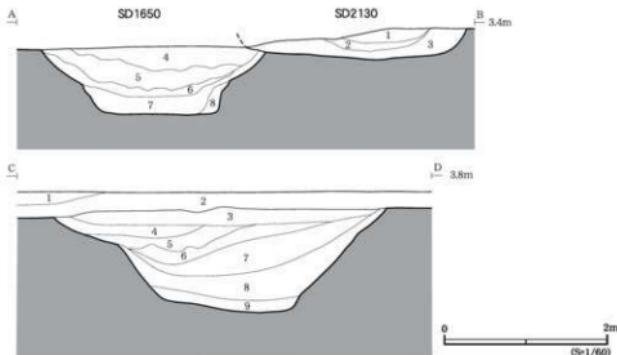
図版5 遺跡空中写真



図版6 A・B区の検出遺構



区画B・F南東部(東から)



A-B断面

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐灰色(10YR6/0)シルト		
2	褐褐色(10YR6/0)シルト	黒褐色シルトをうミナ散に含む	SD2130 海棲土
3	褐褐色(10YR6/0)シルト	海山ブロックを含む	
4	褐褐色(10YR6/0)シルト	海山ブロックを多量、白化物を含む	
5	こじら褐色(10YR5/3)砂質シルト	海山ブロックを多量に含む	
6	褐色(10YR4/0)砂質シルト	ややしまれなし	SD1650 海棲土
7	灰土色(10YR5/2)砂質シルト	黒褐色シルトをうミナ散に含む	大削: 2層
8	褐褐色(10YR5/0)シルト	海山の削壁に含む	大削: 3層

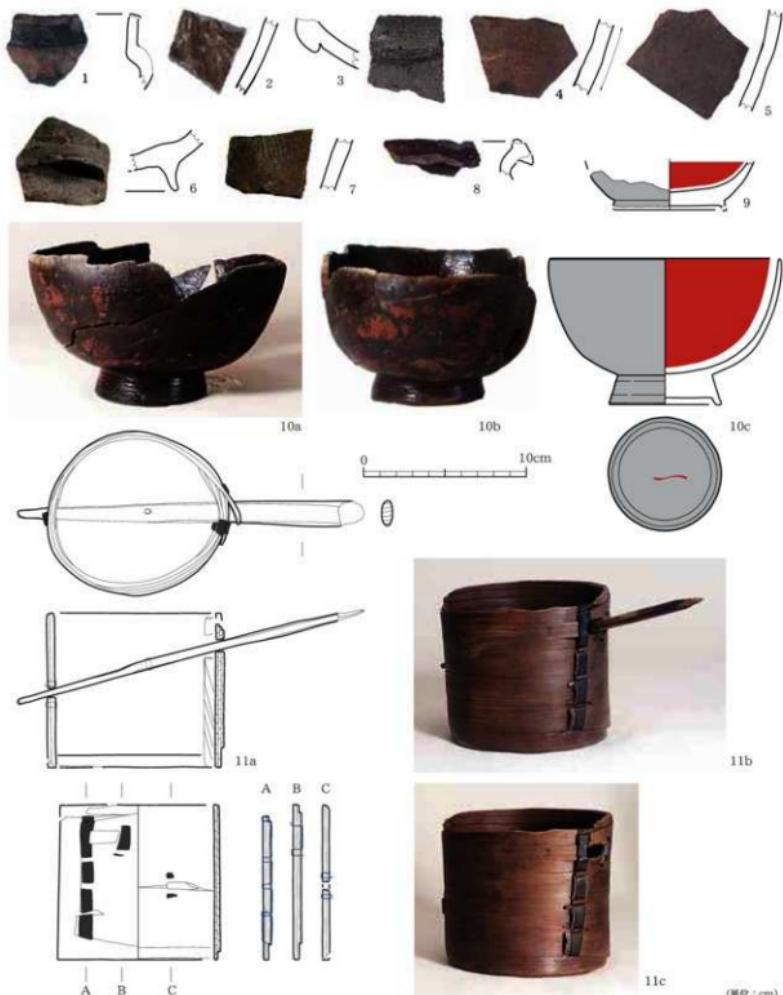
C-D断面

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐灰色(10YR6/0)シルト	盛くしまる	第1a層
2	褐褐色(10YR6/0)シルト		
3	褐色(10YR6/0)シルト		大削: 1層
4	こじら褐色(10YR5/3)シルト		
5	灰土色(10YR5/2)シルト	海山ブロックを含む	
6	こじら褐色(10YR5/0)シルト	海山ブロックを多量に含む	大削: 2層 SD1650 海棲土
7	灰褐色(10YR5/2)砂質シルト		
8	こじら褐色(10YR5/0)シルト	黒褐色シルトをうミナ散に含む	
9	褐褐色(10YR5/0)粘土		



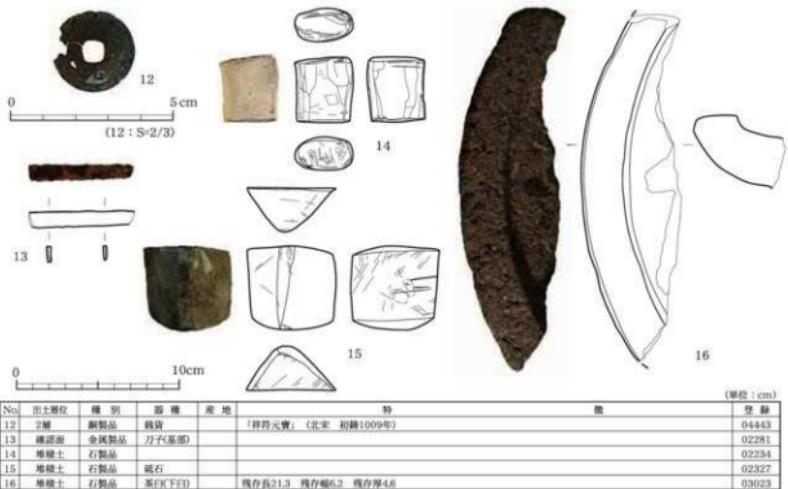
C-D断面写真

図版7 SD1650区画溝跡



No.	出土層位	種別	器種	産地	特	備	寸
1	2層	瓦質土器	円筒小型鉢	スタンプ文「巴」			04467
2	2層	陶器	甕	押印模様+斜線			04442
3	堆積土	陶器	甕	常滑			04444
4	3層	陶器	甕	常滑	破片を砾石に転用		04466
5	堆積土	陶器	甕	常滑	押印模状		04445
6	堆積土	陶器	片口鉢	常滑			02035
7	堆積土	陶器	甕	常滑	押印模様+斜線		02036
8	堆積土	陶器	甕	常滑			02037
9	2層	漆器	桶		高台径7.0 高さ(2.9) 内面:赤色漆 外面・底部:黒色漆		04063
10	3層	漆器	桶		口径(14.2) 高台径7.0 高さ8.85 外面:黑色漆+赤色漆で文様 内面:赤色漆 底部:黑色漆→赤色漆 「—」 高台外面に工具痕		04062
11	3層	漆器	桶		残存長21.3 幅11.3×10.1 高さ9.7 納幅1.6 厚0.7		04061

図版 8 SD1650区画溝跡出土遺物 (1)



図版9 SD1650区画溝跡出土遺物（2）

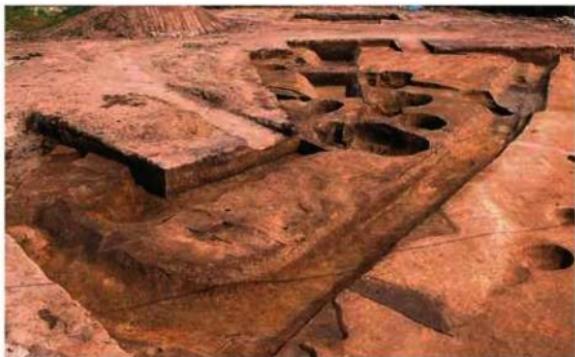
1643・1640・1649土壤、SD1631溝跡より古い。上幅2.5～2.8m、下幅1.2～1.5m、深さは1.3mある。断面は上部が大きく開く逆台形である。堆積土は3層に大別でき、自然堆積したのち（3層）、人為的に埋め戻され（2層）、その後凹地となった部分に自然堆積（1層）が認められる。

遺物は3層から常滑産甕（4）、柄杓（11）や漆椀（10）、2層から瓦質土器円形小型鉢（1）、常滑産甕（2）、漆椀（9）、錢貨「祥符元寶」（12）、堆積土から常滑産片口鉢（6）・甕（3・5・7・8）、口クロかわらけ、砾石（15）、茶白・下白（16）、不明石製品（14）、ウマとみられる四肢骨や歯、クルミ核、モモ核などの植物遺体、確認面から口クロかわらけ、刀子（13）、鐵滓、砾石、羽口などが出土している（図版8・9）。このうち4は、陶器破片が砾石に転用されている。

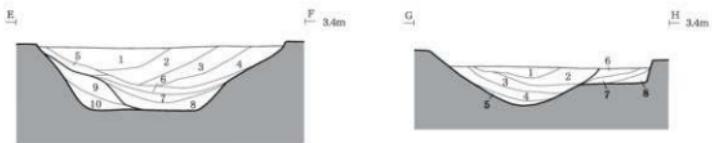
【SD 1633A・B区画溝跡】（図版6・10・11）

A区北部で検出した東端と西端が北に折れるコ字形の溝跡である。2時期の変遷（A→B）があり、東西57m、南北47m分を検出した。2・3・4区で検出した区画Fの溝跡SD1275・1288と一緒に遺構と考えられる。SX1600道路跡、SX1397遺物包含層、SD1650区画溝跡、SE2132井戸跡、SD2147・2163・2164・2241溝跡より新しく、SE1637井戸跡より古い。

B期は上幅2.0～3.0m、下幅0.8～1.0m、深さは0.6～0.8mある。断面は残りのよいところでみると上部が大きく開く逆台形である。堆積土は2層に大別でき、自然堆積（下層）のち、人為的に埋め戻された（上層）と考えられる。A期は上幅1.7m以上、下幅1.0m前後、深さは0.8～1.0mで、B期に比べて20cmほど深い。断面は逆台形とみられる。堆積土は4～5層に細別できたが、いずれも自然堆積とみられる。



区画F南西部（南西から）

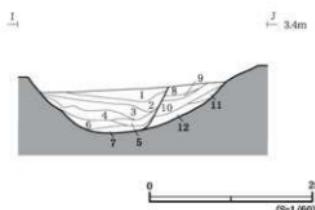


E-F断面

No.	土色・土性	埋入物など	備考
1	黒褐色(10YR5/2)砂質シルト		
2	褐褐色(10YR5/2)砂質シルト		
3	褐褐色(10YR4/2)シルト		
4	黒褐色(10YR3/2)シルト		
5	赤土(暗褐色(10YR4/3)砂質シルト)	廃山ブロックを多く含む	
6	褐色(10YR4/4)シルト		
7	褐褐色(10YR4/2)シルト		
8	黒褐色(10YR3/2)粘土	廃山地をラミナ状に含む	
9	褐褐色(10YR5/2)砂質シルト	廃山地を含む	
10	褐褐色(10YR4/2)粘土質シルト	廃山ブロックを含む	

G-H断面

No.	土色・土性	埋入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)砂質シルト		
2	赤土(暗褐色(10YR4/3)砂質シルト)		
3	褐褐色(10YR4/2)砂質シルト		
4	褐褐色(10YR4/4)砂質シルト	廃山のブロックを含む	
5	赤土(暗褐色(10YR4/3)砂質シルト)	廃山のブロックを含む	
6	褐色(10YR4/2)砂質シルト		
7	褐褐色(10YR4/2)粘土質シルト		
8	黒褐色(10YR5/2)砂質シルト	廃山地をラミナ状に含む	

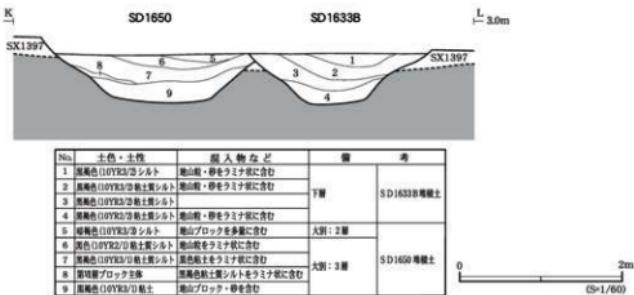


I-J断面写真

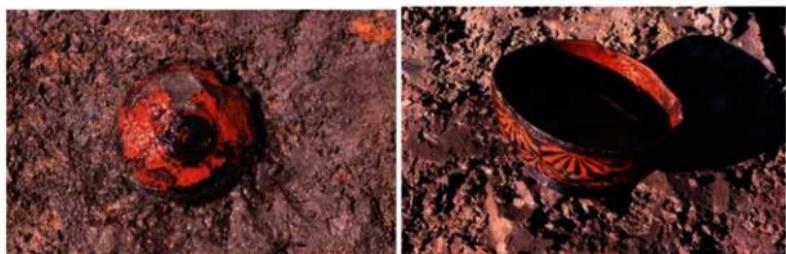
I-J断面

No.	土色・土性	埋入物など	備考	No.	土色・土性	埋入物など	備考
1	褐褐色(10YR5/2)シルト	廃山ブロックを多く含む		7	黒褐色(10YR3/2)砂質シルト	廃山ブロックを含む	
2	褐褐色(10YR4/2)シルト			8	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト		
3	褐褐色(10YR5/2)粘土			9	褐褐色(10YR4/2)粘土質シルト		
4	褐褐色(10YR4/2)シルト	廃山ブロックを多く含む		10	褐褐色(10YR3/2)砂質シルト		
5	褐褐色(10YR4/2)シルト			11	褐褐色(10YR4/2)粘土質シルト		
6	褐褐色(10YR4/2)シルト	廃山ブロックを含む		12	褐褐色(10YR3/2)粘土質シルト	廃山を含む	

図版10 SD1633区画溝跡（1）



図版B・F南東部（南東から）



津盃出土状況（B期）

漆椀出土状況（A期）

図版11 SD1633区画溝跡（2）

遺物は堆積土から出土している（図版12・13）。B期堆積土からは岸窯産擂鉢（5・6）、瀬戸美濃産の大鉢（8）、皿（12）・大皿（15）、堤系のこね鉢（9）、天目茶碗（2）、瓦質土器火鉢（4）・擂鉢（7）、磁器隅入小皿（10）、常滑産甕（16）、白磁四耳壺（1）、青磁椀（3）、丸瓦（13）、漆盃（図版11左下）、砥石（18～20）、A期堆積土からは瀬戸産瓶子（14）、不明銅製品（17）、砥石（21・22）、漆椀（24・25）、鎌柄（23）などが出土した。このうち16は、破片が砥石に転用されている。



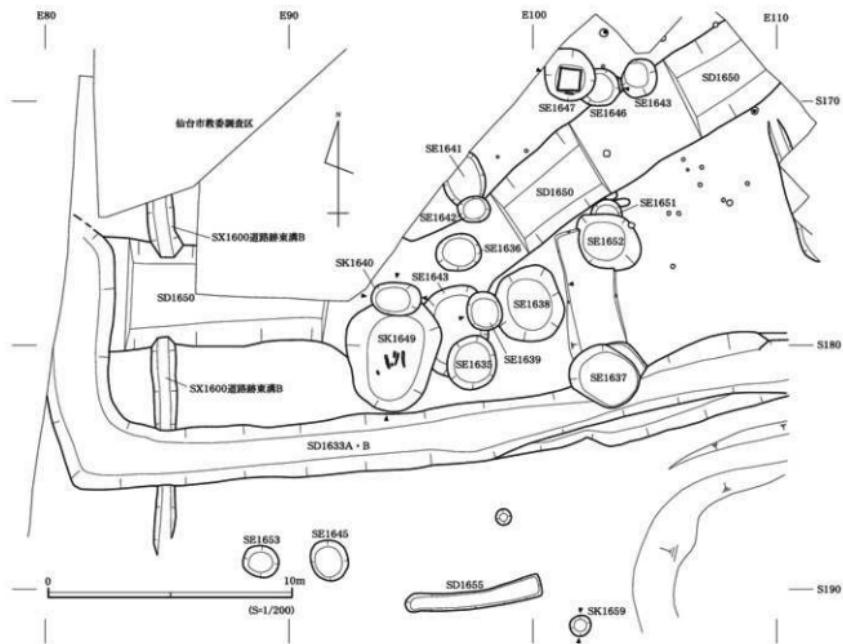
No.	出土部位	種別	形種	産地	特		備	標
					位	徴		
1	B期堆積土	白磁	四片割					02022
2	B期堆積土	陶器	天目系碗					02028
3	A期堆積土	青磁	碗					02034
4	B期堆積土	瓦質土器	大鉢		スタンプ印(菊花文)			02027
5	B期堆積土	陶器	擂鉢	岸	ロクナデ 7本一単位の鉢目 体底部に網状圧痕			02025
6	B期堆積土	陶器	擂鉢	岸	ロクナデ 7本一単位の鉢目 S上同一個体			02026
7	B期堆積土	瓦質土器	擂鉢		底径(11.0) 6本一単位の鉢目			02020
8	B期堆積土	陶器	大鉢	湘戸美濃	[17世紀]			02032
9	B期堆積土	陶器	ごね鉢	堤系				02033
10	B期堆積土	織物	個人小品	湘戸or平清水				02031
11	B期堆積土	陶器	皿	湘戸力				02023
12	B期堆積土	陶器	皿	湘戸美濃	内面:鉄筋墨画文 [17世紀前半] 有段 四面:つり縫			02030
13	B期堆積土	瓦	丸瓦					02034

図版12 SD1633区画溝跡出土遺物 (1)



（単位：cm）						
No.	出土位置	種別	測定	特	識	量
14	A期堆積土	陶器	瓶子	通 ²	外側：灰釉 内面：鐵鉢。【17世紀】	02021
15	B期堆積土	陶器	大盤	通 ² 美濃		02029
16	B期堆積土	陶器	甕	常滑	瓶片を砾石に転用	02039
17	A期堆積土	石製品		径4.0 厚0.1 中心に丸孔0.6×0.5		02298
18	B期堆積土	石製品	砾石	長(10.4) 幅7.1 厚(3.1)		02329
19	B期堆積土	石製品	砾石	長(3.9) 幅(4.9) 厚(3.3)		02328
20	B期堆積土	石製品	砾石	長(4.2) 幅(4.8) 厚(2.1)		02336
21	A期堆積土	石製品	砾石	長(4.3) 幅(3.4) 厚(3.0)		02343
22	A期堆積土	木製品	砾石	長8.6 幅4.5 厚3.7		02344
23	A期堆積土	木製品	縫柄	長12.5 幅3.3 厚1.7 【ケンボナシ属 板目】		02228
24	A期堆積土	漆器	椀	口径8.0 高8.2 底径3.5 壁厚1.5mm	外面：赤色漆で文様 内面：赤色漆 底面：赤色漆で文様 【ブナ属 樹木取り】	02226
25	A期堆積土	漆器	椀	高台径7.0 外面：黒色漆で赤色漆で文様 内面：赤色漆 底面：赤色漆で文様 【ブナ属 樹木取り】		02229

図版13 SD1633区画溝跡出土遺物（2）



図版14 A区北端の検出遺構（1）－西側

B. 堀立柱建物跡

15棟の建物跡を確認した。これらの建物跡には区画Bもしくは区画Fの内部に位置するものと、その区画の南側に位置するものがある。

すべての建物跡の属性は第2表にまとめた。以下、主な建物跡について概要を記す。

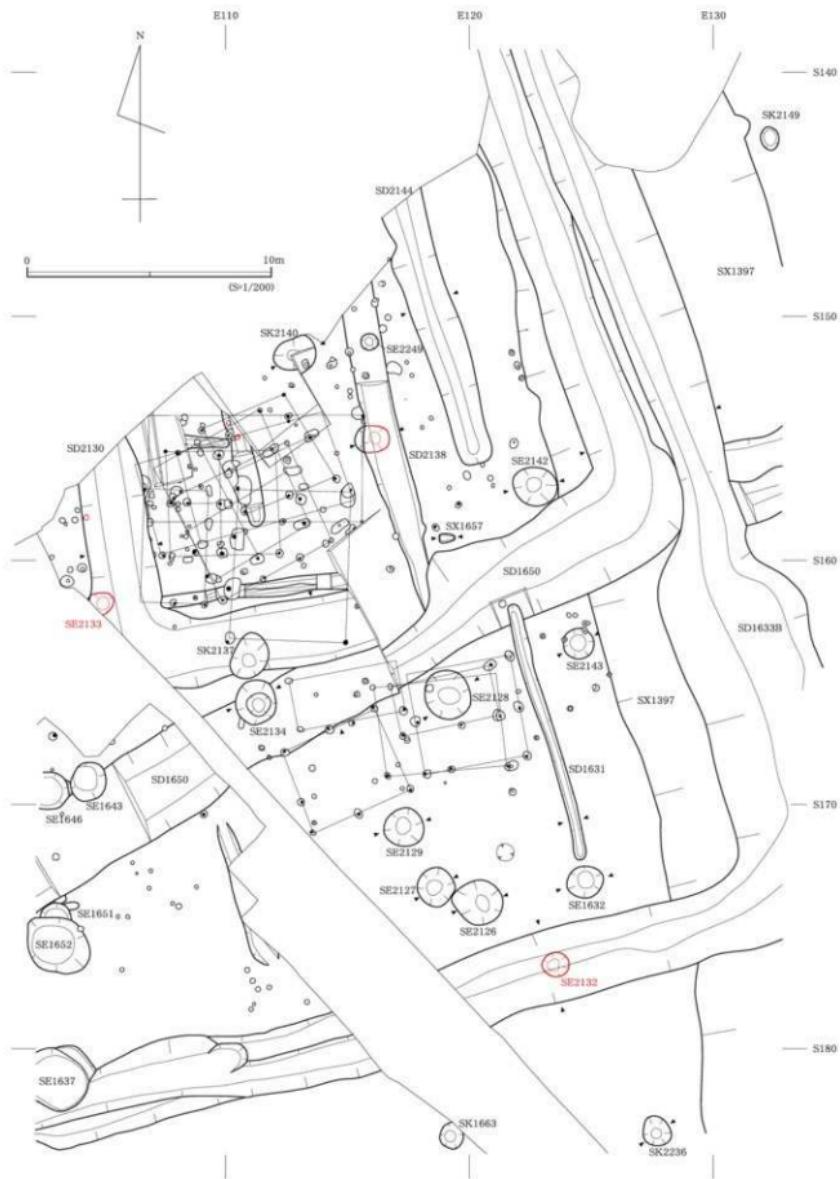
【SB2381建物跡】(図版15・19)

東西3間、南北1間の東西棟

建物跡である。SD2130・2138溝跡より古い。柱穴は6個検出し、4カ所で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長約8.7mで、柱間は2.4~3.2m、梁行は約4.3mである。建物の方向は南側柱列で測るとE-0°-Nである。柱穴掘方は径20~45cmの楕円形で、深さは



図版15 SB2381・2382建物跡柱穴断面



図版16 A区北端の検出遺構（2）－東側



A区北端 西側
(南西から)

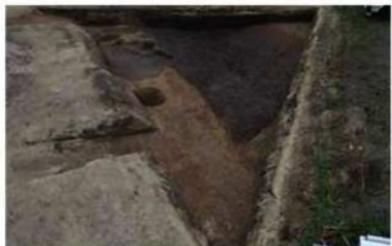
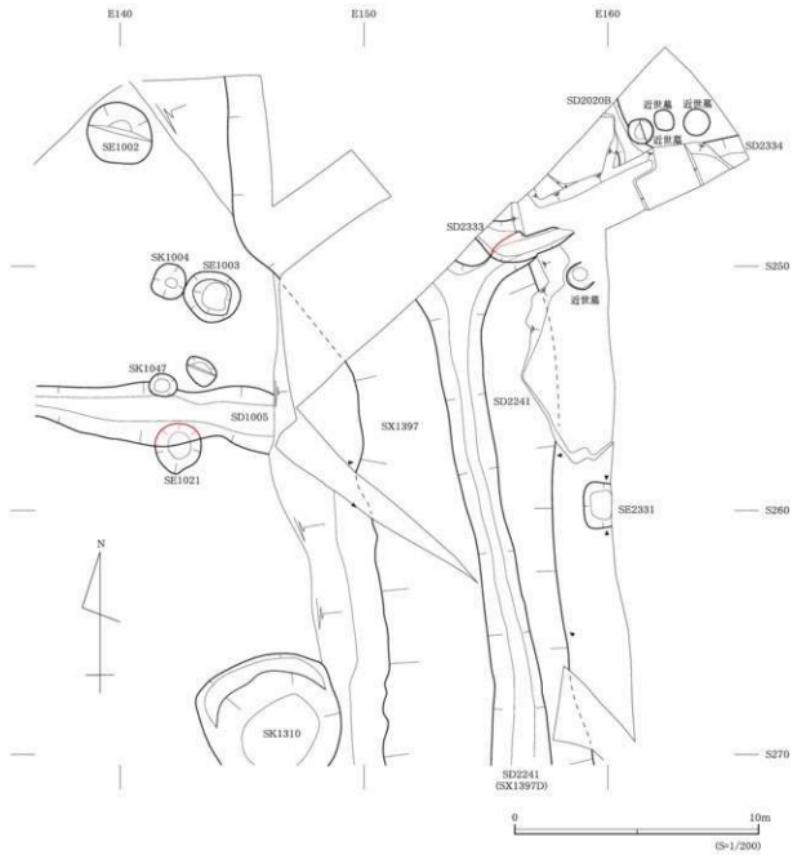


A区北端 東側
(北西から)



SB2381～2388
(北から)

図版17 A区北端の空中写真



全景（南から）



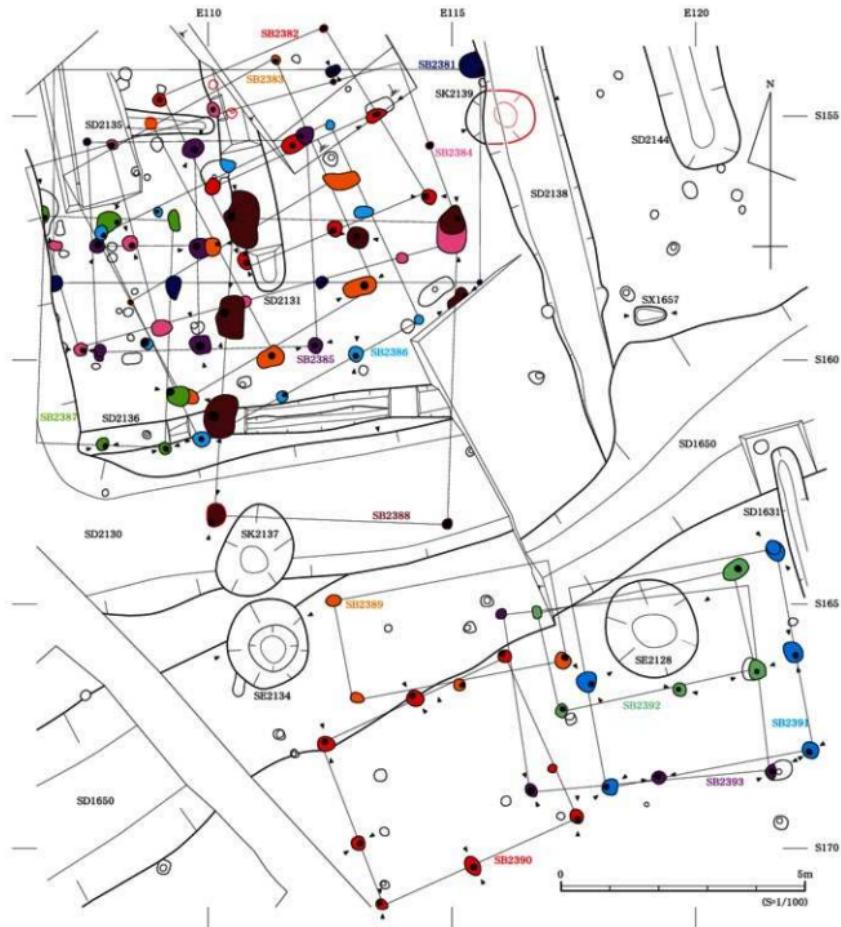
全景（東から）

図版 18 B2区東端の検出造構

約20cm、埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。柱痕跡は直径9~11cmの円形である。

【S B 2382建物跡】(図版15・19)

東西2間、南北2間の建物跡である。S B 2385建物跡、SD 2131溝跡より古い。建物の側柱列7個と、建物の内部にあたる(S 2, W 2)の位置に柱穴を検出し、これらのうち7ヵ所で柱痕跡を確認した。平面規模は東西方向が総長約3.9m、南北方向が総長約4.0mで、柱間は南北方向、東西方向ともに約2.0mである。建物の方向は南側柱列でE-20°-Nである。柱穴掘方は径30~40cmの梢円形



図版19 SB2381~2393建物跡平面図

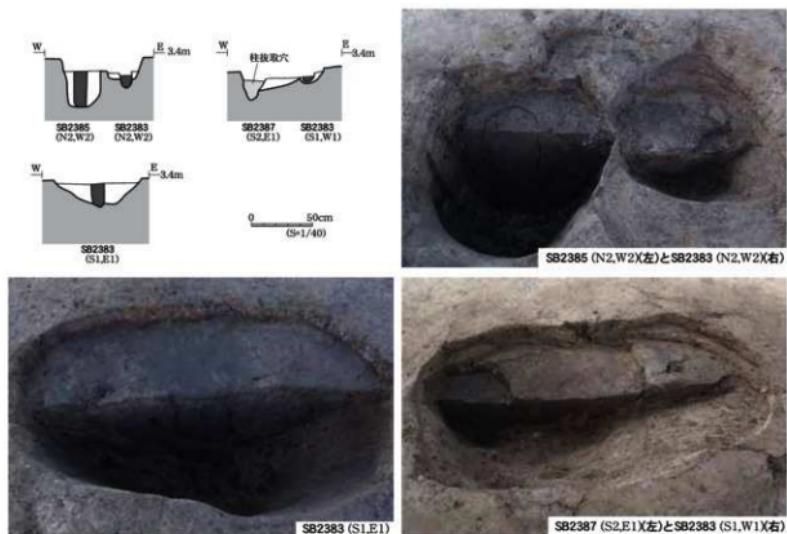
で、深さは約30cm、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトまたは褐灰色シルトである。柱痕跡は直径11～14cmの円形である。

【S B 2383建物跡】(図版19・20)

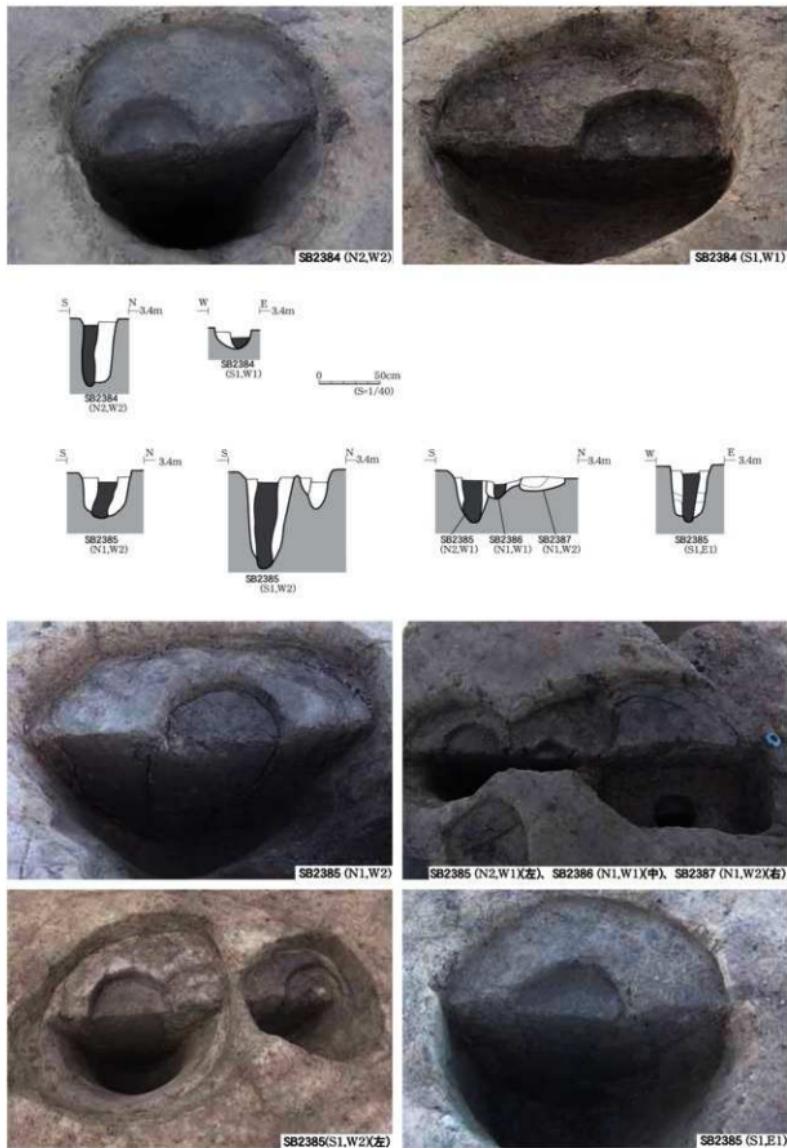
東西2間、南北2間の建物跡である。S B 2385建物跡より新しく、S B 2387建物跡、S D 2135溝跡より古い。建物の側柱列7個と、建物の内部にあたる(S 2, W 2)の位置に柱穴を検出し、これらのうち6ヶ所で柱痕跡を確認した。平面規模は東西方向が総長約4.5mで、柱間は2.1～2.6m、南北方向は総長約5.0mで、柱間は2.4～2.6mである。建物の方向は南側柱列でE-29°-Nである。柱穴掘方は径25～55cmの楕円形で、深さは20～30cm、埋土は地山ブロックを多く含む褐灰色シルトである。柱痕跡は直径10～16cmの円形である。

【S B 2384建物跡】(図版19・21)

東西3間、南北2間の身舎に、西側に縁（または廂）が1間付く東西棟建物跡である。S D 2131溝跡より新しく、S B 2387・2388建物跡、S D 2130溝跡より古い。身舎で9個、縁（または廂）で2個の柱穴を検出し、そのうち身舎5ヶ所、縁（または廂）1ヶ所で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長約6.8mで、身舎の柱間は1.1～3.4m、縁（または廂）の出は約1.5mであり、梁行は総長約3.9mで、柱間は1.8～2.1mである。建物の方向は南側柱列でE-16°-Nである。柱穴掘方は身舎、縁（または廂）ともに、径20～40cmの楕円形で、深さは約20cm、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトまたは褐灰色シルトである。柱痕跡は直径11～14cmの円形である。



図版20 SB2383・2385・2387建物跡柱穴断面



図版21 SB2384～2387建物跡柱穴断面

【SB 2385建物跡】(図版19・21)

東西2間、南北2間の建物跡である。SB 2382建物跡より新しく、SB 2383・2386建物跡より古い。建物の側柱列7個と、建物の内部にあたる(S 2, W 2)の位置に柱穴を検出し、これらのうち7ヵ所で柱痕跡を確認した。平面規模は東西方向が総長約4.4mで、柱間は2.1~2.3m、南北方向は総長が約4.3mで、柱間は約2.1mである。建物の方向は南側柱列でE-4°~Nである。柱穴掘方は径25~40cmの楕円形または隅丸方形で、深さは約40cm、埋土は地山ブロックを含む褐灰色シルトである。柱痕跡は直径11~19cmの円形である。

【SB 2386建物跡】(図版19・22)

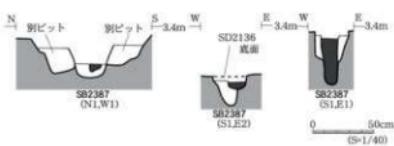
東西3間、南北2間の東西棟建物跡である。SB 2385・2387建物跡、SD 2131・2136溝跡より新しい。10個の柱穴を検出し、そのうち5ヵ所で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長約5.1mで、柱間は1.2~2.3m、梁行は総長約4.6mで、柱間は1.9~2.4mである。建物の方向は南側柱列でE-29°~Nである。柱穴掘方は径20~35cmの楕円形で、深さは20~40cm、埋土は地山
ブロックを含む黒褐色シルトまたは褐灰色シルトである。柱痕跡は直径7~12cmの円形である。

【SB 2387建物跡】(図版19・23)

南北が3間と推定され、東西2間の南北棟建物跡である。SB 2383・2384建物跡、SD 2136溝跡より新しく、SB 2386建物跡、SD 2130溝跡より古い。6個の柱穴を検出し、そのうち4ヵ所で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長約4.7mで、柱間は1.1~1.8mと推定され、



図版22 SB2386建物跡柱穴断面

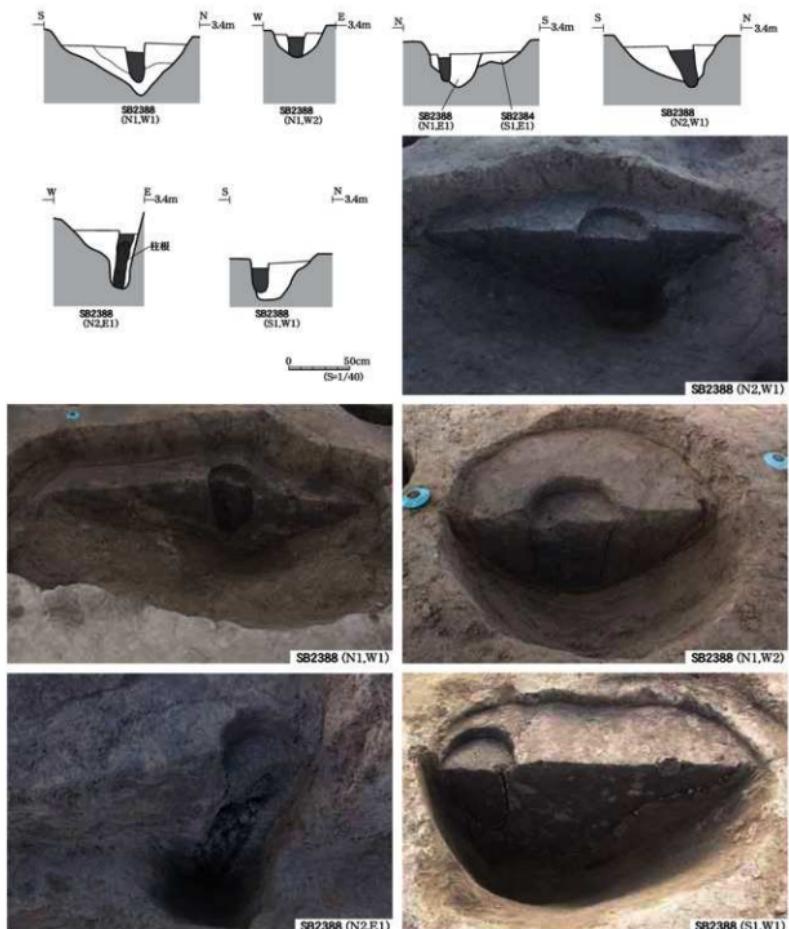


図版23 SB2387建物跡柱穴断面

梁行は総長2.7mで、柱間が1.2~1.5mである。建物の方向は東側柱列でN-2°-Eである。柱穴掘方は径25~45cmの楕円形で、深さは20~30cm、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。柱痕跡は直径10~12cmの円形である。

【SB2388建物跡】(図版19・24)

南北3間、東西2間の南北棟建物跡である。SB2384建物跡、SD2131・2136溝跡より新しく、SD2130溝跡より古い。8個の柱穴を検出し、すべての箇所で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が



図版24 SB2388建物跡柱穴断面

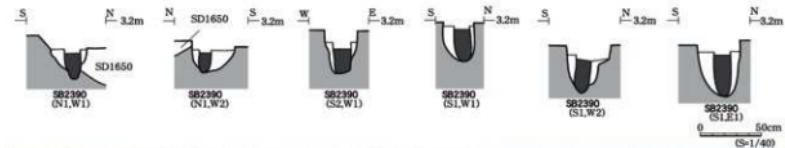
総長約6.3mで、柱間は2.0～2.2m、梁行は総長約4.6mで、柱間は2.1～2.6mである。建物の方向は西側柱列でN-4°-Eである。柱穴掘方は45～100cmの隅丸方形または楕円形で、深さは40～60cm、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトまたは灰黄褐色シルトである。柱痕跡は直径10～20cmの円形である。

【SB2389建物跡】(図版19)

東西2間、南北1間の東西棟建物跡である。SD1650区画溝跡より新しい。4個の柱穴を検出し、そのうち2ヶ所で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長約4.3mで、柱間は約2.2m、梁行は約2.1mである。建物の方向は南側柱列でE-10°-Nである。柱穴掘方は直径25～30cmの円形で、深さは約40cm、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。柱痕跡は直径10～15cmの円形である。

【SB2390建物跡】(図版19・25)

東西2間、南北2間の東西棟とみられる建物跡である。SD1650区画溝跡より新しい。8個の柱穴を検出し、そのうち7ヶ所で柱痕跡を確認した。平面規模は東西方向が総長約4.4mで、柱間は2.1～2.3m、南北方向は総長約3.5mで、柱間は1.3～2.2mである。建物の方向は南側柱列でE-23°-Nである。柱穴掘方は径20～35cmの楕円形で、深さは約30～45cm、埋土は地山ブロックを含む黒褐



図版25 SB2390建物跡柱穴断面

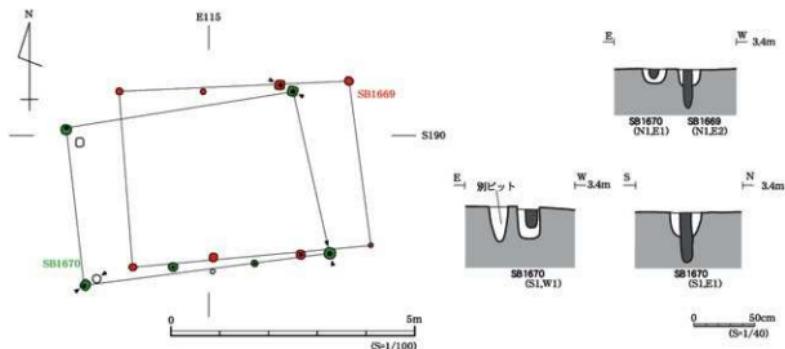
色シルトである。柱痕跡は直径10~15cmの円形である。

【S B 2391建物跡】(図版19・27)

東西1間、南北2間の建物跡である。5個の柱穴を検出し、そのうち4カ所で柱痕跡を確認した。平面規模は東西方向が約4.1m、南北方向が総長約4.2mで、柱間は2.0~2.2mである。建物の方向は東側柱列でN-10°-Wである。柱穴掘方は径30~45cmの楕円形または圓丸方形で、深さは30~35cm、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。柱痕跡は直径12~20cmの円形である。

【S B 1669建物跡】(図版26)

東西3間、南北1間の東西棟建物跡である。8個の柱穴を検出し、そのうち3カ所で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長約4.9mで、柱間は1.4~1.8m、梁行は約3.6mである。建物の方向は南側柱列でE-5°-Nである。柱穴掘方は一辺15~20cmの方形または円形で、深さは約20cm、埋土は地山ブロックを含む暗褐色シルトまたは黒褐色シルトである。柱痕跡は直径約8cmの円形である。



図版26 SB1669・1670建物跡

遺構名	遺物回数	建物内 桁行(東西)	平面規 模			建物の方向	柱痕跡	柱穴掘方 (cm)	柱穴 規格(cm)	備考	図版	
			面積(m ²)	東西方向柱間距離(m)	南北方向柱間距離(m)							
SB2381	3	1 東西	8.7	南 2.4~3.1	3.2	4.3	東 4.3	E-0°-N	9~11	20~45	楕円形	19
SB2382	3	2 東	—	南 1.9~2.0	—	4.0	東 2.0~2.0	E-20°-N	11~14	30~40	楕円形	19
SB2383	2	2 東	—	南 2.1~2.4	—	5.0	東 2.4~2.6	E-29°-N	南 10~10	25~55	楕円形、円形 建物内部に柱穴あり	19
SB2384	3+1	2 東西	7.9	南 1.5~1.9	3.4~1.1	3.9	西入 2.1~1.8	E-16°-N	南 11~14	20~40	円形	19
SB2385	2	2 東	—	南 2.1~2.3	—	4.3	西 2.1~2.2	E-4°-N	南 11~19	25~40	楕円形、圓丸形 西面に柱または縫合がつく	19
SB2386	3	2 東西	5.1	南 1.9~1.7	1.5	4.6	西 2.3~2.3	E-29°-N	南 7~12	20~35	楕円形	19
SB2387 (3)	2	南北	4.7	東 3.0~3.2	1.1	2.7	北 1.5~1.2	N-2°-E	東 10~12	25~45	楕円形	19
SB2388	3	2 南北	6.3	西 2.0~2.1	2.2	4.6	北 2.6~2.1	N-4°-E	西 10~20	45~100	圓丸形、楕円形	19
SB2389	2	1 東西	4.3	南 2.2~2.1	—	2.1	西 2.1	E-10°-N	南 10~15	25~30	円形	19
SB2390	2	2 東西	4.4	南 2.1~2.3	—	3.5	西 2.2~1.3	E-23°-N	南 10~15	20~35	楕円形	19
SB2391	1	2 東	—	4.1	南 4.1	4.2	東 2.2~2.0	N-10°-W	南 12~20	30~45	楕円形、圓丸形	19
SB2392	2	1 東	—	4.1	南 2.4~1.6	2.1	西 2.1	E-11°-N	南 10~13	20~45	圓丸形	19
SB2393	2	1 東	—	5.0	南 2.6~2.4	3.7	西 3.7	E-5°-N	南 13~15	20~30	円形	19
SB1669	3	1 東	9.9	南 1.7~1.8	1.4	3.6	西 3.6	E-5°-N	南 8	15~20	方孔、円形	26
SB1670	3	1 東西	5.1	南 1.8~1.7	1.5	3.4	東 3.4	E-8°-N	南 9	15~20	円形	26

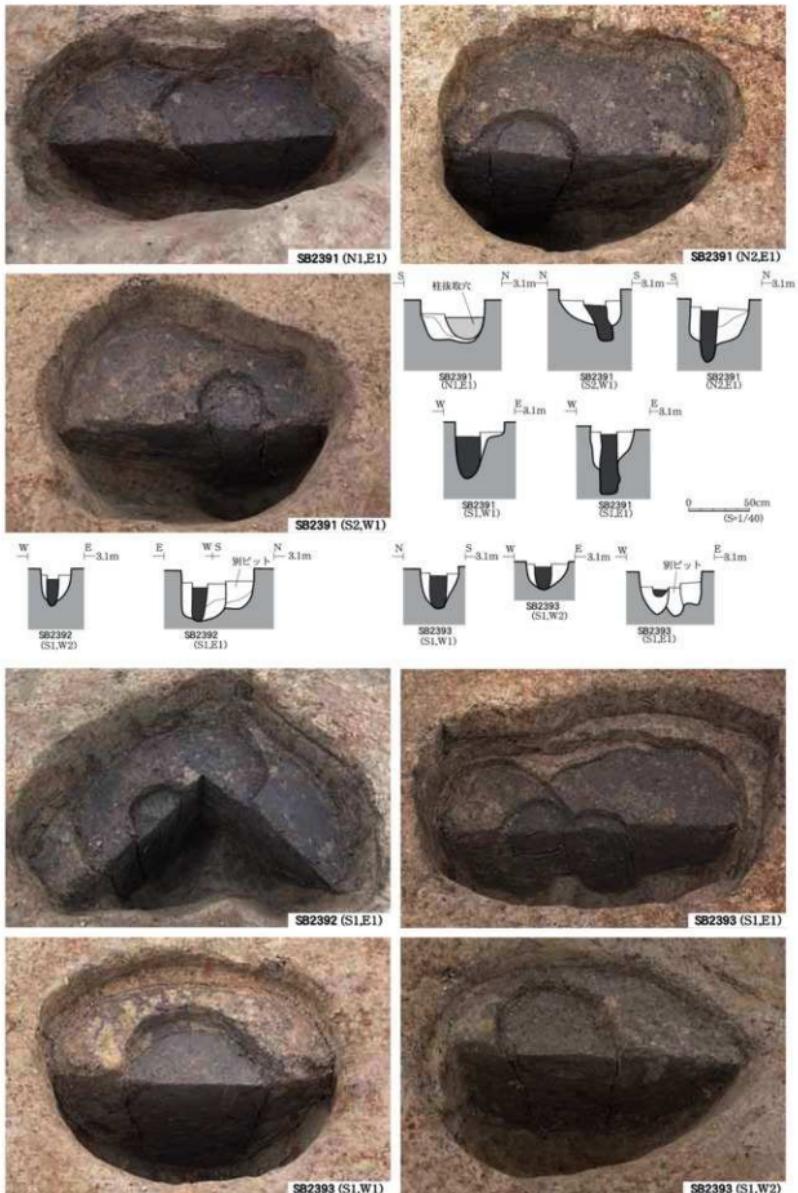
* () 内の数値は推定

平面回数の欄で「3+2」となるのは「身合3間、縫（または南）2間」であることを示す。

*斜体字は縫、縫または南の柱穴を示す。

*柱回数は、東西方向のものは西から南北方向のものは北から順に記した。

第2表 A区建物跡属性表



図版27 SB2391～2393建物跡柱穴断面

【S B 1670建物跡】(図版26)

東西3間、南北1間の東西棟建物跡である。6個の柱穴を検出し、すべての箇所で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長約5.1mで、柱間は1.5~1.8m、梁行は約3.4mである。建物の方向は南側柱列でE-8°-Nである。柱穴掘方は径15~20cmの円形で、深さは約20~30cm、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。柱痕跡は直径約9cmの円形である。

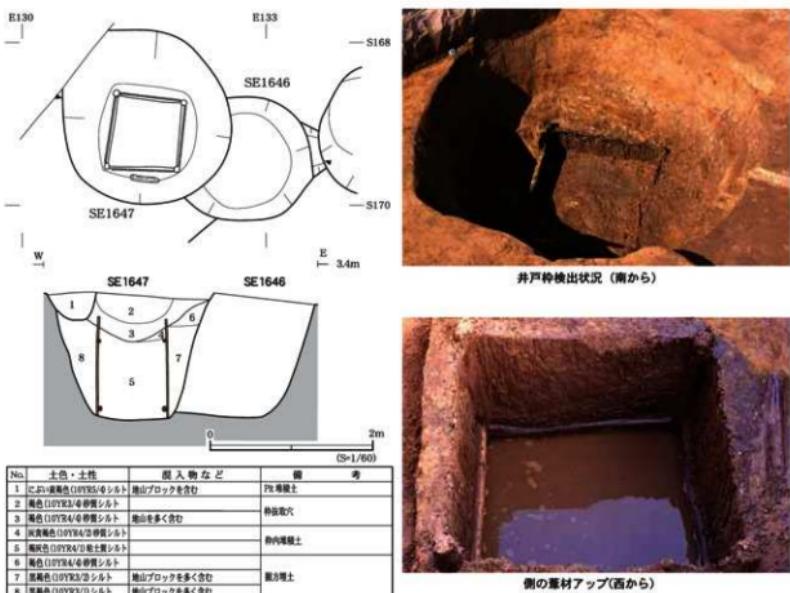
C. 井戸跡

A区で30基、B1区で2基、B2区で1基検出した。A区の分布をみると、SD1633やSD1650といった区画溝跡の周辺に多く分布する。とくに西側は、東西10m、南北14mの狭い範囲に13基の井戸が集中するが、建物群とは重複しない。これに対し東側は11基が散在しており、建物群と重複するものがある。33基の井戸のうち枠を有するのは1基(SE1647)のみで、他は素掘りである。したがって、SE1647を除く素掘り井戸は一括して概要を述べることとし、個別データは第3表にまとめた。

(1) 井戸側を有するもの

【SE1647井戸跡】(図版28)

A区北側北端で確認した草を簾状に組んだ枠をもつ井戸跡である。SE1646井戸跡より新しい。掘



図版28 SE1647井戸跡

方の平面形は 2.2×2.1 mの円形で、深さは1.5mある。底面は一辺が1.1mほどの方形で、断面形は円筒形である。枠の内法は80cmで、葦を縦方向に簾状に立て、それを隅柱に組み込んだ横桟で保持している。横桟は2段確認でき、径6~8cmの半割材を使用している。葦簾組の井戸は、ほかにB1区で2基検出している（SE1534・1539『』に収録）が、これらとはSE1647が隅柱を伴う点で異なる。

堆積土は枠内堆積土（4・5）、枠抜取穴堆積土（2・3）、掘方埋土（6~8）に分けられる。遺物は枠内と抜取穴から出土している（図版29）。枠内から陶器椀（3）やモモ核、抜取穴から陶器擂鉢（1）や椀（4）、土師質土器灯明皿（2）、砥石（6）、キセル（5）、鉄滓、モモ核、掘方埋土から瓦質土器が出土している。



図版29 SE1647井戸跡出土遺物

(2) 素掘りのもの (図版30~32)

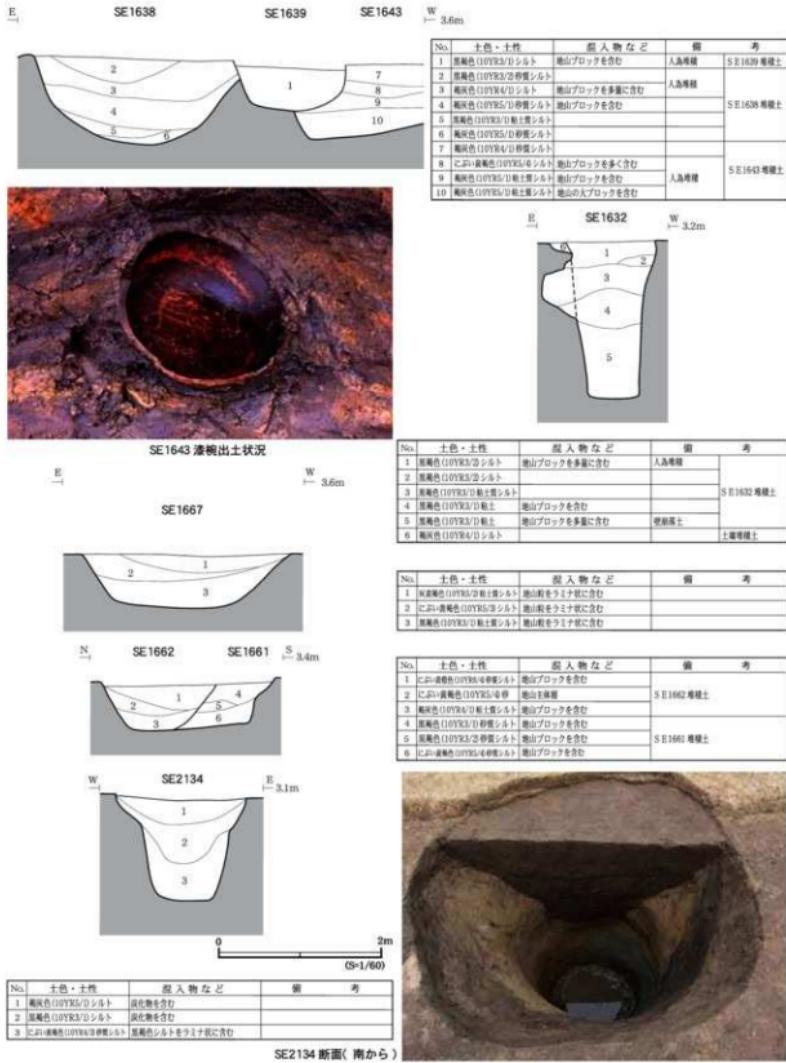
A区で29基、B1区で2基、B2区で1基検出した。平面形は梢円形が7基、隅丸方形が1基のはかは、円形もしくは円形とみられるものが24基である。断面形は円筒形が30基と主体を占め、他に漏斗形が2基認められる。規模は径が0.7~3.8m、深さは0.4~1.9mあるが、18基は径1.1~2.0m、深さ0.6~1.4mの範囲に入る。堆積土は、下部が壁の崩落土を含む自然堆積土で、上部は人為堆積のものと自然堆積のものが認められる。前者は人為的に埋め戻されたものであり、後者は開口したまま埋まつたことを示す。後者の場合、上部が埋没する過程で、遺物や炭化物、焼土、灰からなる廃棄層が認められる場合がある (SE 2120・2128・2129)。

遺物は底面からのものは少なく、多くは堆積土から出土している (図版33~36)。SE 1637の堆積土から染付鉢 (34-2)、陶器擂鉢・甕、近世の丸瓦、ウマもしくはウシの歯、モモ核、SE 1638堆積土から瓦質土器や板碑破片、SE 1639堆積土から銭貨「開元通寶」(34-9)、SE 1641堆積土から岸糞産陶器香炉もしくは鉢 (34-4)、陶器擂鉢・鉢、SE 1643堆積土から漆椀 (34-6)、木製容器底板 (33-10)、自在鉤 (33-8)、砥石 (33-7)、巻貝、SE 1646堆積土から鉄滓が付着した壁土、SE 1648堆積土から染付皿 (34-3)、陶器、ウマとみられる四肢骨、モモ核、SE 1651堆積土から瀬戸美濃産陶器菊皿 (34-1)、SE 1652の底面から差歎下駄 (34-7)、堆積土から陶器、砥石 (34-8)、SE 1656堆積土から常滑産甕 (33-4)、SE 1662堆積土から常滑産片口鉢、SE 2126堆積土から陶器皿、SE 2128堆積土から渥美産甕 (34-5) や貝、SE 2129の4

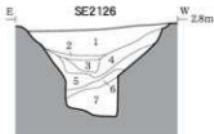
遺構	区	構造	平面形	断面形	規模 (m)	深さ (m)	堆積土の状況	出 土 遺 物	備 考	図 平面図
SE 1632	A	素掘	円形	円筒形	1.1×1.1	1.9	自然→人為			16 30
SE 1635	A	素掘	円形	円筒形	2.2×2.0	0.9				14
SE 1638	A	素掘	梢円形	円筒形	1.9×1.5	0.9			SD 1650→SE 1636	14
SE 1637	A	素掘	梢円形	円筒形	2.6×2.5	0.9		染付烟頭、陶器擂鉢、陶器甕、丸瓦、馬or牛頭、モモ核	SD 1633→SE 1637 第 周より新	14
SE 1638	A	素掘	梢円形	内筒形	3.1×2.8	1.1	自然→人為	瓦頭、板碑破片	SE 1638→SE 1639	14 30
SE 1639	A	素掘	円形	円筒形	1.5×1.4	0.6		開元通寶 (初唐621年)	SD 1650→SE 1638→1643→SE 1639	14 30
SE 1641	A	素掘	円形	円筒形	2.0×2.1×1.7	1.1		陶器香炉? (近世)、陶器擂鉢、陶器甕?	SE 1641→SE 1642	14
SE 1642	A	素掘	円形	円筒形	1.2×1.1	0.8			SD 1650→SE 1641→SE 1642	14
SE 1643	A	素掘	梢円形	円筒形	3.8×2.4×2.0	0.9	人為	砥石、律鉢、容器底板、自在鉤、カキ、サル	SD 1650→SE 1643→SE 1639→SK 1649	14 30
SE 1645	A	素掘	円形	円筒形	1.7×1.5	0.4		地洋 (螺貝) ロクロ、素焼き		14
SE 1646	A	素掘	円形?	円筒形	1.6×1.7	1.4		跳泮 (螺貝付)	SD 1650→SE 1646→SE 1647	14
SE 1647	A	木桶	円形	円筒形	2.2×2.1	1.5	自然→人為	陶器甕、モモ核、仲抜穴 口 陶器擂鉢、陶器香炉止め (仲の方法: 80mm)、モモ核、能力? 瓦頭	SE 1646→SE 1647 第 周	28 28
SE 1648	A	素掘	円形	円筒形	1.6×1.4	1.3		染付鉢、陶器、馬骨、モモ核	SD 1650→SE 1648	14
SE 1651	A	素掘	円形	内筒形	1.9×1.9	1.3		陶器香炉 (近世)、モモ核	SE 1651→SE 1652 第 周	14
SE 1652	A	素掘	円形	円筒形	1.6×1.6	1.4		底) 差歎下駄 地陶、砥石	SE 1651→SE 1652 第 周	14
SE 1653	A	素掘	円形	円筒形	1.5×1.3	0.4				14
SE 1656	A	素掘	円形	円筒形	1.7×1.6	0.6				6
SE 1661	A	素掘	円形?	円筒形?	1.7×1.3以上	0.6			SE 1661→SE 1662	6 30
SE 1662	A	素掘	円形	円筒形	1.8×1.5	0.6			SE 1661→SE 1662	6 30
SE 1667	A	素掘	円形	円筒形	2.5×2.0	0.6	自然			6 30
SE 2120	B1	素掘	梢円形	円筒形	2.0×1.7	1.0			SK 2119→SE 2120632	6 32
SE 2126	A	素掘	梢円形	円筒形	2.2×1.8	1.1	自然→人為	陶器甕?		16 31
SE 2127	A	素掘	円形	円筒形	1.8	1.1	自然	礫 砥石		16 31
SE 2128	A	素掘	円形	円筒形	2.0×1.9	1.2		陶器甕、貝殻		16 31
SE 2129	A	素掘	円形	縦半形	1.8	1.3		4個) 陶器甕、貝殻	4個から陶器甕一箇一括出土	16 31
SE 2132	A	素掘	円形	円筒形	1.1×1.0	1.2			SE 2132→SD 1633	16 31
SE 2133	A	素掘	円形?	円筒形?	0.9	1.2			SE 2133→SD 2130	16
SE 2134	A	素掘	円形	漏斗形	1.9×1.7	1.3		ロクロ、須恵器、モモ核	SD 1650→SE 2134 第 周7	16 30
SE 2142	A	素掘	円筒形	漏斗形	1.8×1.6	1.1		木鉢、ロクロ甕		16 32
SE 2143	A	素掘	円形	円筒形	1.3	1.2				16 32
SE 2249	A	素掘	円形	円筒形	0.7	0.6			SD 2138→SE 2249	16 32
SE 2331	B2	素掘	梢円形	円筒形	1.9×1.1以上	0.8	自然→人為	3個上面) 塗大皿		18 32
SE 2370	B1	素掘	円形	円筒形	0.9	0.6				6 6

*出土遺物のロクロはロクロかわらけ。手づくねは手づくねかわらけを指す

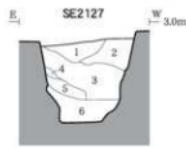
第3表 A・B区井戸跡属性表



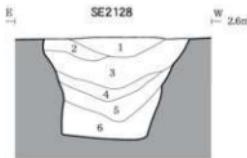
図版30 A・B区戸路 (1)



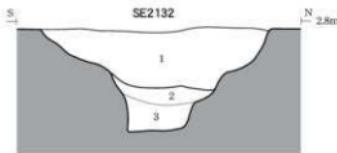
No.	土色・土性	埋入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山ブロックを含む	
2	黒褐色(10YR3/2)シルト		
3	褐色(10YR4/2)粘土		
4	褐色(10YR4/2)シルト	地山ブロックを含む	
5	褐色(10YR4/2)シルト	地山ブロックが多く含む	
6	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山ブロックを含む	
7	オリーブ褐色(10Y3/2)砂質シルト	地山ブロックを含む	



No.	土色・土性	埋入物など	備考
1	褐色(10YR4/2)シルト	地山ブロックや風化物を含む	
2	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山ブロック主体、風化物を含む	
3	褐色(10YR4/2)シルト	地山ブロック多く含む	
4	褐色(10YR4/2)砂質シルト	地山ブロックを含む	
5	褐色(10YR4/0)軽石質シルト	地山ブロック多く含む	
6	褐色(10YR4/0)砂質シルト	地山ブロックを多量に含む	



No.	土色・土性	埋入物など	備考
1	褐色(10YR4/2)シルト	地山や骨を含む	
2	黒褐色(10YR3/2)シルト	風化層	
3	褐色(10YR4/2)シルト	地山や骨を含む	
4	褐色(10YR4/2)シルト	地山ブロックを含む	
5	褐色(10YR4/0)軽石質シルト	地山ブロック層	
6	褐色(10YR4/0)軽石質シルト	地山大ブロックを含む	



No.	土色・土性	埋入物など	備考
1	灰青褐色(10YR5/2)シルト	地山や骨を含む	
2	黒褐色(10YR3/2)シルト	風化層	
3	褐色(10YR4/2)シルト	地山や骨を含む	



No.	土色・土性	埋入物など	備考
1	褐色(10YR5/0)シルト	風化層を含む	
2	褐色(10YR3/0)シルト	風化層を多く含む、灰を含む	複層
3	褐色(10YR5/0)軽石質シルト	地山ブロック多く含む	
4	褐色(10YR4/0)砂質シルト	地山ブロックを含む	風景・骨・鉄出土
5	褐色(10YR5/0)砂質シルト		白鳥層

0 2m
(S=1/60)

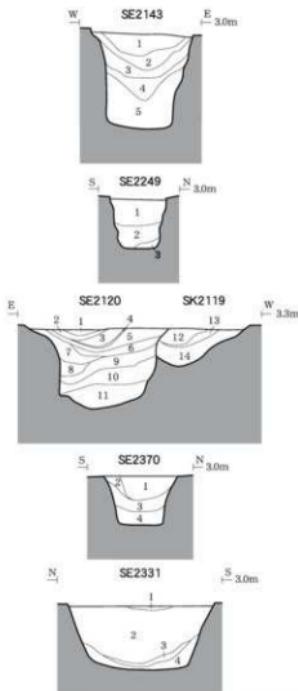


SE2129 断面(北から)



SE2129 4 層遺物出土状況

図版31 A・B井戸跡 (2)



No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐色山/ブロック主張		
2	黒褐色(10YR3/1)粘土	地山ブロックを含む	人為堆積
3	黒褐色(10YR2/1)粘土		
4	黒褐色(10YR3/1)粘土	地山面をラミナ状に含む	

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐色山/ブロック主張		
2	黒褐色(10YR3/1)粘土	地山ブロックを含む	人為堆積
3	黒褐色(10YR2/1)粘土		
4	黒褐色(10YR3/1)粘土	地山面をラミナ状に含む	

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐色山/ブロック主張		
2	黒褐色(10YR3/1)粘土	地山ブロックを含む	人為堆積
3	黒褐色(10YR2/1)粘土		
4	黒褐色(10YR3/1)粘土	地山面をラミナ状に含む	

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)シルト	泥化物を含む	
2	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山/ブロック多層に含む	
3	黒褐色(10YR3/2)シルト		
4	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山/ブロックや泥化物を含む	
5	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山/ブロックや泥化物を含む	
6	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山/ブロックや泥化物を含む	
7	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山/ブロックを多く含む	
8	灰褐色(10YR4/2)砂質シルト	地山/ブロックや泥化物を含む	
9	黒褐色(10YR4/1)粘土シルト	地山/ブロックや泥化物を含む	
10	黒褐色(10YR4/1)粘土シルト	地山/ブロックを多層に含む	砂質土
11	黒褐色(10YR4/1)粘土シルト	地山/ブロックを多層に含む	
12	黒褐色(10YR3/1)シルト	泥化物を含む	
13	黒褐色(10YR3/1)シルト	地山/ブロックを含む	堆積土
14	黒褐色(10YR3/1)シルト	地山/ブロックを多く含む	

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)シルト		
2	灰褐色(10YR4/2)シルト		
3	灰褐色(10YR4/2)シルト	黒褐色をラミナ状に含む	
4	灰褐色(10YR4/2)シルト	地山/ブロックを多く含む	

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)シルト	泥化物を含む	
2	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山/ブロック多層に含む	
3	黒褐色(10YR3/2)シルト		
4	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山/ブロックや泥化物を含む	
5	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山/ブロックや泥化物を含む	
6	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山/ブロックや泥化物を含む	
7	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山/ブロックを多層に含む	
8	灰褐色(10YR4/2)砂質シルト	地山/ブロックや泥化物を含む	
9	黒褐色(10YR4/1)粘土シルト	地山/ブロックや泥化物を含む	
10	黒褐色(10YR4/1)粘土シルト	地山/ブロックを多層に含む	

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山/ブロックを多層に含む	
2	黒褐色(10YR4/1)シルト	泥化物や地山/ブロックを含む	
3	黒褐色(10YR4/1)粘土シルト	地山/ブロックをラミナ状に含む、泥化物を含む	
4	黒褐色(10YR4/1)粘土シルト	地山/ブロックをラミナ状に含む	
5	黒褐色(10YR4/1)粘土シルト	地山/ブロックを多層に含む	

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山/ブロックを多層に含む	人為堆積
2	黒褐色(10YR4/1)粘土シルト	地山/ブロックを含む	
3	黒褐色(10YR4/1)粘土シルト	地山/ブロックを多層に含む	

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山/ブロックや泥化物を含む	
2	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山/ブロックを多く含む	
3	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山/ブロックや泥化物を含む	
4	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山/ブロックや泥化物を含む	
5	黒褐色(10YR4/1)粘土シルト	地山/ブロックや泥化物を含む	
6	黒褐色(10YR4/1)粘土シルト	地山/ブロックを多く含む	
7	黒褐色(10YR4/1)粘土シルト	地山/ブロックや泥化物を含む	
8	灰褐色(10YR4/2)砂質シルト	地山/ブロックや泥化物を含む	
9	黒褐色(10YR4/1)粘土シルト	地山/ブロックや泥化物を含む	
10	黒褐色(10YR4/1)粘土シルト	地山/ブロックを多層に含む	
11	黒褐色(10YR4/1)粘土シルト	地山/ブロックを多層に含む	
12	黒褐色(10YR3/1)シルト	地山/ブロックを含む	
13	黒褐色(10YR3/1)シルト	地山/ブロックを含む	
14	黒褐色(10YR3/1)シルト	地山/ブロックを多く含む	



SE2331 深大皿出土状況(3層上面)



SE2142 断面(北から)

図版32 A・B区井戸跡(3)



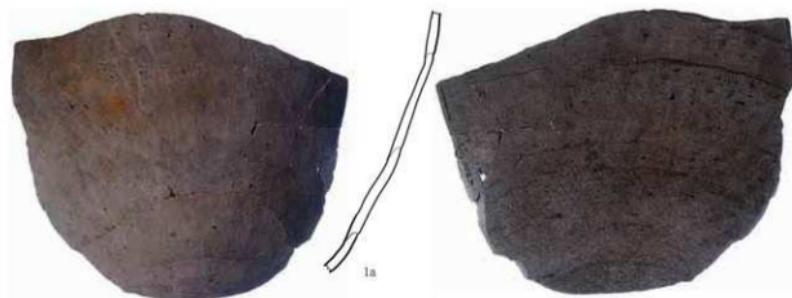
No.	出土遺物・部位	種 別	形 種	產 地	特 徵		(単位: cm)
					長	寬	
1	SK1658 帽繩土	陶器	壺	東美	押印格子		02018
2	SK2118 2層	陶器	壺	常滑	押印 破片を砾石に転用		04329
3	SK1649 帽繩土	陶器	壺	常滑	押印(集中) 破片を砾石に転用		02017
4	SK1656 帽繩土	陶器	壺	常滑	押印格子		02019
5	SK2331 下層	石製品	砾石	海存長2.7 幅7.2 厚5.6			04319
6	SE1640 帽繩土	金屬製品	釦				02296
7	SE1643 帽繩土	石製品	砾石				02383
8	SE1643 帽繩土	木製品	白合鉗	長16.1 幅7.4 厚3.0 [板目材]			02267
9	SE2142 帽繩土	木製品	鉤	通径10.9			04670
10	SE1643 帽繩土	木製品	鉤柶	径17.0 高1.2 [板目材]			02296

図版33 A・B井戸跡・土壤出土遺物



No.	出土遺物・部位	種別	圖	種	产地	特	圖	対
1	SEI651 雜墳土	陶器	菊斑		廻戸井處			030116
2	SEI637 雜墳土	梁竹		絲				030110
3	SEI648 雜墳土	梁竹		絲				030115
4	SEI642 雜墳土	陶器	香炉or鉢	岸				030111
5	SEI188 雜墳土	陶器	甕	圓底		押印變(?)		04277
6	SEI1631 雜墳土	漆器	椀		口徑12.2 寸合側6.8 壁厚4.8 現存:3/4 内底:黑色漆→赤色漆 外底漆:黑色漆→赤色漆 [施用地?]			022091
7	SEI1622 武周	木製品	漆盒下駒		台部:長10.8 寬12.9 厚1.9 [板目取り]			022227
8	SEI1623 雜墳土	石製品			長29.0 幅36.6 厚8.8 最打球			024463
9	SEI630 雜墳土	銅製品			[銅元通寶] (原 初鑄621年)			02270

図版34 A区井戸跡出土遺物



(1aの押印アップ)



(1bの押印アップ)

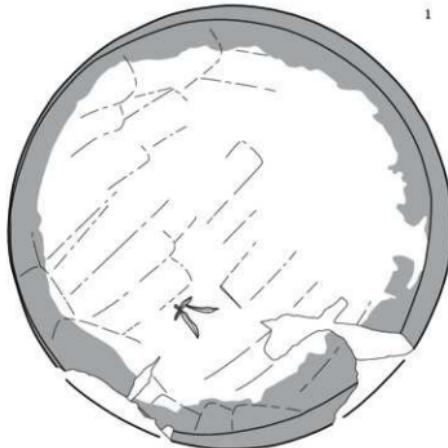
0 10cm
(S-1/6)

No.	出土層位	種 别	部 種	用 途	特	圖	登録
1	4層	陶器	甕	瓶	SD1633・下層と接合		04279

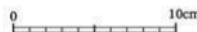
図版35 SE2129井戸跡出土遺物



1



(底の記号アップ)



(単位:cm)

No.	出土層位	種 别	形 様	材 地	特	量	登録
1	3層上面 漆器	大皿		径27.2×27.3 厚26.0	漆面1.0 底面に刻畫「六」		04180

図版36 SE2331井戸跡出土遺物

層から渥美産とみられる甕の大破片2点(35-1 a・b)、2層から砥石、SE2134堆積土からロクロかわらけ、須恵器、モモ核、SE2142堆積土から木鉢(33-9)、ロクロかわらけ、SE2331の3層上面から漆大皿(36-1)が出土した。

SE2129の甕は、胴部の大きな破片2点がバラバラになった状態で出土した(図版31右下)。また、

S E 2331の漆大皿は直径が27cmの大型品で、底面に「六」の刻書があり、完形のまま棄てられたとみられる（図版32右下）。なお、S E 2127の確認面からは砥石が出土している。

D. 土壙

20基確認した。これらは規模や平面形・断面形から3類に分けられる。このうちSK 1649・2118は個別の記述を行うが、他の土壙の概要是分類にしたがって述べることとし、それぞれのデータは第4表にまとめた。

1類：径もしくは最大径が3mを超える大型土壙

【SK 1649土壙】（図版14・37）

A区北西隅付近で検出した。平面形は長径が4.6m、短径が3.9mの楕円形である。底面はほぼ平坦で深さは1.1mあり、断面形は逆台形である。SD 1650区画溝跡やSE 1643井戸跡より新しく、SK 1640土壙より古い。底面の中央部には径5cmほどの杭を打ち込んで東西に立て並べており、あたかも土壙内部を分割しているようにみえる。杭は6本確認したが、横にわたす材は認められなかった。

堆積土は6層に分けられるが、いずれも人為堆積と考えられる。堆積土から常滑産甕（図版33-3）、壺、瓦質土器擂鉢、板磚破片、ウマとみられる四肢骨、モモ核が出土した。3は破片が砥石に転用されている。

類例としては、秋田県洲崎遺跡SK I 244・246竪穴状遺構があげられる（秋田県教育委員会2000）。平面形は長軸が6.5mを超えるひょうたん形で、くびれ部に材を用いた仕切状の施設が設けられている。仕切は打ち込んだ杭に対して横木を数段わたりしておらず、柵状になっている。また、SK I 246には溝状の掘り込みが伴っており、出入口とみられる。

【SK 2118土壙】（図版6・38）

B区北東部で検出した。平面形は長径が3.7m、短径が3.4mの楕円形である。底面は中央に向かって傾斜しており、深さは0.9m、断面形は擂鉢形である。堆積土は7層に分けられ、下部は自然堆積土

遺構	区	平面形	断面形	規模 (m)	深さ (m)	分類	堆積土の状況	出土 遺物	備考	回 平面 断面
SK 1649	A	楕円形	擂鉢形	2.0×1.6	0.7	2	自然+人為	打、板磚破片	SD 1650→SK 1649→SK 1640	14 37
SK 1649	A	不整楕円形	逆台形	4.67×3.9	1.1	1	人為	常滑甕？瓦混擂鉢、板磚 破片、牛骨馬骨、セモ核	底面に杭群 SE 1643・SD 1650→SK 1649→SK 1640	14 37
SK 1659	A	円形	円筒形	径0.9	0.6	3				14 37
SK 1663	A	円形	円筒形	1.1×1.0	0.5	3				6 37
SK 1665	A	円形	圓形	径1.0	0.2	3	自然			6
SK 1666	A	円形	圓形	0.9×0.8	0.2	3				6
SK 2101	A	円形	圓形	径0.8	0.2	3			SK 2101→SD 1501	6
SK 2116	A	円形	圓形	径1.5	0.2	2	自然	土師器		6
SK 2118	A	楕円形	擂鉢形	3.7×3.4	0.9	1	自然+人為	2層 常滑甕、ロクロ	大土壙	6 38
SK 2119	A	円形?	擂鉢形	径1.4?	0.5	2			SK 2119→SE 2120	6 32
SK 2121	A	円形	圓形	0.8×0.7	0.2	3		ロクロ		6
SK 2122	A	円形?	擂鉢形	1.6×1.0以上	0.6	2				6
SK 2127	A	楕円形	擂鉢形	2.0×1.4	0.8	2				6 38
SK 2130	A	楕円形	擂鉢形	1.4×1.1	0.7	2	自然		SK 2130→SD 2138	19 38
SK 2140	A	楕円?	走行形	1.8×1.5	1.0	2				16 38
SK 2236	A	円形?	擂鉢形	径1.8?	0.4	2	自然			6 38
SK 2317_B.1	B.1	円形?		径0.7?		3				6
SK 2318_B.1	B.1	楕円形		0.8×0.5		3				6
SK 2369_B.1	B.1	円形	円筒形	1.1×0.9	0.6	3	自然	切石		6 38
SK 2371_B.1	B.1	楕円形	擂鉢形	1.7×1.2	1.0	2	自然			6 38

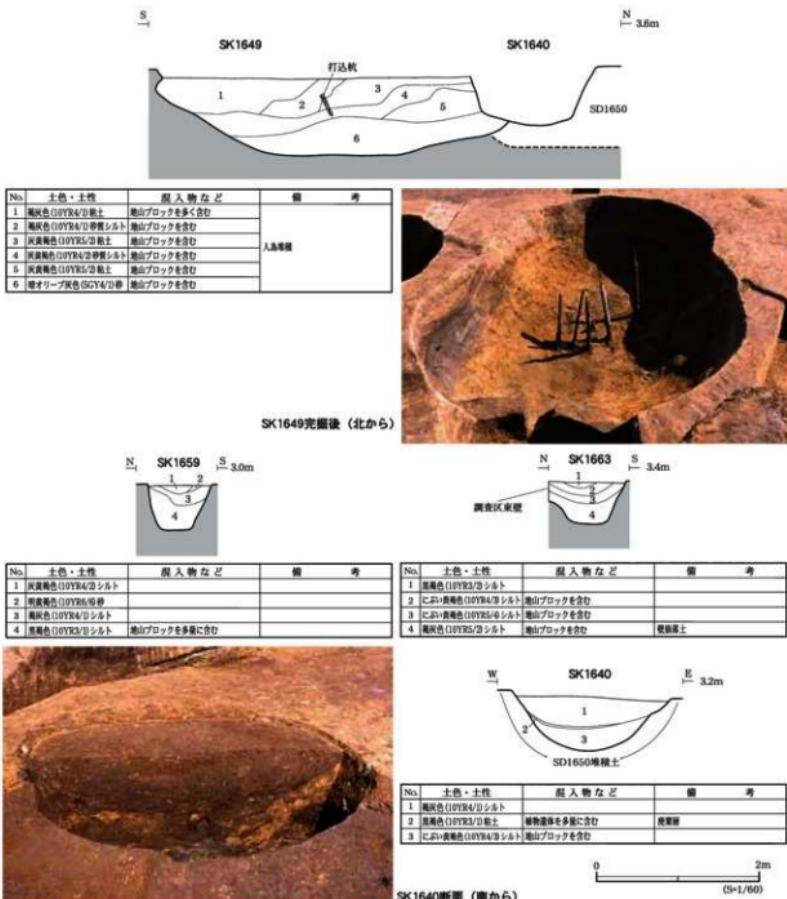
*出土遺物のロクロはロクロかわらけ。手づくねは手づくねむわらけをさす。

第4表 A・B区土壙属性表

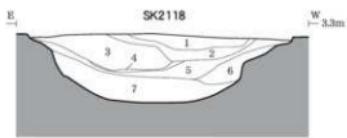
(5～7層)で、その上に炭化物の廃棄層(4層)が認められる。1～3層は人為的な埋土と考えられる。4層から常滑産甕(図版33-2)やロクロかわらけが出土した。2は破片が砾石に転用されている。

2類：径もしくは長軸の長さが1.4m以上～3m未満の中型土壙(図版37-38)

A区北東部で3基(SK2137・2139・2140)、北西部で1基(SK1640)、南東部で2基(SK2122・2236)、B1区東側で3基(SK2116・2119・2371)検出した。平面形は円形もしくは梢円形で、深さは0.2～1.0mあるが、0.4～0.8mのものが6基と多い。断面形はSK2116が皿形、SK



図版37 A・B区土壙(1)



No.	土色・土性	組入物など	備考
1	褐色(10YR4/1)シルト	炭化物や粘土を多く含む	
2	黒色(10YK2/2)シルト	粘土を多く含む。灰や赤山ブロックを含む	人為堆積
3	褐色(10YR3/2)シルト	塊山ブロックを多く含む。炭化物を含む	
4	黒色(10YK2/2)シルト	炭化物を多く含む	炭化層
5	褐色(10YR5/2)シルト	炭化物を含む	
6	褐色(10YR5/2)粘土質シルト	炭化物を含む	
7	褐色(10YR4/2)粘土質シルト	塊山ブロックを大量に含む	自然堆積

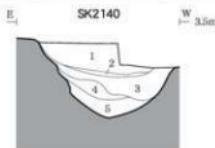


SK2118断面（北から）



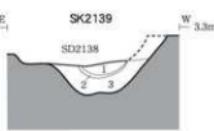
No.	土色・土性	組入物など	備考
1	褐色(10YR5/2)シルト		
2	褐色(10YR5/2)シルト		
3	褐色(10YR5/2)シルト		

No.	土色・土性	組入物など	備考
1	褐色(10YR5/2)粘土質シルト	褐色シルトブロックを含む	
2	褐灰色(10YR4/2)粘土質シルト		
3	褐灰色(10YR5/2)シルト	塊山をミナ灰に含む	



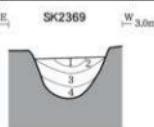
No.	土色・土性	組入物など	備考
1	褐色(10YR5/2)シルト		
2	褐色(10YR4/2)粘土質シルト		
3	褐灰色(10YR4/2)粘土質シルト		
4	褐灰色(10YR4/2)シルト	塊山を灰状に含む	
5	褐灰色(10YR4/2)粘土質シルト		

No.	土色・土性	組入物など	備考
1	地山ブロック主体	褐色粘土質シルトを含む	
2	褐灰色(10YR4/2)粘土質シルト		
3	褐灰色(10YR4/2)粘土質シルト	褐・灰化物質を多量に含む	
4	褐灰色(10YR4/2)シルト	地山を灰状に含む	
5	褐灰色(10YR4/2)粘土質シルト		



No.	土色・土性	組入物など	備考
1	褐色(10YR5/2)砂質シルト	炭化物や塊山ブロックを含む	
2	褐色(10YR5/2)砂質シルト	炭化物を含む	
3	褐色(10YR5/2)砂質シルト	地山ブロックを多量に含む	
4	褐灰色(10YR5/2)砂質シルト	地山ブロックを多量に含む	
5	褐灰色(10YR5/2)砂質シルト	褐色土をミナ灰に含む	

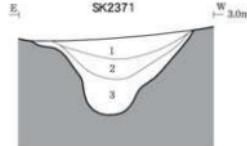
No.	土色・土性	組入物など	備考
1	褐色(10YR4/2)粘土	褐褐色粘土質シルトとの互層	
2	褐黃褐色(10YK5/2)粘土		
3	褐褐色(10YR3/2)粘土		



No.	土色・土性	組入物など	備考
1	褐色(10YR5/2)粘土	この・黒褐色粘土シルトブロックを含む	
2	褐褐色(10YR4/2)粘土シルト	褐色粘土をミナ灰に含む	
3	褐褐色(10YR4/2)粘土シルト	褐色粘土をミナ灰に含む	
4	褐褐色(10YR3/2)粘土		



No.	土色・土性	組入物など	備考
1	褐色(10YR4/2)粘土	褐褐色粘土質シルトとの互層	
2	褐黃褐色(10YK5/2)粘土		
3	褐褐色(10YR3/2)粘土		



図版38 A・B区土壤 (2)

1640が逆台形で、ほかの7基は擂鉢形である。堆積土は自然堆積であり、SK 1640は自然堆積の間に植物遺体の廐棄層が認められた。

3類：径や長軸の長さが1.0m前後より小さな小型土壠（図版37・38）

A区南部で4基（SK1659・1663・1665・1666）、B1区北東部で5基（SK2101・2121・2317・2318・2369）検出した。建物群と重複せず、SK2121・2317・2318が近接するほかは、まばらに分布する。平面形は円形や楕円形で、深さは0.2～0.6mあり、断面形は円筒形が3基（SK1659・1663・2369）、皿形が4基（SK1665・1666・2101・2116）である。堆積土は自然堆積とみられる。SK2121の堆積土からロクロかわらけ、SK2369の堆積土から凝灰岩切石が出土した。

E. 溝跡

13条検出した。このうち SD 2131・2136・2144・2241・2248は個別に記述し、他のデータは第5表にまとめた。

【SD 2241 溝跡】(図版 6・39)

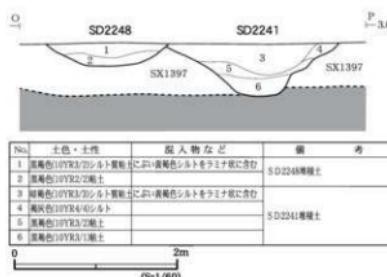
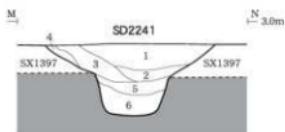
A区北東部からB2区東端で確認した南北溝跡で、106.6m分を検出した。『』で報告したSX1397Dと一連である⁽³²⁾。SX1397が形成された湿地跡の中央部に設けられており、B2区東端では東へ分岐している。SX1397遺物包含層より新しく、SD1633区画溝跡やSD2248溝跡より古い。上幅1.2～2.0m、下幅0.6～0.8m、深さは0.6～0.9mある。北半部の方向はN10°～20°Wである。底面はほぼ平坦で、断面形は下部が円筒形、上部は大きく開く。堆積土は6層に分けられるが、いずれも自然堆積とみられる。

遺物は堆積土から出土している(図版40・41)。1~4層からは手づくねかわらけ皿(10)、常滑産甕(4・5)、三筋壺(6・8・16)・片口鉢(14)、渥美産甕(7・9)、龍泉窯系青磁碗(1)・皿(3)、白磁皿(2)、青白磁甕、漆椀、板草履の芯(11・12)、砥石(17)、古代の平瓦

東出土遺物のロクロはロクロかわらけ、手づくねは手づくねかわらけ、在地は宮城県内で生産された中世陶器を指す。

新出土遺物のセリフはセリフ前から行、事次第は事次第、
新出土遺物の物語は新言書記を、() 内は生産地を指す。

第5表 A·B区潜踪属性表



図版39 SD2241・2248溝跡



No.	出土位置	種別	器種	產地	特		單體
					形	圖	
1	1~4層	青銅	劍		【大罕術分類銅劍系青銅劍：劍身】見込：片劑草文、底面：唐書「口」(比較)		04148
2	1~4層	白銅	三		【大罕術白銅劍】		04146
3	1~4層	青銅	三		【大罕術銅劍系青銅劍1-2c:劍身】		04147
4	1~4層	銅器	鑄	常熟	神印		04151
5	1~4層	銅器	鑄	常熟	神印		04150
6	1~4層	銅器	三點象	常熟			04153
7	1~4層	銅器	鑄	蘇美	神印 碎片を鐵石に転用 9と同一固体		04155
8	1~4層	陶器	三點象	常熟	複位灰陶は一本書き力		04152
9	1~4層	陶器	鑄	常熟	四凹2段 構造子母(ハケメウ工具) 碎片を鐵石に転用 7と同一固体		04154
10	1~4層	手づくね	三				04156
11	1~4層	木製品	板草履		残存長17.6 幅9.7 厚0.2		04065
12	1~4層	木製品	板草履		残存長24.0 幅10.8 厚0.4		04066

図版40 SD2241溝跡出土遺物 (1)



図版41 SD2241溝跡出土遺物（2）

(13)、モモ核が出土した。5・6層からは出土量が少なく、漆椀（15）、動物遺体（頭骨、下頬骨）が出土した（図版39左下）。1の底面には墨書「（此か）」が認められ、10の胎土はロクロかわらけと同じである。また、7・9・13・14は破片が砾石に転用されている。

【SD2248溝跡】（図版6・39）

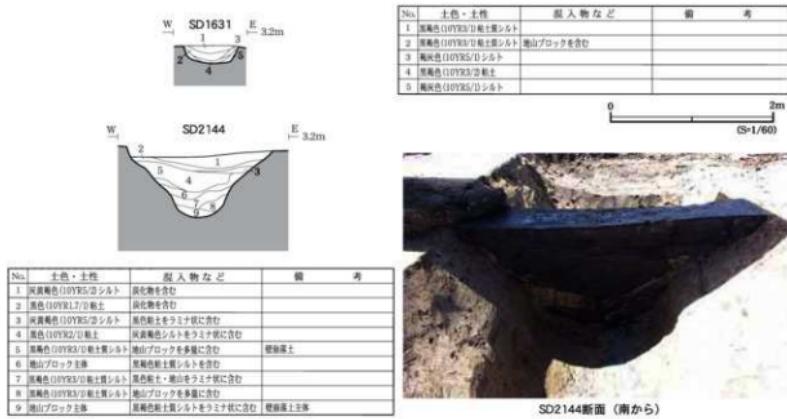
B1区東端からB2区東端で確認した南北溝跡で、25.0m分を検出した。SD2241に沿って南へ延び、B2区東端で東へ折れる。その先は擾乱で壊されているが、SD2333溝跡とは一連の遺構とみられる。SX1397遺物包含層、SD2241溝跡より新しい。上幅0.8～1.3m、下幅0.4～0.6m、深さは0.3mある。方向はN18°W前後である。底面はほぼ平坦で、断面形は皿形である。堆積土は2層に分けられるが、いずれも自然堆積とみられる。堆積土から常滑産甕や渥美産甕が出土した。

【SD2131溝跡】（図版19）

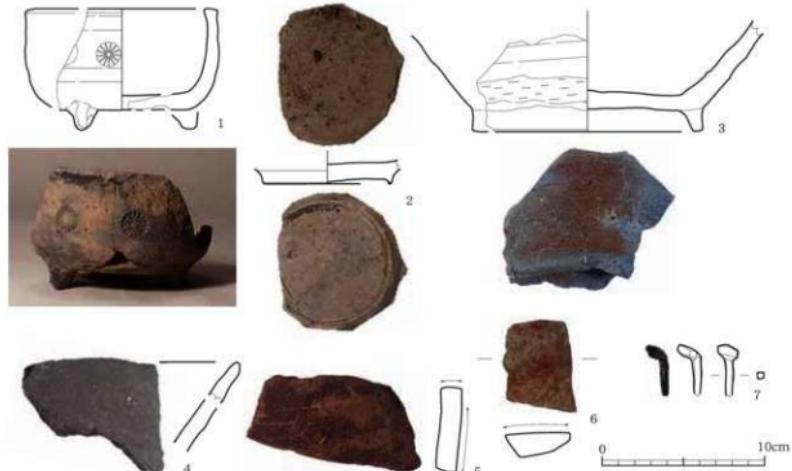
A区北東部で確認した南北溝跡で4.9m分を検出した。SB2382建物跡より新しく、SB2338・2384・2386建物跡より古い。上幅0.8m、下幅0.3～0.4m、深さは0.2mある。方向はN15°W前後である。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は1層が灰黄褐色シルト、2層がにぶい黄褐色シルトで、自然堆積とみられる。堆積土から瓦質土器火鉢（図版43-1）が出土した。

【SD2136溝跡】（図版19）

A区北東部で確認した東西溝跡で、7.5m分を検出した。SB2386～2388建物跡、SD2130溝跡より古い。上幅0.5～0.7m、下幅0.2～0.3m、深さは0.2mある。方向はE9°N前後である。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は地山ブロックを含む灰黄褐色シルトである。



図版42 SD1631・2144溝跡断面



図版43 A・B区溝跡出土遺物

【SD 2144溝跡】(図版16・42)

A区北東部で確認した南北溝跡で、11.5m分を検出した。SD 2138溝跡より新しい。上幅1.4~1.9m、下幅0.4~0.5m、深さは0.9mあり、南端は途切れる。方向はN17°W前後である。断面形は底面が丸いV字形である。堆積土は9層に分けられるが、自然堆積とみられる。堆積土から在地産甕(図版43-5)、ロクロかわらけが出土した。5は破片が砾石に転用されている。

F. その他の遺構

壁の一部に焼け面が認められ、底面を炭化物が覆う遺構を2基検出した。

【SX 1657】(図版16・44)

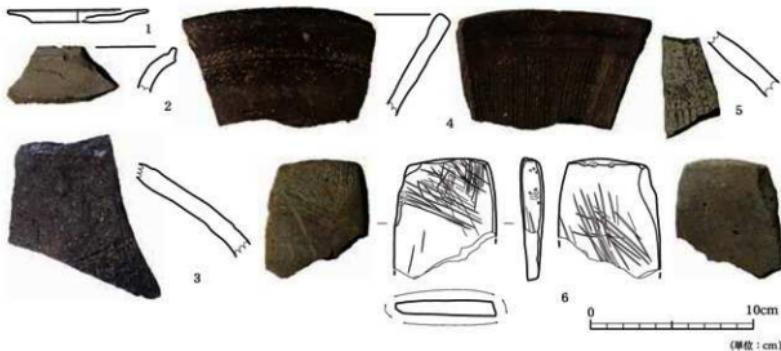
A区北東部で検出した。平面形は西側が開く撥形で、底面は西に向けて緩やかに傾斜する。規模は長さ0.6m、幅が西壁で0.4m、東壁で0.2m、深さは西壁で0.1mある。西壁とその付近の壁は強く統けており、底面は炭化物が覆っており、西壁付近が顕著で、東側は薄い。堆積土は炭化物を含む褐色シルトで、土中から小片となった焼骨が多く出土した。

【SX 2102】(図版6・44)

B1区南東部で検出した。径が1.2×1.0mのゆがんだ円形で、幅は北側が広い。深さは0.2mあり、壁は北壁が急に、他は緩やかに立ち上がる。西壁の北側に弱い焼面が認められる。底面は炭化物が覆い、その上は灰と炭化物が互層状に堆積している。



図版44 SX 1657・2102遺構



図版45 A・B区表土出土遺物

G. 表土出土遺物 (図版45)

表土や擾乱からロクロかわらけ小皿（1）、常滑産甕（2・5）、渥美産とみられる甕（3）、陶器擂鉢（4）、砥石（6）などが出土した。2は1b型式期とみられる。

2. 4区

4区は住宅地区の南西部、2区や3区の南に位置し、中央西よりを現代の濠が東西に横断する。東端にS X 1200遺物包含層やSD 1248区画溝跡があり、現代濠の西をS X 1600道路跡やSD 1288・1289区画溝跡がほぼ同じ位置で重複して南北に延びる。中世より新しい遺構は、S X 1200とS X 1600の間で掘立柱建物跡、井戸跡、土壤、溝跡を確認した（図版46）。SD 1248と1289は、第一期の区画Bの東辺と西辺を画する溝であり、S X 1200や第一期の区画溝跡SD 1275・1288を除く遺構の多くは、第一期に属するとみられる。なお、4区で発見したSD 1248・1249・1275・1288・1289区画溝跡の概要は『』で述べたため、ここでは触れない。

A. 掘立柱建物跡

15棟の建物跡を確認した。これらの建物跡は区画Bの内部に位置するものである。検出した柱穴には、今回報告分の調査区と、その北に隣接する仙台市教育委員会の平成9年度調査区とにまたがって建物を構成すると考えられるものがある。ここでは、今回の調査区で検出した柱穴のうち、調査区北辺際で3個以上が一直線上に並ぶ場合には、さらに調査区外に柱穴が存在する可能性を考慮して、それらの柱穴は建物跡を構成するものと判断した。このように調査区外に柱穴を想定した建物跡は11棟



図版46 4区の検出遺構



4区全景（東から）



区画B北半部（南から 下が4区東側）

図版47 4区全体写真

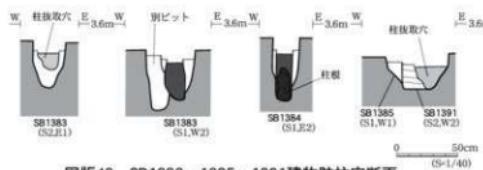
である。すべての建物跡の属性は第6表にまとめた。以下、主な建物跡について概要を記す。

【S B 1382建物跡】(図版48)

東西6間以上と推定され、南北1間以上の身舎に、南側の西半部3間以上の部分に縁（または廊）が1間付く東西棟建物跡であり、南北部を検出した。建物跡の北半部は調査区の外にあたる。S D 1295溝跡より新しい。9個の柱穴を検出し、そのうち6ヶ所で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長18.3m以上と推定され、柱間は2.7~3.9m、梁行は総長が6.8m以上で、身舎の柱間は約4.3m、縁（または廊）の出は約2.5mである。建物の方向は南側柱列で測ると E-21° -Nである。柱穴掘方は径20~30cmの楕円形または円形で、深さは20~30cm、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトもしくは暗褐色シルトである。柱痕跡は直径約10~12cmの円形である。



図版48 SB1382~1396建物跡平面図



図版49 SB1383~1385・1391建物跡柱断面図



【S B 1383建物跡】(図版48・49)

南北3間以上、東西3間の身舎に、西側に縁（または廂）が1間付く南北棟とみられる建物跡であり、南半部を検出した。建物跡の北半部は調査区の外にあたる。S D 1295溝跡より新しく、S B 1390建物跡より古い。11個の柱穴を検出し、そのうち6カ所で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長5.7m以上で、柱間は1.3～3.5m、梁行は総長約10.9mで、身舎の柱間は1.9～4.1m、縁（または廂）の出は約1.6mである。建物の方向は南側柱列で測るとE-19°-Nである。柱穴掘方は身舎、縁（または廂）とも径20～35cmの楕円形もしくは円形で、深さは身舎の柱は20～30cm、縁（または廂）の柱は約15cmであり、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。柱痕跡は直径10～15cmの円形である。

【S B 1385建物跡】(図版48・49)

東西7間以上と推定され、南北2間以上の身舎に、南側に縁（または廂）が1間付く東西棟建物跡で、南半部を検出した。建物跡の北半部は調査区の外にあたる。S B 1389建物跡、S D 1298溝跡より新しく、S B 1391・1394建物跡より古い。身舎5個、縁（または廂）7個の柱穴を検出し、そのうち身舎2カ所、縁（または廂）5カ所で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長11.8m以上で、柱間は1.5～2.0m、梁行は総長が4.5m以上で、身舎の柱間は約2.5m、縁（または廂）の出は約2.0mである。建物の方向は南側柱列で測るとE-15°-Nである。柱穴掘方は身舎、縁（または廂）とともに、20～35cmの楕円形または隅丸方形で、深さは約20cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色または暗褐色シルトである。柱痕跡は直径約9～14cmの円形である。

【S B 1386建物跡】(図版48・50)

東西3間、南北1間以上の身舎に、西側の北半部に南北方向に1間以上、東西方向に2間の廂が付く東西棟とみられる建物跡で、南半部を検出した。建物跡の北半部は調査区の外にあたる。身舎6個、廂2個の柱穴を検出し、そのうち身舎3カ所、廂2カ所で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長約13.2mで、身舎の柱間は3.4～3.7m、廂の出は総長2.7m、柱間は1.2～1.4m、梁行は総長5.1m以上で、柱間は4.6～5.1mである。建物の方向は南側柱列で測るとE-28°-Nである。柱穴掘方は身舎、廂とともに20～35cmの楕円形で、深さは約30cm、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。

柱痕跡は約9～14cmの円形である。

【S B 1389建物跡】(図版48・50)

東西4間以上、南北1間以上の東西棟建物跡で、南半部を検出した。建物の北半部は調査区の外にあたる。また、南側柱列から北へ1間目の位置に、南側柱列と平行する東西方向の柱列を2間分検出した。これらは柱の位置が南側柱列の柱位置と一致しないが、南側柱列と平行する位置にあることから、この建物跡を構成する柱穴と考えられる。S D 1295溝跡より新しく、S B 1385・1391・1394建物跡より古い。南、東側柱列の6個の柱穴と、間仕切りの柱穴を2個検出し、そのうち間仕切りの1カ所で柱痕跡を、南、東側柱列の2カ所では柱抜取穴を確認した。平面規模は桁行が総長9.8m以上で、柱間は南側柱列で2.0～3.0m、間仕切りの柱間は2.6～3.7m、梁行は2.1m以上である。建物の方向は南側柱列で測るとE-19°-Nである。柱穴掘方は20～35cmの楕円形または隅丸方形で、深さ

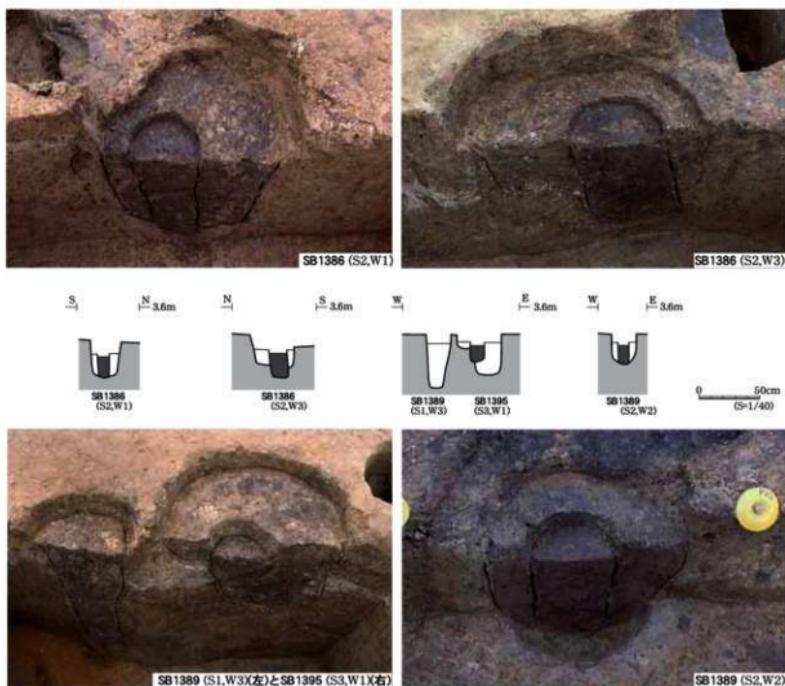
は20~40cm、埋土は地山ブロックを含む黒褐色または暗褐色シルトで、炭化物を含むものもみられた。柱痕跡は直径約12cmの円形である。

【S B 1390建物跡】(図版48)

南北3間以上と推定され、東西3間の南北棟とみられる建物跡で、南半部を検出した。建物跡の北半部は調査区の外にある。また、南西隅の柱穴から東へ1間、北へ1間の位置（以下、(S2, W2)と記す）にも柱穴を検出し、これも南、西側柱列の柱位置と列を揃えた位置にあることからこの建物を構成する柱穴と考えられる。SB1383、1392建物跡より新しい。西、南、東側柱列で7個、建物内部で1個の柱穴を検出し、このうち5カ所で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長5.7m以上で、柱間は約2.0m、梁行は総長約5.5mで、柱間は1.1~2.9mである。建物の方向は南側柱列で測るとE-23°-Nである。柱穴掘方は20~30cmの隅丸方形または梢円形で、深さは20~30cm、埋土は地山ブロックを含む暗褐色シルトである。柱痕跡は直径約8~13cmの円形である。

【S B 1391建物跡】(図版48・49)

東西5間以上、南北1間以上の身舎に、南側に縁（または廂）が1間付く東西棟建物跡で、南半部



図版50 SB1386・1389・1395建物跡柱穴断面

を検出した。建物跡の北半部は調査区の外にあたる。S B 1385・1389建物跡より新しく、S B 1394建物跡より古い。身舎で5個、縁（または廂）で6個の柱穴を検出し、そのうち身舎2カ所、縁（または廂）2カ所で柱痕跡を確認した。また、身舎の1カ所で柱抜取穴を確認した。平面規模は桁行が総長10.1m以上で、柱間は1.4～2.2m、梁行は総長3.7m以上で、身舎の柱間は約2.8m、縁（または廂）の出は0.9mである。建物の方向は南側柱列で測るとE-22°-Nである。柱穴掘方は身舎、縁（または廂）ともに20～30cmの隅丸方形または梢円形で、深さは約30cm、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。柱痕跡は直径9～14cmの円形である。

【S B 1392建物跡】(図版48)

東西4間、南北1間の東西棟建物である。S B 1390建物跡より古い。9個の柱穴を検出し、そのうち6カ所で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長約7.5mで、柱間は1.6～2.1m、梁行は約3.8mである。建物の方向は北側柱列で測るとE-1°-Sである。柱穴掘方は径25～35cmの梢円形または隅丸方形で、深さは20～30cm、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。柱痕跡は直径11～13cmの円形である。

【S B 1393建物跡】(図版48)

東西3間以上、南北1間以上の身舎に、南側に縁（または廂）が1間付く建物跡で、建物跡の南半部を検出した。建物の北半部は調査区の外にあたる。身舎で5個、縁（または廂）で3個の柱穴を検出し、そのうち身舎の2カ所で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長6.0m以上で、柱間は1.8～2.2m、梁行は総長4.4m以上で、身舎の柱間が約3.3m、縁（または廂）の出は約1.2mである。建物の方向は南入側柱列で測るとE-8°-Nである。柱穴掘方は身舎が20～30cmの隅丸方形または梢円形、縁（または廂）が径約20cmの円形で、深さは身舎、縁（または廂）ともに20～30cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。柱痕跡は直径約13cmの円形である。

【S B 1394建物跡】(図版48)

東西3間以上、南北2間以上の身舎に、南側に縁（または廂）が1間付く東西棟建物跡で、南半部

遺構名	遺物開拓	棟方 向	平 面 規 模			建物の方向 角度/沿岸柱間	柱幅 cm	柱穴掘方 cm	備 考	図版
			桁行長(m)	梁行長(m)	柱間(m)					
S B 1382	(6) ~ 1+1	(18.0) 南 ~	3.9 ~ 3.7 (2間)	3.2 ~ 3.3 (2間)	5.4 6.8 ~	E 21° N E 21° N	2.5 ~ 4.3 3.0 ~ 4.3	10 ~ 12 10 ~ 12	20 ~ 30 20 ~ 35	梢円形、円形 梢円形、円形
S B 1383	3 ~ 3+1	南 5.7 ~	内 1.3 ~	外 0.5 ~ 0.9	10.3	E 19° N E 19° N	1.6 ~ 1.9 1.6 ~ 1.9	4.1 ~ 4.3 4.1 ~ 4.3	20 ~ 35 20 ~ 35	梢円形、円形 梢円形、円形
S B 1384	2 ~	-	4.2 ~	南 2.2 ~	2.0	E 13° N E 13° N	2.0 ~ 2.2 2.0 ~ 2.2	10 ~ 13 10 ~ 13	20 ~ 30 20 ~ 30	円形、梢円形 円形、梢円形
S B 1385	(7) ~ 1+1	東南 11.8 ~	南 2.0 ~	2.0 1.6 ~ 1.5	4.5 ~	E 15° N E 15° N	1.9 ~ 1.8 1.9 ~ 1.8	2.0 ~ 2.5 2.0 ~ 2.5	20 ~ 30 20 ~ 30	梢円形、梢円形 梢円形、梢円形
S B 1386	3+2 1 ~	東西 13.2 ~	南 L2 ~ L4	3.5 ~ 3.7 3.5 ~ 3.7	3.4 ~ 4.7 ~	E 46° N E 28° N	4.6 ~	20 ~ 35 9 ~ 14	20 ~ 35 20 ~ 35	梢円形 梢円形
S B 1387	3 1	東西 11.6 ~	北 3.2 ~ 4.8	3.6	4.1	E 29° N E 29° N	北 北	20 ~ 25 20 ~ 25	20 ~ 25 20 ~ 25	梢円形、梢円形 梢円形、梢円形
S B 1388	2 ~ 2	南北 6.9 ~	東 4.2 ~ 2.6	2.6	7.4	E 21° N E 21° N	南 南	10 ~ 12 10 ~ 12	20 ~ 25 20 ~ 25	梢円形 梢円形
S B 1389	4 ~ 1 ~	南北 9.8 ~	内 3.3 ~ 2.5	外 2.0 ~ 3.0	3.1 ~	E 19° N E 19° N	南 南	12 ~	20 ~ 35 20 ~ 35	梢円形、梢円形 梢円形、梢円形
S B 1390	(3) ~ 3	南北 5.7 ~	東 3.1 ~ 2.0	外 1.60	5.5	E 23° N E 23° N	南 南	8 ~ 13 8 ~ 13	20 ~ 30 20 ~ 30	梢円形、梢円形 梢円形、梢円形
S B 1391	5 ~ 1+1	東北 10.1 ~	南 3.1 ~ 2.2	2.1 ~ 2.0	1.8	3.7 ~	東 東	9 ~ 9 9 ~ 9	20 ~ 30 2.8 ~	建物内部に柱穴あり 柱穴あり
S B 1392	4 1	東南 7.5 ~	北 16 ~ 1.8	2.1 ~ 2.0	3.8	内 3.8	E 1° N E 1° N	11 ~ 13 11 ~ 13	25 ~ 35 25 ~ 35	梢円形、梢円形 梢円形、梢円形
S B 1393	3 ~ 1+1	東北 6.0 ~	内 2.1 ~ 1.7	2.2	4.4 ~	东 东	1.2 ~ 3.3	13 ~ 13	20 ~ 30 20 ~ 30	梢円形、梢円形 梢円形、梢円形
S B 1394	3 ~ 2+1	東北 7.4 ~	南 2.4 ~ 3.0	2.0	4.9 ~	东 东	1.5 ~ 2.1	11 ~ 11	15 ~ 30 15 ~ 30	梢円形、梢円形 梢円形、梢円形
S B 1395	4 ~ (2)	南北 7.2 ~	東 2.0 ~ 1.7	1.5	4.3	南 南	2.1 ~ (2.2) (北側で測定)	14 ~ 14	20 ~ 35 20 ~ 35	梢円形、梢円形 梢円形、梢円形
S B 1396	4 1	東南 8.4 ~	南 2.0 ~ 2.0	4.4 (2.0)	3.0	内 内	2.0 ~ 2.0	10 ~ 10	10 ~ 30 10 ~ 30	梢円形 梢円形

* () 内の数字は推定値

* 棚開口の幅で「2+2」とあるのは「身舎3間、縁（または廂）2間」であることを、「3～」とあるのは「3間以上」であることを示す。

* 能能数の欄で「5.7～」とあるのは「5.7以上」であることを示す。

* 斜体字は柱穴の柱筋寸法を示す。

* 異同寸法注は、東西南北方向のものには西から、南北方向のものには南から順に記した。

第6表 4区建物跡属性表

を検出した。建物の北半部は調査区の外にある。S B 1389・1385・1391建物跡より新しい。身舎で5個、縁（または廂）で4個の柱穴を検出し、そのうち身舎で2ヶ所、縁（または廂）で1個の柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長7.4m以上で、柱間は2.0～3.0m、梁行は総長4.9m以上で、身舎の柱間が約1.3～2.1m、縁（または廂）の出が約1.5mである。建物の方向は南側柱列で測るとE-11° -Nである。柱穴掘方は身舎、縁（または廂）とともに15～30cmの隅丸方形または楕円形で、深さは10～30cm、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。柱痕跡は直径9～11cmの円形である。

【S B 1395建物跡】(図版48・50)

南北4間、東西2間と推定される南北棟建物跡である。S D 1295溝跡より新しい。10個の柱穴を検出し、そのうち6ヶ所で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長約7.2mで、柱間は1.5～2.0m、梁行は総長約4.3mで、柱間は約2.1mである。建物の方向は東側柱列で測るとN-23° -Wである。柱穴掘方は20～35cmの隅丸方形または楕円形で、深さは約20cm、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトまたは暗褐色シルトである。柱痕跡は直径9～14cmの円形である。

B. 井戸跡

東側で2基（S E 1269・1272）、中央で2基（S E 1277・1278）検出した。建物群との位置関係は、前者が建物群から離れたところにあるのに対し、後者は建物群の南西に隣接する。4基とも素掘りの井戸であることから、一括して記述することとし、個別データは、第7表にまとめた。なお、東側の市文化財課の調査地（=S E 1269の北）で井戸状の穴が2基認められた。

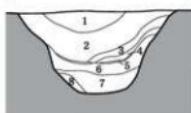
平面形は円形で、断面形は東側の2基が漏斗形、中央の2基は円筒形である。規模は径0.9～3.2m、深さは0.8～1.3mある。S E 1272西壁の段は、井戸を掘削する際の足場と考えられる。堆積土は、4基とも下部に壁の崩落土を含む自然堆積層が認められる。上部は埋め戻されたもの（S E 1272・1277）と廃絶後自然に埋まったもの（S E 1269・1278）とがある。S E 1277の堆積土から常滑産甕や砥石（図版52-4）が出土した。

直 構	構造	平面形	断面形	規模 (m)	深さ (m)	堆積土の状況	出 土 墓 物	廻 考	回	
									平面	断面
S E 1269	素掘	円形	漏斗形	2.0×1.9	1.0			北半分は仙台市教委が調査	46	51
S E 1272	素掘	円形	漏斗形	3.2×2.7	1.3	自然→人為		S K 1271→S E 1272 西側の段は構築時のもの	46	51
S E 1277	素掘	円筒形	円筒形	1.9×1.6	1.2	自然→人為	常滑甕、瓦石		46	51
S E 1278	素掘	円筒形	円筒形	1.0×0.9	0.8			S E 1278→S D 1275	46	51

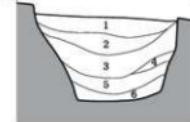
第7表 4区井戸跡属性表

C. 土壌

13基確認した。これらはA・B区土壤の分類に従うと、1類が2基（S K 1282・1285）と2類が4基（S K 1270・1271・1273・1274）、3類は7基（S K 1296・1297・1299・1302・1348・1349・1403）となる。このうちS K 1270・1282・1285は個別の記述を行うが、他の土壤の概要は分類にしたがって述べることとし、それぞれのデータは第8表にまとめた。

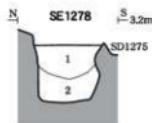
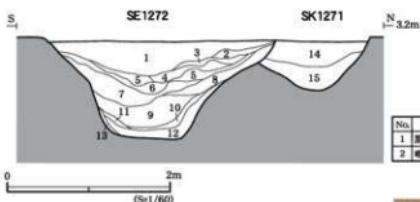
E₁ SE1269 W 3.2m

N SE1277 S 3.3m



No.	土色・土性	組入物など	備考
1	黒褐色(0)YR2/2シルト	粘土少々混在	
2	黒褐色(0)YR2/2シルト		
3	黒褐色(0)YR4/2シルト		
4	黒褐色(0)YR4/2粘土		
5	黒褐色(0)YR3/0粘土	炭化物を多量に含む	
6	黒褐色(0)YR3/0砂質シルト		
7	灰褐色(0)YR4/2	炭化物シルトを少量含む	
8	灰褐色(0)YR4/2砂質シルト	地山ブロックを多量に含む	堅密土

No.	土色・土性	組入物など	備考
1	黒色(7.5)YR2/0シルト	粘土・炭化物を多量に含む	
2	黒色(7.5)YR1/7/0シルト	炭化物を多量に含む	人為堆積
3	灰褐色(0)YR5/0シルト	黑色シルトを多量に含む	
4	明褐色(10)YR4/0粘土土		堅密土
5	灰褐色(0)YR4/0シルト	黑色シルトを多量に含む	
6	暗褐色(10)YR5/0シルト質粘土	黑色シルトを多量に含む	



No.	土色・土性	組入物など	備考
1	黒褐色(2.5)Y5/0シルト	炭化物を含む	
2	灰褐色(2.5)Y5/0シルト	黑色シルトを多量に含む	

No.	土色・土性	組入物など	備考
1	褐灰土(10)YR4/0シルト	地山ブロックを含む。炭化物を含む	
2	地山ブロック主層	褐灰シルトを含む	
3	炭化土・灰層	地山ブロックを含む	
4	地山ブロック主層	褐灰シルトを含む	
5	地山ブロック・炭化土ブロック	褐灰シルトを含む	
6	地山ブロック主層	褐灰シルトを含む	
7	褐灰土(10)YR4/0シルト	地山ブロックを含む。炭化物を含む	人為堆積
8	褐褐色(0)YR3/0シルト	地山ブロックを含む	
9	灰褐色(4)Y5/0粘土シルト	地山ブロックを含む	
10	黒褐色(2.5)Y2/0シルト		
11	暗褐色(2.5)Y2/0シルト		
12	黒色(2.5)Y2/0シルト	地山ブロックを少々含む	
13	暗褐色(2.5)Y2/0シルト		
14	地山ブロック主層	褐灰シルトを含む	SK1271 堅密土
15	褐褐色(0)YR4/0シルト	褐灰シルトブロック・地山ブロックを含む	



SE1272・SK1271断面(東から)

図版51 4区井戸跡

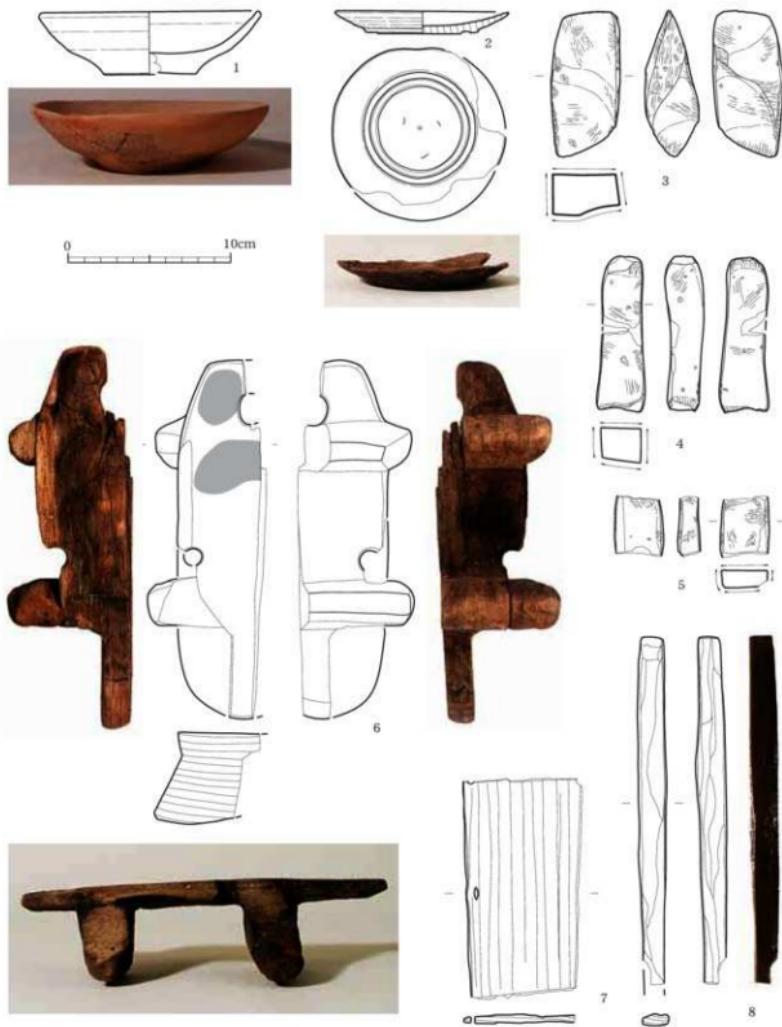
1類：径もしくは最大径が3mを超える大型土壤

現代漆の西側で2基検出した。

【SK1282土壤】(図版46・53)

平面形は長径が4.4m以上、短径が3.5mの楕円形である。底面はほぼ平坦で深さは0.7mあり、断面形は逆台形である。SD1283溝跡より新しい。堆積土は7層に分けられる。自然堆積(2~7層)のうち、人为的に埋戻された(1層)と考えられる。堆積土から常滑産片口鉢、在地産甕、モモ核が出土した。

【SK1285土壤】(図版46・53)



No.	出土部位・層位	種別	器種	產地	特徴	備考	(単位: cm)
1	SK1299 堆積土	口クロカマクラ付	盆		口径(13.8) 底径(5.8) 高さ3.9 残存:一部 ロクロナデ 底部:回転糸切		01109
2	SD1291 堆積土	木製品	小瓶		口径10.8 高さ1.4 厚さ0.5~0.7 底部にロクロ底痕 [ナガニ 樹木取引]		01208
3	SD1291 堆積土	石製品	砾石		長9.0 幅4.2 厚2.9 【焼灰切】		01393
4	SE1277 堆積土	石製品	砾石		長6.8 幅3.0 厚2.3 【焼灰切】		01438
5	SK1270 堆積土	石製品	砾石		長(3.8) 幅3.0 厚0.9 【焼灰切】		01292
6	SK1285 堆積土	木製品	連衡下駄(右)		長22.1 幅(7.0) 高さ5.6 厚さ1.0 【ケヤキ】		01205
7	SK1285 堆積土	木製品	前駄(底板)		長(11.1) 幅(5.6) 厚0.2~0.4 木釘穴【モミ属】		01238
8	SK1285 堆積土	木製品	柄杓(柄)		長(21.3) 幅1.7 厚0.7 【モミ属】		01237

図版52 4区遺構出土遺物

S D 1288 A 区画溝跡下で検出した。平面形は長径が3.2m、短径が1.6mの梢円形である。深さは1.1mあり、断面形は擂鉢形とみられる。堆積土は暗オリーブ褐色の粘土で、そこから在地産甕、連歯下駄（図版52-6）、折敷（図版52-7）、柄杓（図版52-8）が出土した。

2類：径もしくは長軸の長さが1.4m以上～3m未満の中型土壙（図版53）

建物群の東側で4基（SK 1270・1271・1273・1274）検出した。平面形は円形もしくは梢円形で、深さは0.3～0.7mあり、断面形は逆台形（SK 1273・1274）もしくは擂鉢形（SK 1270・1271）である。堆積土は自然堆積のほか、自然堆積の間に人為堆積が認められるもの（SK 1270）や自然堆積ののち人為的に埋め戻されたもの（SK 1271）がある。

【SK 1270土壙】（図版46・53）

平面形は2.2×2.1mの円形で、深さは0.6mあり、断面形は擂鉢形である。堆積土は10層に分けられ、20cmほど埋まった（7～10層）のちは、炭化物や灰を主体とする廃棄層と自然堆積層が交互に認められる。遺物は堆積土から常滑産甕や砥石が出土した。

3類：径や長軸の長さが1.0m前後より小さな小型土壙（図版53）

中央で4基（SK 1296・1297・1299・1403）、東側で3基（SK 1302・1348・1349）検出した。前者は位置的に建物群と重複する。平面形は円形や梢円形で、断面形は円筒形（SK 1296・1299・1302・1348・1403）、擂鉢形（SK 1297・1349）である。深さはSK 1296（0.7m）を除いて0.5m以下である。堆積土は自然堆積（SK 1302）や人為堆積（SK 1403）のほか、自然堆積の間に人為堆積が認められるもの（SK 1297・1299）があった。SK 1296の堆積土からロクロかわらけ小皿や壁土、SK 1299の堆積土からロクロかわらけ皿（図版52-1）、SK 1302の堆積土から常滑産甕が出土した。

遺構	平面形	断面形	規模（m）	深さ（m）	分類	堆積土の状況	出土 遺物	備考	図 平面 断面
SK 1270	円形	擂鉢形	2.2×2.1	0.6	2	自然+人為	常滑甕、砥石	廃棄土壙	46 53
SK 1271	円形？	擂鉢形	径1.4?	0.7	2	自然→人為		SK 1271→SE 1272	46 51
SK 1273	梢円形	逆台形	2.0×1.4	0.3	2				46
SK 1274	梢円形	逆台形	2.1×1.2	0.4	2			SD 1402→SK 1274	46
SK 1282	梢円形	逆台形	4.4×3.0×3.5	0.7	1	自然→人為	常滑片口鉢、在地陶器？	SD 1283→SK 1282	46 53
SK 1285	梢円形	擂鉢形	2.3×1.6	1.1	1		在地甕、逆台下駄、柄杓、折敷	SD 1285→SD 1288	46
SK 1296	梢円形	円筒形	1.0×0.7	0.7	3		ロクロ小皿、甕土	SD 1295→SK 1296	46 53
SK 1297	梢円形	擂鉢形	1.0×0.5	0.4	3	自然+人為			46
SK 1299	円形	円筒形	径0.7	0.5	3	自然+人為	ロクロ皿		46 53
SK 1302	梢円形	円筒形	1.0×0.6	0.4	3	自然	常滑甕	SK 1200→SK 1302	46 53
SK 1348	円形	円筒形	径0.5	0.1	3				46
SK 1349	梢円形	擂鉢形？	0.6×0.3	0.1	3				46
SK 1403	円形	円筒形	径0.7	0.2	3	人為			46

出土遺物のロクロはロクロかわらけ、手づくねは手づくねかわらけ、在地は宮城県内の在地甕で生産された中世陶器を指す。

第8表 4区土壙属性表

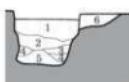
D. 溝跡

6条検出した。このうちSD 1295・1298は個別に記述し、他のデータは第9表にまとめた。

【SD 1295溝跡】（図版46・53）

4区中央で確認した東西溝跡で14.6m分を検出した。SB 1382・1383・1395建物跡、SK 1296土壙、SD 1400溝跡より古い。上幅0.6～0.7m、下幅0.3～0.4m、深さは0.2mある。方向はE 20°

N SK1296 SD1295 S 3.8m



No.	土色・土性	組入物など	備考
1	黒褐色(0)YTR3/0シルト	鐵土・炭化物を含む	
2	黒褐色(0)YTR4/0シルト	鐵土・炭化物・泰山プロックを含む	
3	黒褐色(0)YTR3/0シルト	鐵土・炭化物・泰山小プロックを含む	SK1296 審査土
4	黒褐色(0)YTR4/0シルト	泰山プロックを多量に含む	
5	地山ブロック支撑	泰山色シルトを含む	壁面土
6	黒褐色(0)YTR5/0シルト		SD1295 審査土



SK1296断面（西から）

W

SK1282

E 3.1m



W SK1299 E 3.8m



No.	土色・土性	組入物など	備考
1	黒褐色(0)YTR2/0シルト	泰山プロック・炭化物を含む	
2	黒褐色(0)YTR2/0シルト	炭化物を含む	
3	黒褐色(0)YTR2/0粘土質シルト		
4	黒褐色(0)YTR2/0粘土質シルト		
5	黒褐色(0)YTR3/0粘土質シルト	泰山(岩)をプロック状に含む	壁面土
6	黒褐色(0)YTR2/0粘土上		
7	黒褐色(0)YTR2/0粘土上	泰山(岩) ブロックを含む	

No.	土色・土性	組入物など	備考
1	黒褐色(0)YTR3/0シルト	鐵土・炭・灰・泰山プロックを含む	
2	深褐色(0)YTR2/0粘土質シルト	炭・泰山プロックを多量に含む	人为堆積
3	褐色(0)YTR2/0粘土質シルト		
4	黑色(1)YTR2/0粘土質シルト	炭・泰山プロックを多量に含む	人为堆積
5	黑色(1)YTR2/0粘土質シルト	泰山プロックを含む	壁面土

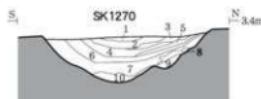
N SK1302 S 2.8m



No.	土色・土性	組入物など	備考
1	黒褐色(0)YTR4/0シルト		
2	黒褐色(0)YTR3/0粘土質シルト	砂やスクロモミナ核に含む	
3	オリーブ褐色(GVY2/2粘土上)	泰山プロックを含む	



SK1270 断面（東から）



No.	土色・土性	組入物など	備考
1	黒褐色(0)YTR3/0シルト		
2	炭化物・灰層		
3	黒褐色(0)YTR3/0シルト	泰山プロックを含む	
4	炭化物・灰層		
5	黒褐色(0)YTR3/0シルト	泰山プロックを含む	

No.	土色・土性	組入物など	備考
6	炭化物・灰層		
7	黒褐色(0)YTR3/0シルト	泰山プロックを含む	
8	黒褐色(0)YTR3/0シルト	泰山シルトプロックを多量に含む	
9	黒褐色(0)YTR3/0シルト		
10	黑色(1)YTR2/0粘土質シルト	泰山プロックを含む	

N SD1283 S 3.3m



No.	土色・土性	組入物など	備考
1	C(0)・黒褐色(0)YTR3/0シルト		
2	黒褐色(0)YTR3/0シルト	泰山プロックを多量に含む	
3	C(0)・黒褐色(0)YTR3/0シルト	泰山シルトを多量に含む	壁面土

SD1298



No.	土色・土性	組入物など	備考
1	黒褐色(0)YTR4/0シルト	炭化物・鐵土・泰山を含む	

N前後である。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は褐色シルトで自然堆積とみられる。

【S D 1298溝跡】(図版46・53)

4区中央で確認した東西溝跡で、12.0m分を検出した。SD 1295とは、1.4~1.6m北に離れて平行する。S B 1384・1385・1388建物跡より古い。上幅0.4~0.6m、下幅0.3m、深さは0.2mある。方向はE 22° N前後である。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は焼土や炭化物を含む灰褐色シルトで、自然堆積とみられる。

通構	検出長(m)	断面形	規 横 棚(m)			方 向	堆積土	備 考	図 平面 断面
			上幅	下幅	深さ				
SD 1283	4.2	U字形	0.4~0.6	0.3	0.6	東西(E 35° N前後)	自然	SD 1283→SK 1282	46 53
SD 1295	1.46	逆台形	0.6~0.7	0.3~0.4	0.2	東西(E 20° N前後)	自然	SD 1295→S B 1382+1383+1395	46 53
SD 1298	12.0	逆台形	0.4~0.6	0.3	0.2	東西(E 22° N前後)	SD 1298→S B 1384+1385+1388, SK 1296, SD 1400	46 53	
SD 1339	4.1	直形	0.3	0.2	0.2	南北(N 10° W前後)	自然		46
SD 1400	1.5	直形	0.3~0.6	0.2~0.4	0.1	L字(南北→東西)	自然	SD 1339と一連?	46
SD 1402	1.7	逆台形	0.6	0.4	0.1	南北(N 22° W前後)	自然	SD 1402→SK 1274	46

第9表 4区溝跡属性表

3. 遺物包含層

S X 1200遺物包含層は4区東端と5区西端、S X 1397遺物包含層はA・B区の東端で検出した。両者の下には、基本層序第V層を介して平安時代中期以前のSD 1100河川跡が位置することから、氾濫で埋没した河川の中央部が湿地化し、そこに遺物包含層が形成されたと考えられる。S X 1397は平成13年度と16年度に調査を行い、前者の成果は『』に収録されている。後者は、遺物の出土量が多いため来年度で報告することとした。ここでは、4・5区で検出したS X 1200の成果を述べる。

【S X 1200遺物包含層】(図版4・54~56)

S X 1200は、住宅地区を南に流れるSD 1100河川跡が氾濫によって埋没したのち湿地化し、そこに形成された遺物包含層である(図版4)。SD 1248・1249区画溝跡、SK 1302土壤より古い。幅は9.0m前後、深さは残りのよいところで0.8mある。断面形は東西両岸から傾斜するが、いったん傾斜が緩やかになったのち、中央が凹んでいる。堆積土は上・中・下の3層に大別した(図版54・55)。下層は炭化物・灰・焼土を主体とする層と自然堆積の粘土層とが互層状に堆積している。中層は地山ブロックを多量に含む層、上層は褐色やにぶい黄褐色の粘土やシルトである。下層は炭化物が顕著に認められ、中層や上層との識別が容易であった。

遺物は下層と上層から多く出土した(図版57~69)。南側からの出土が多く、北へ行くにしたがつて少なくなる。とくに断面図を作成したE-Fライン(=5区中央付近)以北は出土量が急激に減る。また、南側の東岸付近では下層の細別した層理面の上から遺物が出土するものがあり、なかでも図版71-7・8の焼成前底部穿孔かわらけ塊は、7の中に8を重ねて入れ、口縁部を上にして東岸に置かれた状態で出土した(S X 1405 図版56左上)。

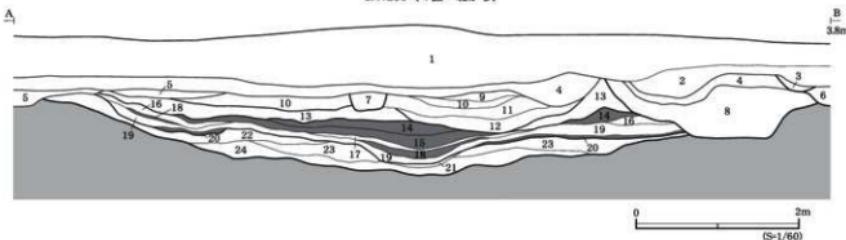
下層からはロクロかわらけ塊(1・2・5~8)・皿(3・4)・柱状高台皿(31・32)・小皿(9~30)、渥美もしくは湖西産とみられる第4型式期の山茶碗(33・34)、常滑産甕(35)、金メッ

キの銅製品（36）、刀or包丁（37）、砥石（39～41）、切石、横櫛（43～46）、連歯下駄（47）、箸（53～55・57～59）、杓子（63）、木簡（62）、楔（49）、曲物、柄杓（50・60）、漆ペラ（52）、手火（56・64）、鉄滓、壁土（42）などのほか、古代の平瓦（38）が出土した。かわらけは手づくねを含まず、すべてロクロを用いて製作されたものであった。皿は柱状高台皿と考えられる。木簡は何らかの部材を転用したもので、3行にわたって文字が記されており、「老貳 町三段」と判読できた。

下層は植物遺体と花粉の分析を行っている。その結果、イネ、イヌビエーヒエ、ヒシ属、ホタルイ属、ミクリ属が多量に含まれていることがわかった。とくに炭化物主体層（図版54-18層）からは、

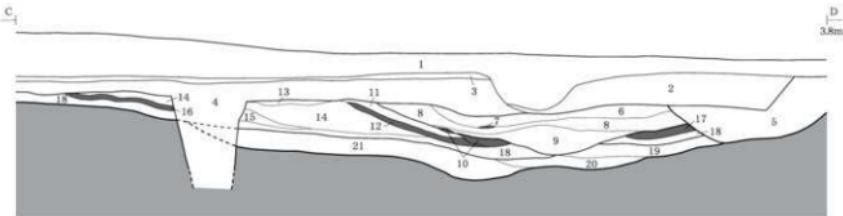


SX1200 (4区 北から)



No.	土色・土性	埋入物など	備考	No.	土色・土性	埋入物など	備考
1	黄褐色(0Y9R3/Dシルト)	表面面上は黄褐色シルト		13	黄褐色(10YR4/1)粘土質シルト	黄褐色シルトブロックを多量に含む	遺物: 4区4層 大別: 中層
2	黄褐色(0Y9R2/Dシルト)	砂利を多量に含む		14	黒色(10YR2/2)粘土質シルト	炭化物を多く含む。東: E - 西: W - 黃褐色シルトブロックを含む	遺物: 4区4層
3	黑色(10YR2/2)シルト		新しい標	15	黒褐色(10YR2/2)粘土		遺物: 4区5層
4	黒褐色(10YR4/4)シルト・粘土		水田底土、ビニール袋入り	16	黒褐色(10YR3/1)粘土		遺物: 4区6層
5	C-2-1: 黑褐色(10YR3/2)シルト	黒褐色シルトブロックを含む		17	黒褐色(10YR3/2)粘土	植物遺体を多量に含む	遺物: 4区6層
6	黒褐色(10YR3/2)シルト		腐植土	18	灰化土、灰土		遺物: 4区7層
7	黒褐色(10YR3/2)シルト	黒褐色シルトブロックを含む	Pv 土	19	黒褐色(10YR2/2)粘土	植物遺体を多量に含む	遺物: 4区7層
8	黒褐色(10YR3/2)シルト		SD124 磨擦土	20	灰化土、灰土		
9	黒褐色(10YR4/2)粘土			21	明褐色(10Y5D2)粘土	植物遺体を多量に含む。西: W - 東: E - 黄褐色シルトブロックを含む	遺物: 4区7層
10	C-2-1: 黑褐色(10YR4/2)シルト		遺物: 4区1層	22	灰褐色(10YR4/2)粘土	黄色粘土との薄い互層	遺物: 4区7層
11	黒褐色(10YR4/2)粘土質シルト	C-2-1: 黑褐色(10YR3/2)粘土・粘土質物	大別: 上層 遺物: 4区2層	23	灰褐色(10YR4/2)粘土	鉄滓11-12層。植物遺体ブロックを含む	遺物: 4区7層
12	15層と16層の界面	水生植物、炭化物を含む	遺物: 4区3層	24	灰褐色(10YR4/2)粘土	鉄滓11-12層。植物遺体ブロックを含む	

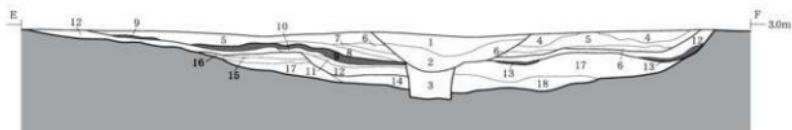
図版54 SX1200遺物包含層（1）



C-D断面

No.	土色・土性	混入物など	備考	No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐色土			12	赤褐色・K・風化土		遺物: 5区3層
2	褐色土			13	黒褐色(0)YR2/0シルト	黒褐色をテラコッタ色に含む。炭化物を含む	
3	新しい土			14	黒褐色(1)YR2/2粘土	黒色のブロック、炭化物を多量に含む	
4	砂利地帯を3次調査区分の複数に土			15	黒褐色(1)YR2/2粘土	炭化物・K・褐色粘土層1層間に含む	遺跡から出土層 大別: 下層
5	S D12AK (時代不明参考調査区分)			16	黒褐色(1)YR2/2粘土	炭化物や青銅器1種間に含む	
6	黒褐色(0)YR2/0シルト	黒色をテラコッタ色に含む。炭化物を含む	遺物: 5区1層	17	黒褐色(1)YR2/2粘土	炭化物を多量に含む	
7	炭化物・灰層		大別: 上層	18	黒褐色(1)YR2/2粘土	炭化物を含む	
8	黒褐色(0)YR2/2粘土層1層	黒色ブロックを多量に含む。炭化物を含む		19	灰褐色(1)10YR4/2粘土	褐色粘土との薄い互層	遺跡物
9	黒褐色(0)YR2/2粘土層1層	遺物: 5区3層		20	明褐色(7)5G7/7D粘土		
10	炭化物・灰層	K・褐色土含む		21	灰褐色(1)9YR7/0粘土	褐色粘土・炭化物との互層	
11	黒褐色(0)YR2/2粘土層1層	炭化物を多量に含む。黒色ブロックを含む	遺物: 5区3層 大別: 下層				

0 3m
GS=1/60



E-F断面

No.	土色・土性	混入物など	備考	No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(0)YR2/2シルト	炭化物を含む。褐色をテラコッタ色に含む		10	黒褐色(1)YR2/1粘土		
2	黒褐色(0)YR2/2粘土・シルト	K・褐色粘土		11	黒褐色(1)YR2/2粘土		遺物: 5区4層
3	黒褐色(0)YR2/2シルト・風化土			12	黒褐色(1)YR2/2粘土	炭化物を含む	大別: 下層
4	黒色ブロック1種	黒褐色土質シルトブロックを含む	遺物: 5区1層	13	炭化物1種層		
5	黒褐色(0)YR2/2粘土・シルト	黒色粘土ブロック含む		14	黒褐色(7)5G7/7D粘土	褐色粘土との薄い互層	
6	黒褐色(0)YR2/0粘土		大別: 上層	15	灰褐色(1)9YR6/2粘土	褐色粘土を灰層に含む	遺跡物
7	黒褐色(0)YR2/0粘土	褐色・砂をテラコッタ色に含む	遺物: 5区2層	16	褐褐色(1)9YR4/0粘土	褐色粘土を互層に含む	
8	黒褐色(0)YR2/0粘土	黒色小ブロック、炭化物を含む		17	褐褐色(1)9YR4/2粘土	褐色粘土・炭化物との互層	
9	炭化物・灰層	灰土を含む	遺物: 5区3層 大別: 下層	18	褐褐色(1)9G2/2粘土	白色粘土ブロックを多量に含む	



C-D断面（北から）



C-D断面アップ

図版55 SX1200遺物包含層（2）



SX1405出土状況（図版57-7・8）



かわらけ小皿（図版58-21）



かわらけ小皿（図版58-20）



漆桶（図版66-109）



箒（図版62-61）



折歛（図版67-114）

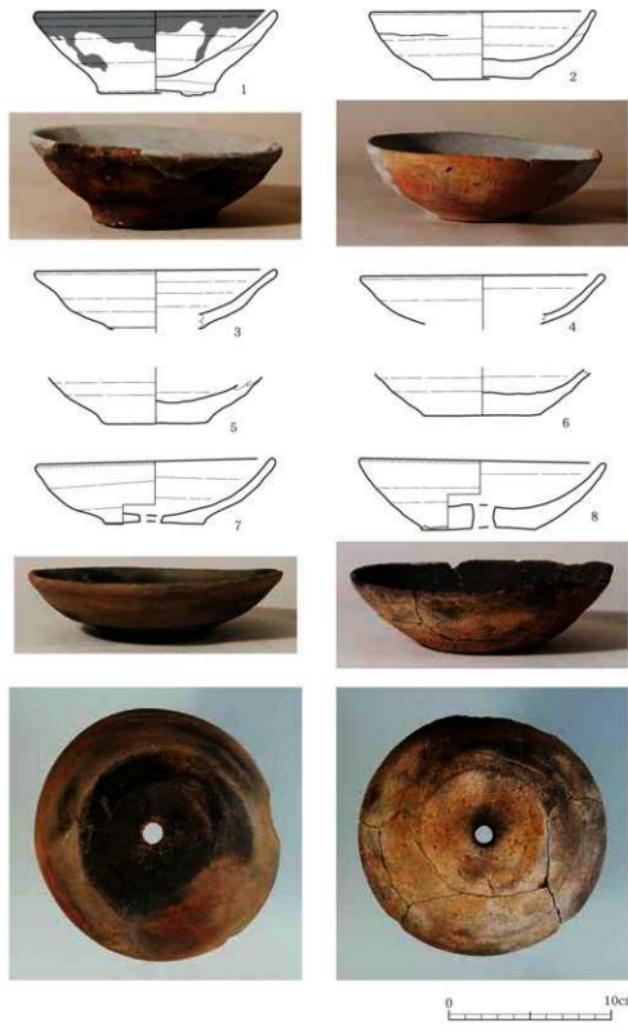


下駄（図版60-47）



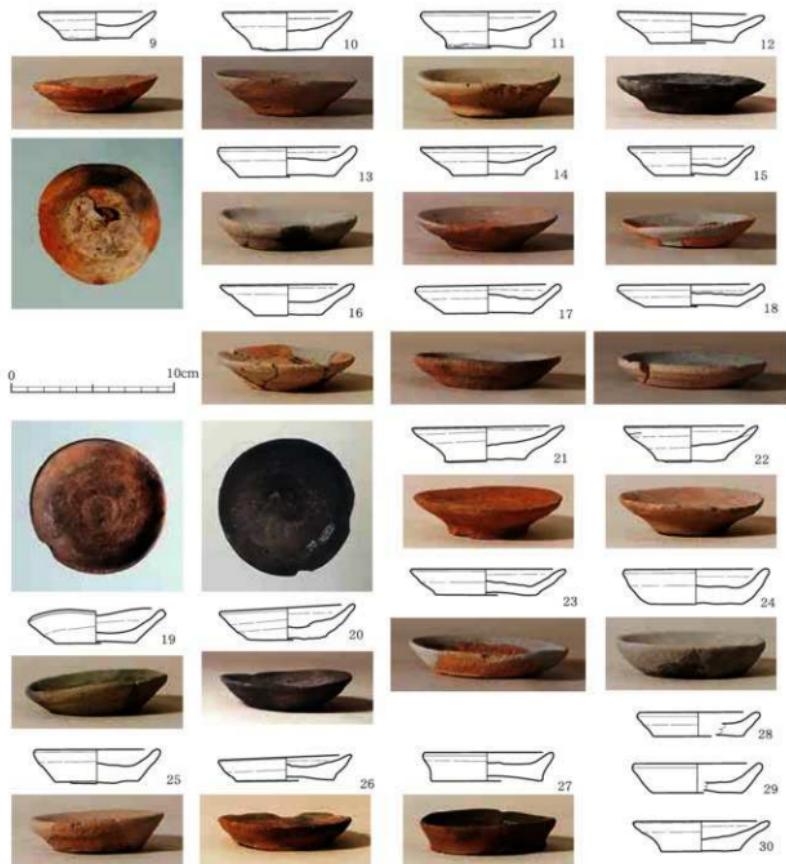
櫛（図版69-117）

図版56 SX1200遺物包含層 遺物出土状況



No.	大別割位	出土層位	種別	形種	产地	特徴	備考	登録
1	下層	4区 5層上面	口クロかわらけ	端		口径(15.0) 底径7.3 鋼高5.0 残存1/2 底部:回転角切→板状底 内外面に油煙付着		01011
2	下層	5区 3層	口クロかわらけ	端		口径(14.0) 底径6.0 鋼高4.1 残存:1/3 ロクロナデ 底部:回転角切		02121
3	下層	5区 7層	口クロかわらけ	端		口径(15.0) 残存:一部 口クロナデ 柱状高台底力		01058
4	下層	5区 4層	口クロかわらけ	端		口径(15.1) 残存:一部 柱状高台底力		02117
5	下層	5区 3層	口クロかわらけ	端		底径(6.6) 残存:1/4 ロクロナデ 底部:回転角切		02123
6	下層	5区 3層	口クロかわらけ	端		底径(7.2) 残存:1/4 ロクロナデ 底部:回転角切		02122
7	下層	4区 7層上面	口クロかわらけ	端		口径(14.8) 底径6.0 鋼高3.9 残存:1完形 ロクロナデ 底部:回転角切→穿孔(造成前)		01001
8	下層	4区 7層上面	口クロかわらけ	端		口径(15.2) 底径7.1 鋼高(4.2) 残存:1完形 ロクロナデ 底部:回転角切→穿孔(造成前)		01002

図版57 SX1200遺物包含層下層出土遺物（1）



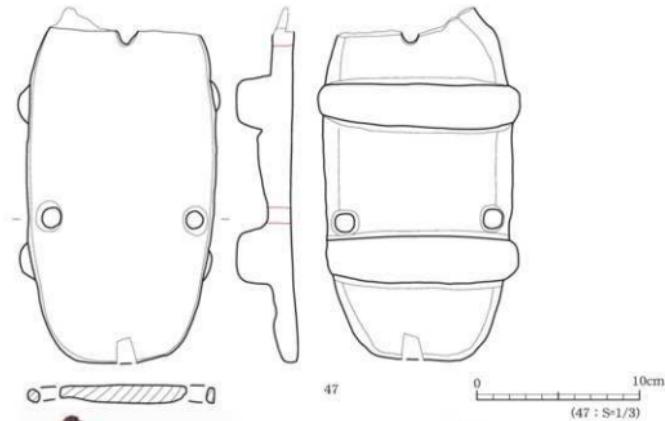
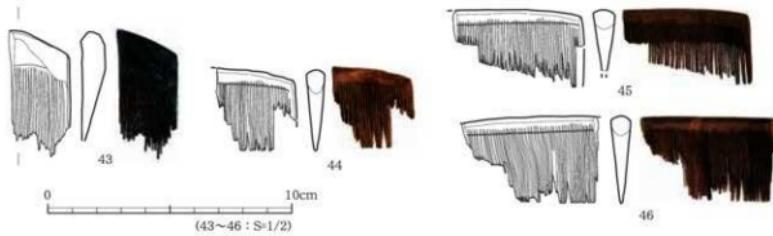
圖版58 SX1200遺物包含層下層出土遺物（2）

(单位: cm)	目次	大別種別	出上層位	種 別	階 段	地 帯	特 徴	類
9	下層	405. 5層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(7.3) 底径(4.2 高さ(1.6	残存: 1/3	完形	クロコナデ: 底部: 回転条切
10	下層	405. 5層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(8.0) 底径(4.2 高さ(2.3	残存: 1/2	クロコナデ	
11	下層	405. 5層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(8.4) 底径(5.2 高さ(2.2	残存: 1/4	クロコナデ	底部: 回転条切
12	下層	405. 5層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(9.0) 底径(5.2 高さ(1.8	残存: 3/5	クロコナデ	底部: 回転条切
13	下層	405. 5層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(8.6) 底径(6.0 高さ(1.8	残存: 1/2	クロコナデ	底部: 回転条切
14	下層	405. 5層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(8.4) 底径(4.4 高さ(1.7	残存: 1/3	クロコナデ	底部: 回転条切
15	下層	505. 3層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(7.8) 底径(4.4 高さ(1.7	残存: 1/3	クロコナデ	底部: 回転条切
16	下層	505. 3層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(8.3) 底径(4.3 高さ(1.9	残存: 1/3	クロコナデ	底部: 回転条切
17	下層	505. 3層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(9.0) 底径(5.5 高さ(1.7	残存: 1/3	クロコナデ	底部: 回転条切
18	下層	505. 3層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(9.1) 底径(5.3 高さ(1.4	残存: 2/5	クロコナデ	底部: 回転条切
19	下層	405. 6層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(8.5) 底径(5.0 高さ(1.8	残存: 3/5	クロコナデ	底部: 回転条切
20	下層	405. 6層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(8.4) 底径(5.0 高さ(2.0	残存: 1/3	完形	クロコナデ: 底部: 回転条切
21	下層	505. 4層上層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(8.3) 底径(5.0 高さ(2.2	残存: 1/2	完形	クロコナデ: 底部: 回転条切
22	下層	405. 7層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(8.2) 底径(4.2 高さ(2.1	残存: 3/5	クロコナデ	底部: 回転条切+ナデ
23	下層	505. 3層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(9.6) 底径(6.2 高さ(2.6	残存: 3/5	クロコナデ	底部: 回転条切
24	下層	405. 7層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(9.0) 底径(5.8 高さ(2.2	残存: 1/2	クロコナデ	底部: 回転条切
25	下層	405. 7層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(7.8) 底径(5.0 高さ(2.1	残存: 1/2	クロコナデ	底部: 回転条切
26	下層	505. 4層上層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(8.2) 底径(6.1 高さ(2.4	残存: 2/5	完形	クロコナデ: 底部: 回転条切
27	下層	405. 5層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(8.1) 底径(5.0 高さ(1.8	残存: 1/3	完形	クロコナデ: 底部: 回転条切
28	下層	405. 7層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(7.6) 底径(5.6 高さ(1.5	残存: 1/2	クロコナデ	底部: 回転条切
29	下層	405. 7層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(8.0) 底径(5.5 高さ(1.8	残存: 1/2	クロコナデ	底部: 回転条切
30	下層	505. 3層	クロコカラホウズキ	小瓶	口徑(8.4) 底径(5.8 高さ(1.5	残存: 2/5	クロコナデ	底部: 回転条切+ナデ



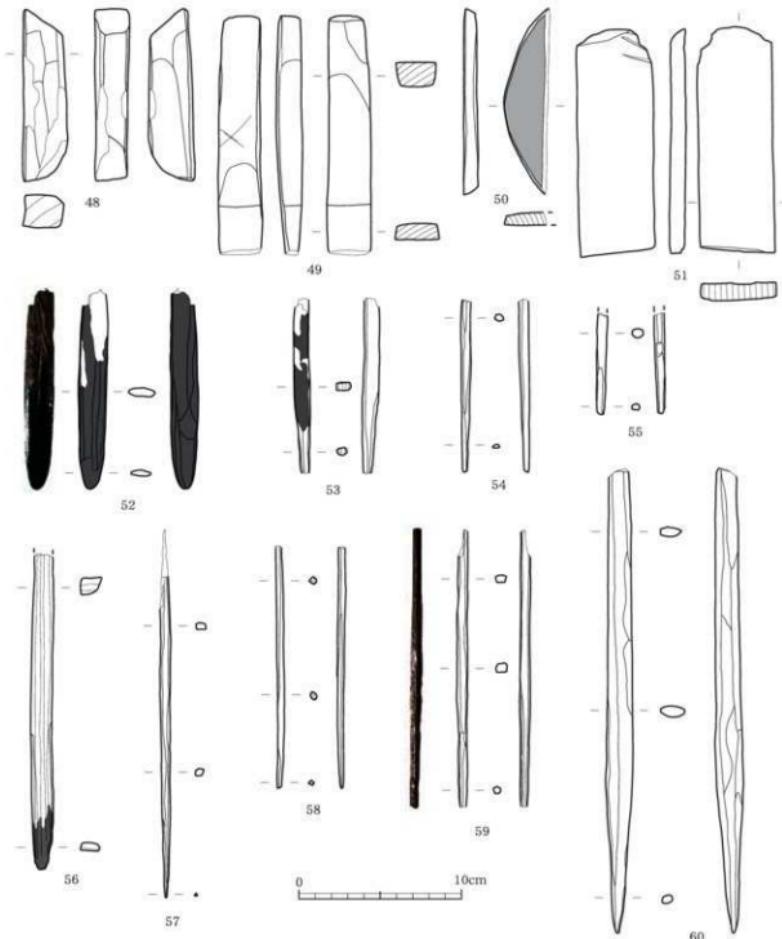
No.	大別種別	出上場位	種 別	形 様	所 在	特	圖	量	
31	下層	S区 3層	ロクロかわらけ	柱状高台型		脚部径7.4 残存: 台部のみ	ロクロナデ	底部: 回転系切→スノコ状往復	02124
32	下層	S区 3層	ロクロかわらけ	柱状高台型		脚部径(11.0) 残存: 一部	ロクロナデ	底部: 回転系切	02125
33	下層	S区 4層上	陶器	山茶柄	山茶柄・湖西系	輪花・残存: 一部	【4型式網】		02120
34	下層	S区 4層	陶器	山茶柄	山茶柄・湖西系	輪花・高台径(4.0) 残存: 一部	輪花	見込み: ナデ 【4型式網】 3と同一個体	01039
35	下層	S区 3層	陶器	梗	常滑		押印?		02133
36	上層	S区 2層	銅製品			金メキ	長(14.8) 幅0.3~0.5 厚0.15		02280
37	下層	S区 3層	鉄製品	刀		長(6.8) 幅3.1 厚0.6			02282
38	下層	S区 3層	瓦			凹面: 布目→ナデ 凸面: 轉印記	【古代の瓦 多賀城分類IIb型タイプ】		02134
39	下層	S区 3層	石製品	砥石		長7.6 幅4.3 厚3.8			02358
40	下層	S区 3層	石製品	砥石		長7.8 幅(8.4) 厚5.9 【研石】			02395
41	下層	S区 3層	石製品	砥石		長(5.8) 幅3.3 厚0.7			02348
42	上層	S区 3層	土製品	便器		スナ入り			02159

図版59 SX1200遺物包含層下層出土遺物 (3)



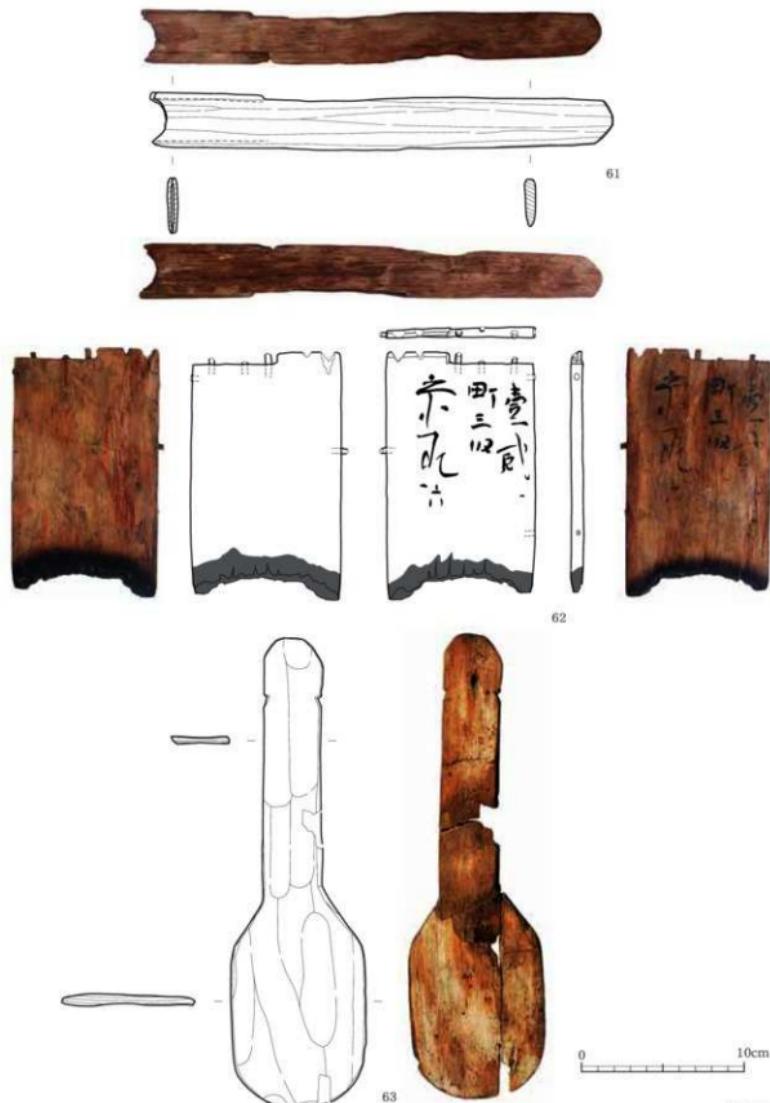
No. 大致部位 出土層位 種別 滲種 地特 備 計量 (単位: cm)									
43	下層	5区 3層	木製品	規範	高(5.2) 幅(2.6) 厚1.0	【イス・牛・籠木取り(脛打)】			02206
44	下層	4区 5層	木製品	規範	高(3.3) 幅(3.3)	厚0.7 【ツバキ科】			01234
45	下層	4区 6層	木製品	規範	高3.2 幅(5.2)	厚0.8 【ツス・牛】			01223
46	下層	4区 6層	木製品	規範	高3.6 幅(5.5)	厚0.8 【ツス・牛】 01223と同一個体			01225
47	下層	5区 4層	木製品	油面下款	長(22.0) 幅11.7 厚3.5	【クリ・籠木取り(脛打)】			02202

図版60 SX1200遺物包含層下層出土遺物 (4)



No.	大別層位	出土層位	種別	器種	施	時		圖	登録
						前	後		
48	下層	4区 5層	木製品	部材		長10.6 幅2.8 厚2.0	【ナナク型 板目】		01246
49	下層	4区 5層	木製品	梗		長(14.8) 幅2.6 厚1.5	【コトラ型 板目】		01245
50	下層	5区 3層	木製品	柄杓(底板)		径15.0 幅(2.7) 厚0.8	日町乳0.4 内面:漆塗り 【スギ 板目】		02244
51	下層	4区 6層	木製品	部材		長13.9 幅4.7 厚1.0	【モミ箋】		01235
52	下層	4区 5層	木製品	漆杓		長(12.3) 幅1.7 厚0.5	漆塗り工具 【モミ箋】		01218
53	下層	4区 7層	木製品	著		長(10.8) 幅1.0 厚0.5	漆塗り工具 【モミ箋】		01256
54	下層	4区 5層	木製品	著		長(10.6) 幅0.6 厚0.4			01323
55	下層	4区 5層	木製品	著		長(6.2) 幅0.6 厚0.8			01491
56	下層	4区 6層	木製品	手火		枝(19.5) 幅1.3 厚1.0	【アガマツ】		01236
57	下層	4区 5層	木製品	著		長(22.6) 幅0.6 厚0.4	【モミ箋】		01210
58	下層	4区 5層	木製品	著		長(14.9) 幅0.4 厚0.4			01324
59	下層	4区 5層	木製品	著		長(17.1) 幅0.7 厚0.5	【モミ箋】		01219
60	下層	4区 5層	木製品	柄杓(柄)		長28.5 幅1.6 厚0.6	【モミ箋】		01209

図版61 SX1200遺物包含層下層出土遺物 (5)



No.	大別解説	出土層位	種別	器種	産地	特	備	(単位: cm)
61	下層	4区 5層	木製品	箱		長28.5 幅3.4 厚0.7 [「ノキ」一枚の材を頭口部分のみ割り、内面を加工		01226
62	下層	4区 5層	木製品	木箱		長(15.2) 幅9.5 厚7.0 亂材(柱打で駆け)の利用 下端を焼失		01349
63	下層	4区 5層	木製品	杓子		長28.8 幅8.3 厚7.5 [毛三國] 捩部先端にのみ		01204

図版62 SX1200遺物包含層下層出土遺物 (6)

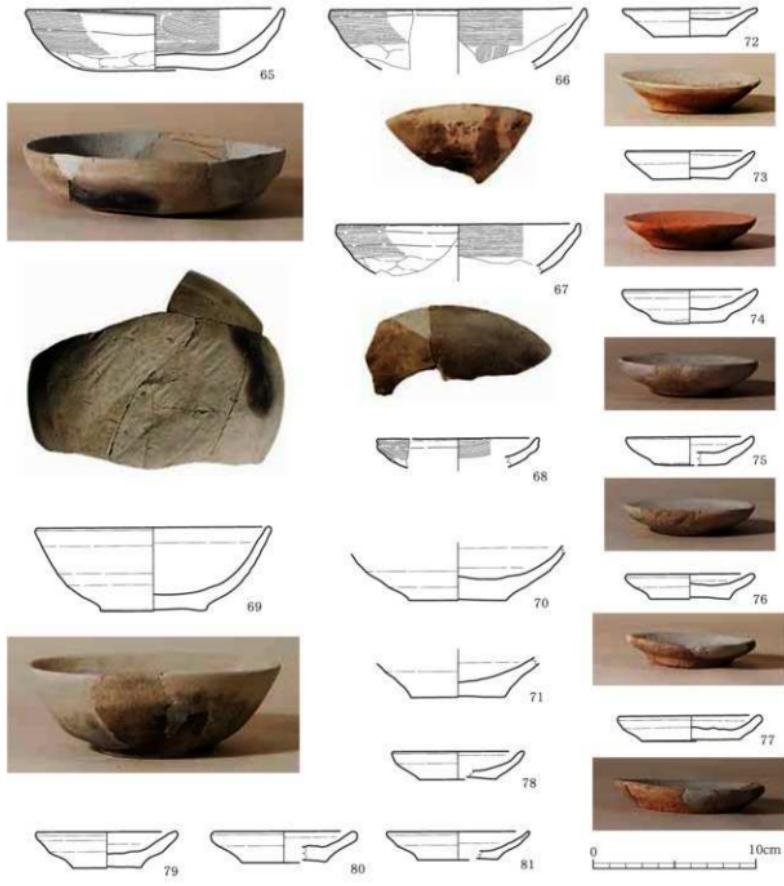
炭化したイネ（胚乳）が多量に出土した。イネやイヌビエーヒエのほかに出土した栽培植物は、ウメ、モモ、コムギ、オオムギ、アサ、シソ属、ナス、ヒヨウタン仲間、メロン仲間、マメ科が認められた。また、花粉分析では樹木花粉の占める割合が非常に低く、様々な水生植物の花粉が目立つという結果が得られた。このため分析を行った三村昌史氏らは、SX1200の付近には森林と呼べるほどのものは存在しなかったと指摘している⁽¹³⁾。

上層からはロクロかわらけ壺（69～71）・柱状高台皿（82～85）・小皿（72～81）、手づくねかわらけ皿（65～67）・小皿（68）、常滑片口鉢（95・97・98）・甕（86～94・96）、青白磁合子蓋（99）・皿（100）、白磁碗（101・103）、鉄地銅象嵌巻（115）、刀（104）、砥石（105～107）、切石、漆椀（108・109）、折敷（114）、曲物、柄杓（113）、弓（111）、鍬（112）、櫛（117）、手火、壁土（116）、鉄滓（110）などのほか、古代の緑釉陶器皿（102）、大戸産須恵器長頸壺が出土した。このうち、90や95は常滑1b～2型式期、101は大宰府分類 類とみられる。65の手づくねかわらけ皿の底部には、スノコ状圧痕が認められ、97は破片が砥石に転用されている。

かわらけは手づくねが共伴するようになるが、両者は製作技法だけでなく、胎土も異なる。手づくねは、皿と小皿が認められ、いずれも口縁部は二段ナデで仕上げられている。また、下層に比べて陶磁器が多く出土している。漆椀は全ての破片資料をみても、全てが両面を黒色漆で仕上げたものであった。鉄地銅象嵌巻（115）は、鉄製の轡で円形の鏡板と喰の一部が出土した。鏡板には銅象嵌で羽を広げた鳥が表現されている。象嵌部分を観察すると、銅は脱落して一部に残るのみである。このため、彫金の様子は比較的容易に知ることができ、タガネ痕は小さな梢円形が連続して糸目状となっているのがわかる。

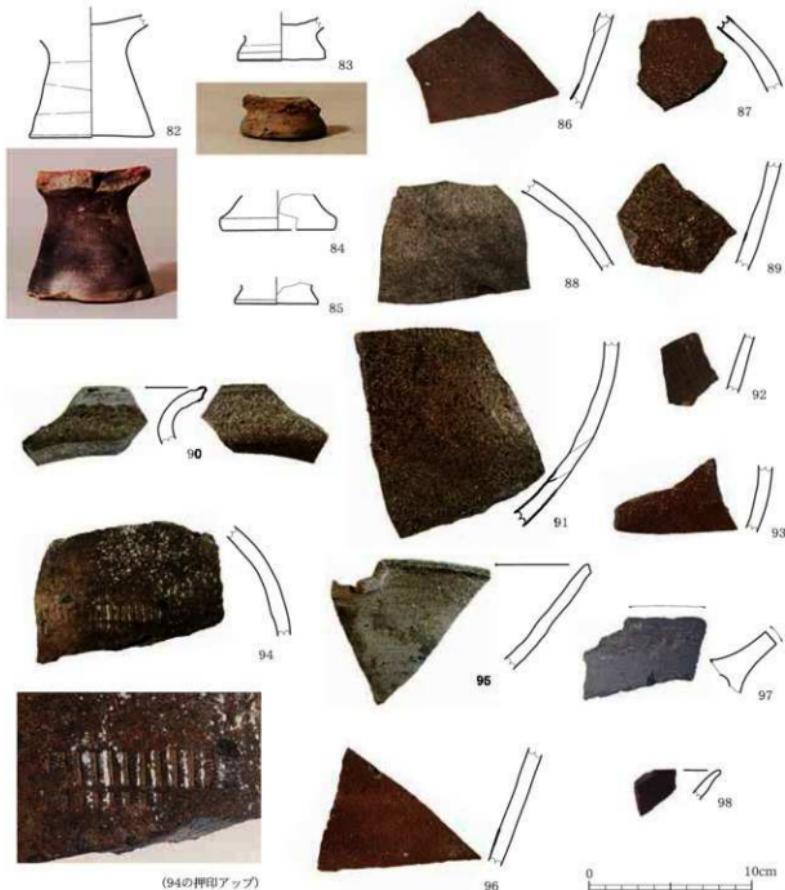


図版63 SX1200遺物包含層下層出土遺物（7）



No.	大樹層位	出土層位	種別	器種	產地	特		圖	單 號
						形	體		
65	上層	5区 2層	手づねかわらけ	皿		口徑16.0 深さ(3.6) 残存:3/5 ボタン:二段ナデ 体部:オサエ 肌面:スノボ状压痕	01042と接合	012143	
66	上層	5区 2層	手づねかわらけ	皿		口徑15.8 残存:一部 口縁部:二段ナデ 体部:オサエ 両面に付着物		02144	
67	上層	5区 2層	手づねかわらけ	皿		口徑(15.0) 残存:一部 口縁部:二段ナデ 体部:オサエ		02145	
68	上層	5区 2層	手づねかわらけ	小皿		口徑(10.0) 残存:一部 口縁部:二段ナデ 体部:オサエ		02146	
69	上層	4区 滅底面	ロクロかわらけ	皿		口徑(4.6) 底径6.6 器高:5.1 残存:1/4 両面:回転系切		01034	
70	上層	5区 2層	ロクロかわらけ	皿		底径(6.0) 残存:1/2 両面:回転系切		02135	
71	上層	5区 1層	ロクロかわらけ	皿		底径(5.8 残存:一部 両面:回転系切		02151	
72	上層	4区 滅底面	ロクロかわらけ	小皿		口徑(4.4) 底径4.8 器高:1.7 残存:3/5 底部:回転系切		01035	
73	上層	4区 滅底面	ロクロかわらけ	小皿		口徑(5.0) 底径4.8 器高:1.7 残存:1/2 両面:回転系切		01036	
74	上層	4区 3層	ロクロかわらけ	小皿		口徑(4.4) 底径4.6 器高:2.0 残存:1/3 底部:回転系切		01026	
75	上層	4区 3層	ロクロかわらけ	小皿		口徑(5.0) 底径4.6 器高:1.7 残存:1/3 底部:回転系切		01025	
76	上層	5区 2層	ロクロかわらけ	小皿		口徑(5.0) 底径4.9 器高:1.5 残存:1/2 底部:回転系切		02139	
77	上層	5区 2層	ロクロかわらけ	小皿		口徑(9.0) 底径6.0 器高:1.6 残存:1/5 底部:回転系切		02138	
78	上層	4区 2層	ロクロかわらけ	小皿		口徑(9.2) 底径4.8 器高:1.7 残存:1/4 底部:回転系切		01040	
79	上層	5区 2層	ロクロかわらけ	小皿		口徑(8.8) 底径4.2 器高:2.2 残存:2/5 底部:回転系切		02140	
80	上層	5区 2層	ロクロかわらけ	小皿		口徑(9.0) 底径(5.2) 器高:1.7 残存:1/4 底部:回転系切		02142	
81	上層	5区 2層	ロクロかわらけ	小皿		口徑(8.8) 底径(4.9) 器高:1.9 残存:1/4 底部:回転系切		02141	

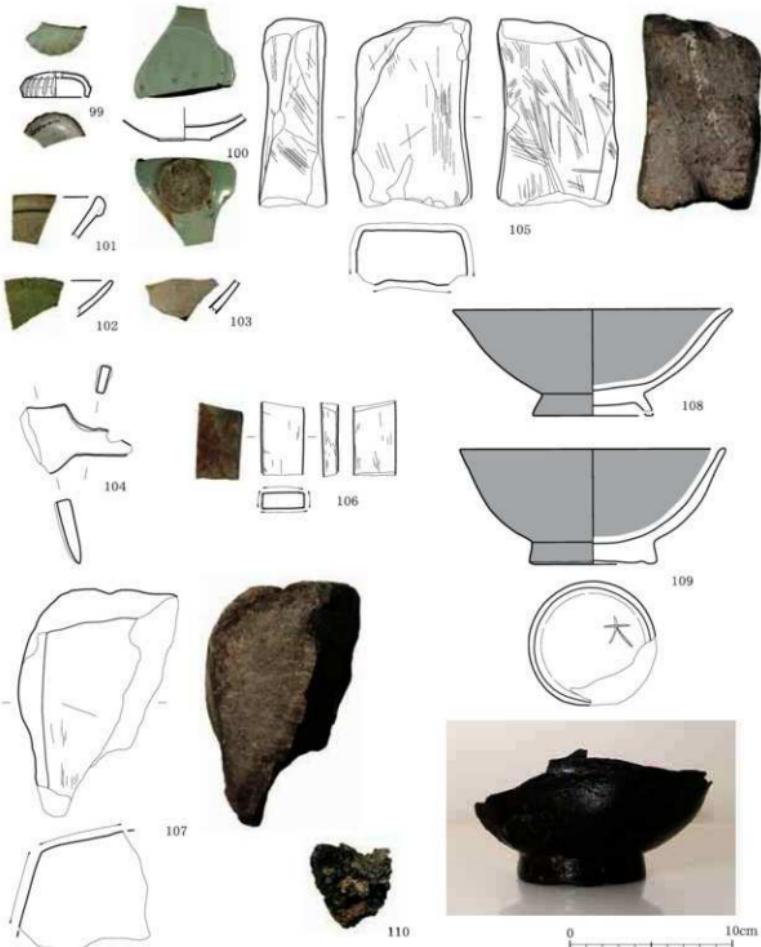
図版64 SX1200遺物包含層上層出土遺物 (1)



(94)の押印アップ

No.	大別層位	出土層位	種別	輪	地	図		単位
						輪	地	
82	上層	4区	輪底面	ロウカホウラカ	柱状高台型	脚部径(7.8)	残存: 片口跡、底部: 回転糸切	01046
83	上層	5区	1層	ロウカホウラカ	柱状高台型	脚部径5.4	残存: 台形のみ、底部: 回転糸切	02137
84	上層	4区	2層	ロウカホウラカ	柱状高台型	脚部径(7.0)	残存: 一部、底部: 回転糸切、全体に摩滅が激しい	01043
85	上層	5区	1層	ロウカホウラカ	柱状高台型	脚部径5.2	残存: 一部	02138
86	下層	4区	2層	脚部	常滑	押印(横行)		01044
87	上層	4区	2層	脚部	常滑	押印		01043
88	上層	5区	1層	脚部	常滑	押印(底盤+脚部)		02154
89	上層	4区	3層	脚部	常滑	押印(横行)		01029
90	上層	5区	1層	脚部	常滑	【常滑1b型式期】		02152
91	上層	4区	3層	脚部	常滑	押印(底盤+脚部)		01028
92	上層	4区	3層	脚部	常滑	押印(横行+格子)		01027
93	上層	4区	3層	脚部	常滑	押印(底盤+脚部)		01032
94	上層	5区	1層	脚部	常滑	押印(横行)		02153
95	上層	5区	1層	脚部	片口跡	常滑	【常滑1b型式期】	02155
96	上層	4区	2層	脚部	常滑	押印(横行)		01033
97	上層	5区	1層	脚部	片口跡	常滑	破片を砾石に転用	02156
98	上層	5区	2層	脚部	片口跡	常滑		02150

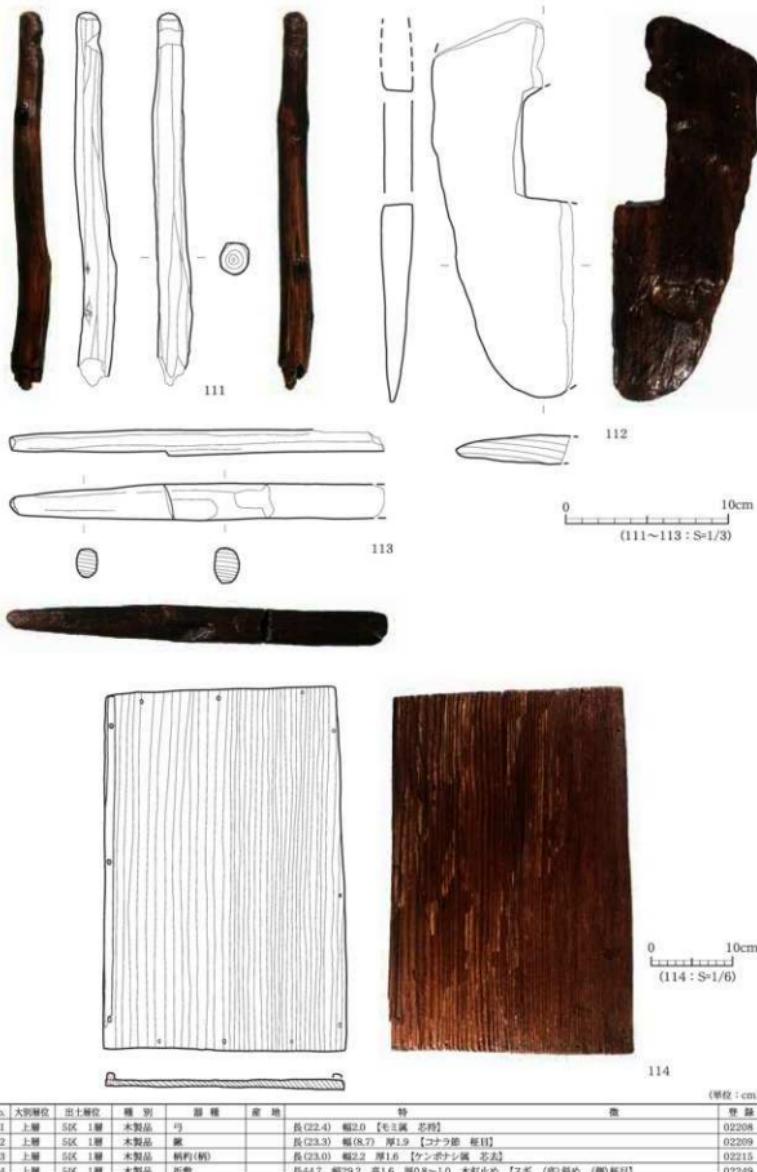
図版65 SX1200遺物包含層上層出土遺物 (2)



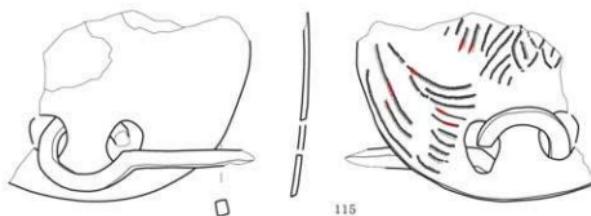
(单位: cm)

No.	大別種別	出土層位	種	形	記	地	特	圖	量
99	上層	5層 2層	青白磁	合子(蓋)			口徑(4.0) 器高(1.6) 残存:1/3		02149
100	上層	5層 1層	青白磁	瓶			直徑3.2 残存:1/2 底面:削出台		02157
101	上層	5層	織部面	白磁	瓶		玉緑 [大学府分類白磁織部面]		02158
102	上層	5層 2層	綠釉	瓶	施設	灰陶			02147
103	上層	5層 2層	白磁	碗	次田				02148
104	上層	5層 2層	鐵製品	刀刃			長(4.7) 幅2.7 厚0.6 開闊		02299
105	上層	4層	織部面	石製品	鐵石		長(11.6) 幅6.7 厚5.2		01398
106	上層	5層 2層	石製品	鐵石			長(4.5) 幅2.6 厚1.0		02351
107	上層	4層	織部面	石製品	鐵石		長(14.0) 幅(8.1) 厚(6.6)		01385
108	上層	5層 3層	漆器	碗			口径(17.2) 深(6.3) 残存:2/5 内外面:黑色漆 【ケヤキ 織木取り】		02204
109	上層	5層 3層	漆器	碗			口径(16.3) 深(7.1) 残存:7/8 内外面:黑色漆 歪形に刻畫「大」 【ケヤキ 織木取り】		02203
110	上層	4層	織部面	鐵製品	铁片				01047

図版66 SX1200遺物包含層上層出土遺物 (3)



図版67 SX1200遺物包含層上層出土遺物 (4)



115

タガネ痕
銅残存部分



0 10cm
(S=2/3)



(レントゲン写真 線尺: 任意)



(タガネ痕アップ)

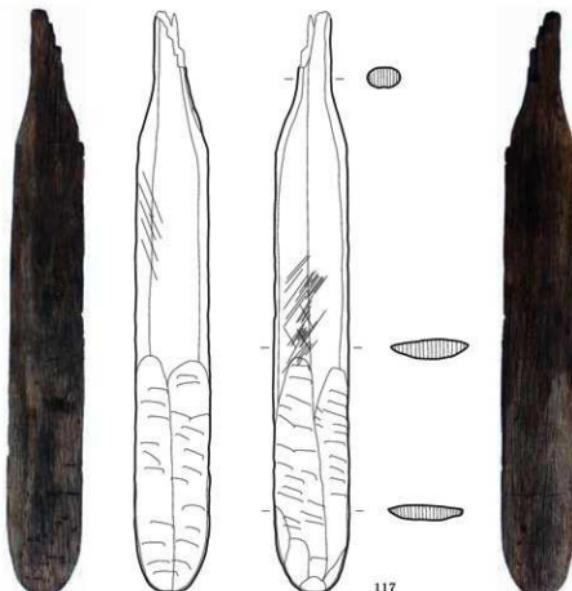


0 10cm
(S=1/3)

(単位: cm)

No.	大別層位	出土層位	種 別	器 難	施 工	特	備	登録
115	上層	4区	複合面 鐵製品	柳葉板・鏡		鉄地剣象嵌帶 鏡板厚(0.5) 鏡板厚(0.2) 喰厚0.4~0.5	タガネ痕: 条目状=鍛削り技法	01359
116	上層	5区 2編	土製品	壁土	スサ入り			02160

図版68 SX1200遺物包含層上層出土遺物 (5)



117



0 10cm
(S=1/6)

先端部(縮尺:任意)

No.	大別部位	出土層位	種 別	器 種	產 地	特	面	量 量
117	上層	SX 1	木製品	櫛	長(71.3) 幅(0.6)9.2 厚(0.4)4.1	【コナラ材】板(日)		02252

図版69 SX1200遺物包含層上層出土遺物 (6)

(註1) SX 1200・1397・1607・1608は、氾濫で埋没したSD 1100河川跡の中央が湿地化したところに形成された遺物包含層である。これまでに行なった本遺跡の報告書『』・『』、および研究発表資料では、「湿地跡」と報告してきたが、以後は「遺物包含層」と改める。

(註2)『』では、SX 1397DをSX 1397の最終形態として報告したが、今回の調査でSD 2241溝跡と一連の遺構であることがわかった。

(註3)平成13・14年度の発掘調査の際、SX 1200・1397遺物包含層の花粉分析や遺構出土の大規模植物化石の種実分析、木製品の樹種同定を行なっており、それらの結果を踏まえてパレオ・ラボの三村昌史・新山雅弘・植田弥生の各氏が中野高柳遺跡の古環境や植物利用の分析を行なっている。その成果は、『中野高柳遺跡』に掲載する予定である。

第 章 まとめ

第 章で述べたとおり、県教育委員会による中野高柳遺跡の発掘調査は7年に及ぶ。今回報告を行ったのは、住宅地区の4区、5区西端、流通地区のA区とB区北東部における中世や近世の遺構についてである。本遺跡の事前調査は、あと1年行う予定である。そのため、詳しい内容の検討は、来年度刊行予定の『中野高柳遺跡』で行うこととし、ここでは報告した地区的遺構や出土遺物について概要をまとめる。

1. 出土遺物の概要と遺構の年代

遺構や遺物包含層から、かわらけ・陶磁器・土製品・石製品・木製品・金属製品・動物遺体・植物遺体が出土している。このうち、良好なまとまりを示すのはS X 1200だけである。したがって、遺物の検討は、まずS X 1200について行い、その他はある程度まとまって出土した遺構について個別に検討を行うこととする。遺物の検討にあたっては、奢侈品である瀬戸産陶器や輸入磁器（青磁・青白磁・白磁）、貯蔵具である陶器壺・甕などは、伝世したり使用期間が長期にわたるケースも考えられるため、これらより使用期間が短いと想定されるかわらけや陶器片口鉢・擂鉢、瓦質土器、漆器の年代を優先し、奢侈品や貯蔵具の年代は補助的に扱う。また、漆器については東北地方で編年作業が進んでいないため、北陸地方の編年（四柳1997）も参考にする。

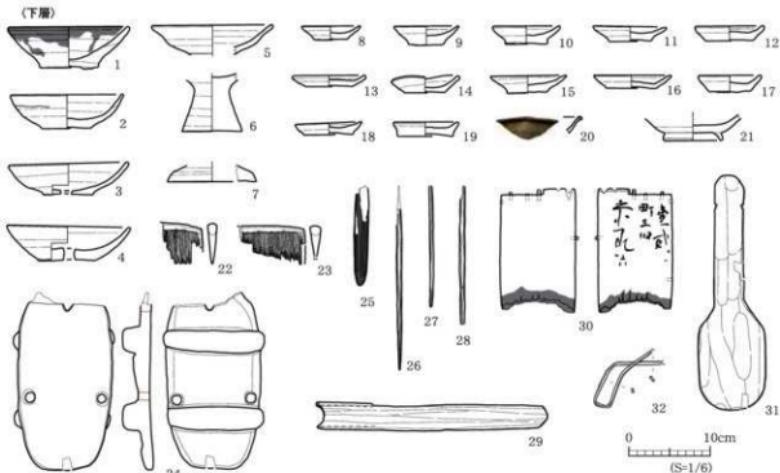
【S X 1200遺物包含層】（図版70）

下層からロクロかわらけ塊（1～4）・柱状高台皿（5～7）・小皿（8～19）、渥美・湖西系の山茶碗（20・21）、常滑産甕などが、上層からはロクロかわらけ塊（37）・柱状高台皿（38・39）・小皿（40～49）、手づくねかわらけ皿（33～35）・小皿（36）、常滑産片口鉢（51）・甕（50）、白磁碗（54）、青白磁皿（53）・合子蓋（53）などが出土した。両層とも柱状高台皿は高脚で皿が付くものと、低脚で小皿がつくものの2タイプが認められる。

上層は組成に手づくねかわらけが加わる、下層に較べてロクロかわらけ塊が減少する、陶磁器の量が増える、という特徴を指摘できる。手づくねかわらけの口縁部は、二段ナデで仕上げられている。ロクロかわらけ（以下、「ロクロ」と略す）と手づくねかわらけ（以下、「手づくね」と略す）の胎土や色調をみると、前者は砂粒を多く含み橙色や褐色であるのに対し、後者は砂粒を含まない均質な胎土で黄橙色や褐灰色を呈している。両者は製作技法だけでなく、胎土や色調まで異なっていることがわかる。

本遺跡周辺で下層と上層の類例を求めるに、下層の良好な例は認められない。上層は多賀城跡第50次調査S X 1629平場跡、S K 1641凹み出土土器（宮城県多賀城跡調査研究所1988）に類例が求められる。両者は厳密な意味での一括例ではないが、土器様相は共通すると指摘されている⁽¹⁾。S X 1629・S K 1641出土土器はロクロ塊・柱状高台皿・小皿、手づくね皿・小皿、常滑産三筋甕、白磁碗からなる。柱状高台皿には高脚と低脚が認められる（図版71）。

S X 1200上層とS X 1629・S K 1641を比較すると、かわらけはロクロと手づくねが共伴し、器

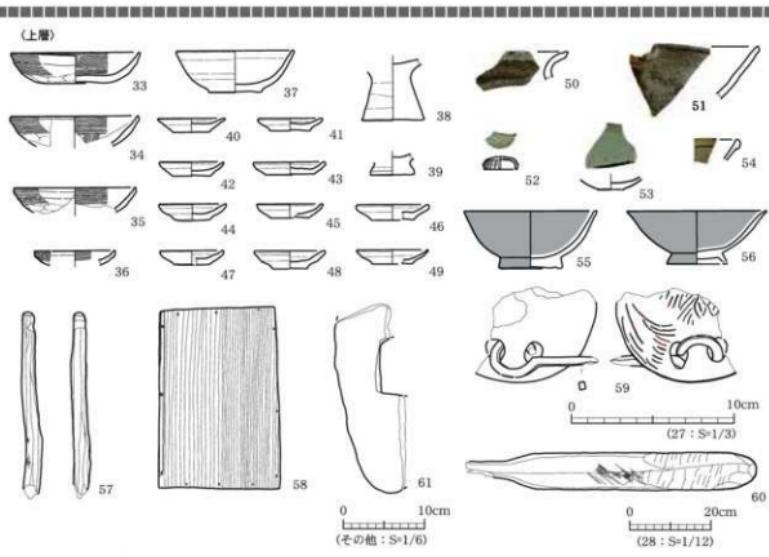


1~4: 口クロかわらけ壺
5~7: 口クロかわらけ柱状高台皿
8~19: 口クロかわらけ小皿

20・21: 山茶碗
22・23: 横櫛
24: 連唐下駄

25: 繡ベラ
26~28: 著
29: 箕

30: 木簡
31: 級子
32: 金メッキ銅製品



33~35: 手づくねかわらけ皿
36: 手づくねかわらけ小皿
37: ロクロかわらけ壺
38・39: ロクロかわらけ柱状高台皿

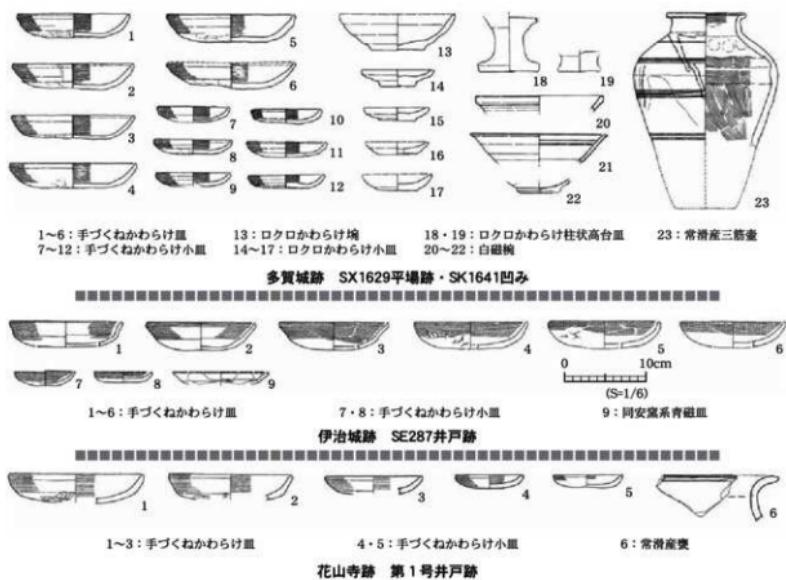
40~49: 口クロかわらけ小皿
50: 常滑産灰瓦
51: 常滑産片口鉢
52: 青白磁合子

53: 青白磁皿
54: 白磁碗
55・56: 唐梅
57: 号
58: 折敷
59: 足地網象嵌物
60: 稲
61: 瓜

図版70 SX1200遺物包含層出土遺物

種はロクロが壺・小皿・柱状高台皿、手づくねが皿・小皿で構成される、柱状高台皿には高脚と低脚が認められる、という共通点が認められる。S X 1629・SK 1641出土土器の年代は、三筋壺が常滑1 b～2型式期（12世紀第2～3四半期）、白磁椀が大宰府分類白磁椀4類（12世紀中頃～後半）であることから、12世紀後半に位置付けられている（高野1990）。したがって、S X 1200上層出土土器の年代は、12世紀後半と考えられる。この年代観は、S X 1200上層出土常滑産陶器が1 b～2型式期（12世紀第2～3四半期頃）の片口鉢・甕であること、玉縁の白磁椀が大宰府分類白磁椀類（11世紀後半～12世紀前半の標識資料とされ、12世紀後半まで一定量を占める）であることと矛盾しない。

一方、S X 1200上層とS X 1629・SK 1641には、後者がかわらけ全体に占める手づくねの割合が高い、という相違点が認められる。こうしたロクロと手づくねの構成比率の違いは、時間差を示す可能性と遺跡や遺構の性格に起因する可能性の双方が考えられる。現在のところ、宮城県内における12世紀代のかわらけ出土例はきわめて少なく、これ以上の検討はできないことから、S X 1200上層とS X 1629・SK 1641の年代は、12世紀後半代という時間幅の中での位置付けにとどめておきたい⁽²²⁾。



図版71 多賀城跡・伊治城跡・花山寺跡出土かわらけと共に伴陶磁器

下層の年代は、上層とロクロの組成が同じで器形に大きな違いがないため、両者の間に大きな時間的隔たりがないとみられること、山茶碗が第4型式期（藤澤1982）で12世紀中葉の年代が与えられていることから、12世紀前半とみられる⁽²³⁾。

【SD 1650=区画B】SD 1650は3層から漆椀、柄杓、常滑産甕、2層から瓦質土器円形小型鉢、常滑産甕、漆椀、錢貨のほか、堆積土から常滑産片口鉢・甕、砥石、茶臼が出土している。3層出土漆椀は、深身で高台が高く、底部が厚い。内面は赤色漆仕上げ、外面は赤色漆で漆絵が施されている。こうした器形は、山形県荒川2遺跡SE 589井戸跡（山形県埋蔵文化財調査センター1997）、北陸地方の漆器編年で一期2・3段階に類例が求められる（四柳1997）。それぞれの年代は、荒川2遺跡が16世紀後半⁽²⁴⁾、一期2・3段階が16世紀中葉～後葉である。2層出土の瓦質土器円形丸形鉢は、東北地方では15世紀後半から16世紀代に認められる（高桑弘美2003）。したがって、SD 1650の年代は16世紀後半を中心と考えられる。

SD 1650は区画Bの南辺を画する溝である。一連の遺構は2～4区で確認しており、2時期（A期→B期）の変遷が認められる（『』）ことから、SD 1650はB期に対応するとみられる。また、重複関係でSD 1650より古いSX 1600道路跡の年代は、13世紀から14世紀代を中心とする（『』）。したがって、区画B（=第一期）の年代は15世紀から16世紀代とみられる。

【SD 1633=区画F】A期堆積土から青磁椀、瀬戸産瓶子、漆椀、鎌柄、砥石、銅製品、B期堆積土から白磁四耳壺、常滑産甕、天目茶碗、瓦質土器火鉢・擂鉢、岸窯産擂鉢、瀬戸美濃産大鉢・大皿・皿、堤系こね鉢、磁器皿・小皿、丸瓦、砥石が出土している。SD 1650に較べて焼物の種類と量が大幅に増える。B期から出土した岸窯産擂鉢は、口縁端部が内側に張り出るもので、白河市小峰城三の丸跡2・3号竪穴遺構（白河市教育委員会1997）や米沢市米沢城二の丸堀跡下層（山形県埋蔵文化財調査センター1999）出土品に類例が求められる⁽²⁵⁾。それぞれの年代は、前者が寛永期、後者は17世紀初頭から18世紀前半と考えられている。また、瀬戸美濃産大鉢・大皿・皿の年代は17世紀代と考えられることから、SD 1633に囲まれる区画F（=第一期）の年代は、17世紀以降とみられる。

【その他の遺構】A区のSE 1647井戸跡は枠内堆積土から近世陶器、枠抜取穴から近世陶器擂鉢や土師質土器灯明皿、キセルが出土しており、近世（=第一期）と考えられる。A区のSE 1637・1641・1648・1651・2126井戸跡の堆積土からは近世陶磁器や土師質土器が出土しており、近世と考えられる。また、A区の遺構のうち、SD 1650区画溝跡より新しいSE 1636・1639・1642・1643・1646・1648・2134井戸跡、SK 1640・1649土壙、さらに、これまでの検討で近世に位置付けられた遺構より新しいSE 1635・1652井戸跡も近世とみられる。

SD 2241溝跡は第一期のSX 1397遺物包含層より新しく、第二期のSD 1633区画溝跡より古い。南へ106m以上延び、79mの地点では東へ分岐する。堆積土から近世陶磁器が出土していないことから、第一期、もしくは第二期に属すとみられる。

2. 鉄地銅象嵌巻について（図版72）

SX 1200上層から出土した鉄地銅象嵌巻は、馬の口元両脇に円形の「鏡板」が備わる『鏡巻』とい

う形式である。「鏡板」1枚と馬が口に含む「喰」^(注6)が出土した。年代は共伴した土器・陶磁器から12世紀後半と考えられる。鏡板は1/3ほど残存しており、径9.5cm、厚さ0.2cmほどで、文様が施された表側はわずかに凸面となっている^(注6)。喰は端部をフック状に曲げ、それを鏡板の透かしに嵌め込んでいる。他の一端は欠損するが、後述する他例を参考にするとフック状に曲げられ、反対側の鏡板に嵌め込まれた喰につながり、二連式の喰を構成すると考えられる。

文様はタガネで彫り込まれ、窪めた部分に銅板を嵌めたのち研ぎ仕上げが行われたと考えられる。銅は脱落して一部に残るのみで、象嵌のち渡金・渡銀といった着色処理が行われたかどうかについては不明である。文様は透かしの上に胸の羽毛、左は広げた羽と考えられ、全体としては飛翔する鳥が表現されたとみられる。また、文様を詳細に観察すると、タガネ痕は小さな楕円形が連続して糸目状となっている（図版68）^(注7)。

鉄地銅象嵌唐の類例は、他に岩手県平泉町志羅山遺跡（岩手県埋蔵文化財調査センター2000）と京都市法住寺殿跡（古代学協会1984）の2例あげられるにすぎない（以下の記述にあたり、それぞれの唐は「中野高柳唐」、「志羅山唐」、「法住寺殿唐」と呼称する）^(注8)。中野高柳唐は一部が残存するのみであるが、志羅山唐と法住寺殿唐は鏡板や喰のほか、主要な部品がそれぞれ2対残っており、唐全体の様子がよくわかる資料である。志羅山唐は羽を広げて飛翔する鷺が左右の鏡板に対称の構図で描かれたのち、銅象嵌が行われた。法住寺殿唐は羽を広げて飛翔する鶴が左右鏡板に対称に描かれたのち、銅象嵌が行われ、さらに渡金が施されている。頭の位置をみると、志羅山が上（立聞側）にあり、法住寺殿が下（喰側）と違いが認められるが、双方とも馬への装着時は鳥の頭が前を向くように描かれている。こうしたことから、中野高柳唐は左右の鏡板に対称の構図で飛翔する鳥が描かれ、馬への装着時は鳥の頭が前を向いていたとみられる。

志羅山唐と法住寺殿唐を比較した久保智康氏は、「志羅山唐は法住寺殿唐の構造形式を細部まで踏襲するが、鍛造技法は相対的に稚拙で、象嵌技法が異なる」と指摘している（久保2000）。この2者と中野高柳唐を比較すると、中野高柳唐は胸の羽毛の表現が志羅山唐と似ており、頭は上（立聞側）にあったとみられること、象嵌時のタガネ彫りが糸目状となっていることから、文様と象嵌技法が志羅山唐と共に通する。一方、文様表現の点では中野高柳唐が線状に彫り窪める「線象嵌」であるのに対し、志羅山唐は「線象嵌」（胸～羽の基部）と面的に彫り窪める「平象嵌」（羽の先端部分）が併用されており、細部で相違点が認められる。

鉄地銅象嵌技法は、11世紀半ば平等院鳳凰堂飾金具を最初の例とし、12世紀後半までに京都市法住寺殿跡出土雲龍文象嵌銀形ほか数例を見るだけで、以後途絶えた短命の技法であり、当時にあってもきわめて特殊な技法である（久保2000・2002）。このため久保氏は、志羅山唐は「法住寺殿唐の形成や製作技法を熟知した工人が平泉に招聘され、地元工人と共同で製作されたと考えられ、このような工房の編成に平泉藤原氏が直接関わったことは想像に難くない」と述べている（久保2000）。したがって、志羅山唐と類似した文様を持ち同じ象嵌技法で製作された中野高柳唐は、平泉藤原氏が管轄した工房の製品である可能性が高い。



出典 志羅山遺跡：岩手県埋蔵文化財センター（2000） 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第312集
法住寺殿跡：古代学協会（1984） 平安京研究調査報告第13編

3. S X 1200出土品にみる12世紀の中野高柳と平泉藤原氏

S X 1200遺物包含層は大別2層に分けられ、出土遺物の年代は下層が12世紀前半、上層は12世紀後半と考えられた。12世紀は本遺跡の大別遺構期第Ⅳ期にあたる。

S X 1200のかわらけと同じ様相を示す資料は、岩手県平泉町から大量に出土している。平泉出土の12世紀代のかわらけは6期に分けて理解されている（羽柴2001）。12世紀前半のⅠ～Ⅲ期はロクロかわらけのみで、下層とは塊・小皿・柱状高台皿といった器種構成も共通しており、主体を占める塊や小皿の器形も両者に違いは認められない⁽²⁹⁾。

ロクロかわらけと手づくねかわらけが共存するのは4期（12世紀中頃）以降であり、上層の年代観と一致する。手づくねかわらけの口縁部は二段ナデで仕上げられ、底部にスノコ状圧痕が認められるものがある。また、胎土や色調がロクロかわらけと異なる。こうした手づくねかわらけは平泉を中心に認められ、「京都系平泉型かわらけ」と呼ばれている（飯村1996）。平泉型手づくねかわらけは、在地の土器製作技法から生まれたものではなく、12世紀中頃に京都指向の強い平泉藤原氏がもたらしたもので、それらが出土する遺跡は平泉と深い関係があったと理解されている（八重樫2001など）。

平泉から出土した土器・陶磁器には、手づくねかわらけ・常滑2～3型式期陶器・渥美産陶器・水沼産陶器・白磁が特徴的に認められる（八重樫前掲）。S X 1200上層からは、手づくねかわらけに加えて量は少ないながらも常滑1b～2型式期の陶器や輸入陶磁器が出土しており、こうした土器・陶磁器の様相は平泉に類似する。

S X 1200からは土器・陶磁器のほか木製品、石製品、金属製品など様々な遺物が出土し、堆積土中には炭化物や灰・焼土を含む廃棄層が認められた。また、遺物をみると柱状高台皿、山茶碗、青白磁、白磁、金メッキが施された銅製品、鉄地銅象嵌巻、木筒など奢侈品や識字層の存在を示すものが含まれる。したがって、本遺跡では12世紀代の施設は特定できていないが、S X 1200の近辺には第一期をとおして集落が存在し、その中には多賀国府の在庁官人などといった有力者の屋敷が存在したと考えられる。

かわらけは基本的に一過性の器であり、多くは宴会儀礼に使われたと考えられている（藤原1988）。12世紀後半の土器・陶磁器において平泉と共に通性が認められることは、当時、中野高柳遺跡に屋敷を構えた人物が、平泉藤原氏と一定の関係を結んでおり、平泉と同じような飲食儀礼を行っていたことを示すと考えられる⁽²¹⁰⁾。また、宮城県内では類例の少ない12世紀前半のかわらけがまとまって出土し、同時期の平泉と較べて組成や器形に大きな違いが認められないこと、奢侈品や識字層の存在を示す遺物が出土したことは、こうした平泉との関係が12世紀前半からあった可能性を示すとみられる。さらに、12世紀後半の層から藤原氏が管轄した工房の製品とみられる鉄地銅象嵌巻が出土し、現在のところ類品が志羅山遺跡のみに認められることは、中野高柳の主と平泉藤原氏との関係は密接であった可能性をも示唆する。

なお、12世紀後半と考えた上層出土土器は、手づくねかわらけ皿の口径が15cm以上であることから、羽柴編年の4～5期（中頃～第3四半期）に相当すると思われる⁽²¹¹⁾。また、上層には12世紀後半代の平泉にみられないロクロかわらけ塊・柱状高台皿が認められる。前述の多賀城跡S X 1629・SK

1641でも手づくねかわらけ皿の口径が15cm前後を主体とし、ロクロかわらけ塊と柱状高台皿が共伴する。こうした状況は、S X 1200上層やS X 1629・S K 1641の年代が12世紀後半でも古い時期に位置付けられるという時間差を示すものなのか、12世紀後半の中での平泉と多賀城跡や中野高柳遺跡周辺、すなわち多賀国府域との地域差を示すものであるのかについては、今後の資料数の増加を待って検討したい。

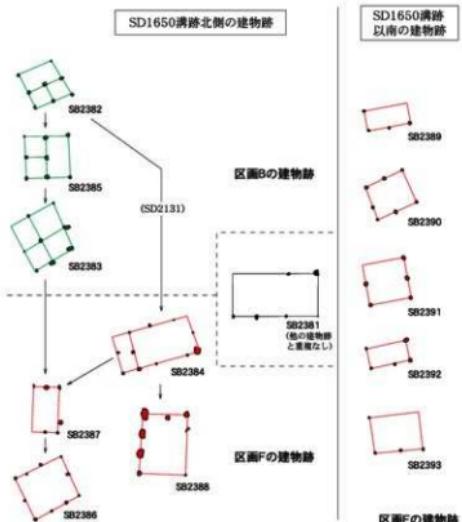
4. 建物跡の特徴と年代

A区で15棟、4区でも15棟の掘立柱建物跡を検出した。このうち4区で検出したS B 1382～1396建物跡は、すべて区画Bの内部に位置し、他に属し得る区画がないことから区画Bに属すると考えられる。したがって、建物跡の年代はSD 1650溝跡出土遺物から15～16世紀代と考えられる。

A区で検出した建物跡のうち、S B 2389～2393建物跡は、区画Bの南辺であるSD 1650溝跡以南に位置し、区画Fの南辺を画するSD 1633溝跡より北に位置する。さらに、S B 2391を除く建物跡はSD 1650より新しいことから、区画Fに属し17世紀以降の建物跡と考えられる。一方、S B 2382～2388建物跡は区画Bおよび区画Fの双方の区画に属し得る。そこで、これらの建物跡が区画Bまたは区画Fのいずれの区画に属するかについて検討する（図版73）。

S B 2382～2388建物跡の平面構造とその新旧関係を整理すると図版73のようになる。このうち、新旧関係で古いS B 2382・2383・2385建物跡の3棟は、桁行、梁行とも2間の正方形に近い平面で、建物内部にも柱穴があるという共通した特徴がある。これに対し、これらより新しいS B 2384・

2386～2388建物跡は内部に柱のない長方形平面の建物であり、先に区画Fの建物群と位置付けたS B 2389～2393建物跡の平面と共通している。以上のような新旧関係と平面構造の共通性から、S B 2382・2383・2385建物跡は区画B、それより新しいS B 2384・2386～2388建物跡は区画Fに属する建物跡とみておきたい。なお、S B 2381建物跡は他の建物跡との新旧関係は不明であるが、平面構造が区画Fの建物跡と類似することからこの区画に属するとみられる。



図版73 A区北東部の建物跡平面模式図と新旧関係

5. 区画の様相

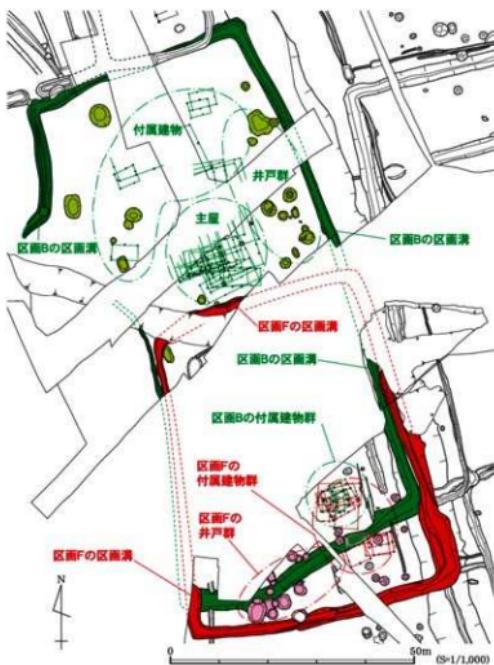
-区画B- (図版74)

〈規模〉区画Bは、区画溝に2時期の変遷（a期→b期）がある。このうち残存状況が良好なb期についてみると、SD 1231（北辺～西辺北側）、SD 1248（東辺）、SD 1289（西辺南側）、SD 1650（南辺～東辺南側）の各溝で区画されている。区画の規模は、区画の内法で測ると南北約101～108m、東西約43mで南北に長い長方形の区画で、西辺の中央は西へ張り出す。これより古いa期の区画溝は、b期の溝と重複する部分が多く、北辺でSD 1223・1229・1230溝跡、東辺でSD 1249溝跡の部分的な確認にとどまる。

〈内部の様子〉区画内部の建物跡は、北部、中央部、南東隅部の3ヵ所でまとまって検出された。これらのうち、中央部の建物跡は桁行が3間以上のが大半で、5間以上、総長10mを超えるものが多く、縁もしくは廂をもつものも多く見受けられる。一方、北部で検出された建物跡は、規模が小さく廂をもつものがない（『』）。また、南東隅部の建物跡は桁行、梁行とも2間と小規模であり、建物の内部にも柱をもつ構造である。

これらの特徴から判断すると、中央部の建物群は、区画内のほぼ中央に位置し、規模が大きく、縁もしくは廂を備える建物もみられることから、主屋に相当する主要な建物跡が数回にわたりて建て替えられたものと考えられる。また、北部、南東部の建物群は区画の縁辺寄りに位置することや、建物の規模が小さく、縁や廂などを有さないことなどから、屋敷の付属的な建物跡が位置を大きく変えずに建て替えられたものであると考えられる。

その他の施設として、建物群から離れた区画の縁辺部は、西侧で竪穴造構やゴミ穴とみられる大型土壙、東側の北寄りでは区画溝から水を引き込んだ大型の竪穴造構（S X 1260）が認められる。また、東側の中央、主屋建物と考えた建物群の東方には、井戸跡が集中してみられる。このように主屋が敷地の中



図版74 区画B・Fの構成

心に位置し、付属建物、井戸、大型土壇などが区画の縁辺に配される敷地利用の状況は、13～14世紀代の屋敷跡である区画Gのあり方と共に通じており（『』）、13世紀以降、中世の屋敷構成は大きく変わらずに変遷しているといえる。

一区画F－（図版74）

〈規模〉 4区で検出したSD 1275（北辺西側）、SD 1288（西辺北側）と、A区北端で検出したSD 1633（西辺南側～南辺～東辺）の溝跡で区画されている。区画溝は2時期の変遷（a期→b期）が認められる。規模はa期・b期とも区画の内法で測ると南北約59m、東西約48mの方形の区画とみられる。

〈内部の様子〉 先の検討でこの区画に属すると考えた建物跡は、区画の南東隅部分に位置する。いずれも桁行2～3間、梁行1～2間の建物跡であるが、SD 1650溝跡北側のものは桁行が3間であるのに対し、南側ではさらに簡略な構造である桁行2間のものしかみられない。これらは、他の区画で確認されているような主屋に相当する建物跡に較べて、いずれも平面構造が単純で規模が小さいことや、位置が区画の南方に偏ることなどから、屋敷内でも付属的な建物跡であると思われる。ただ、その中でも北に規模の大きいもの、南に小さいものがまとまっていること、北の建物跡には桁行3間、梁行2間の身舎に西側1間に縁または扉が付くものがみられることなど、付属的な建物と考えられるものの中でも場所によって構造形式の違いが窺える。このような違いは付属建物の種類、用途などに起因すると思われる^{〔註1〕}。区画内のその他の施設として、南縁辺には井戸が集中して認められる。なお、今回報告したものは区画の一部にとどまっており、区画の全体的な構成については、仙台市教育委員会調査分の報告を待ちたい。

〔註1〕 SK 1641出土土器は、SX 1629平場につくられたSD 1640が理まりきらない問に投棄された資料である。報告書でSK 1641とSX 1629の土器は器形的に違いは認められないこと述べていることから（宮城県多賀城跡調査研究会1988）、一括して扱うこととする。

〔註2〕 12世紀後半に位置付けられる伊治城跡E 287井戸跡（栗原町教育委員会1993）や花山寺跡第1号井戸跡（宮城県教育委員会1990）では、手づくねかわらけの小皿が一定量を出するのにに対し、ロクロかわらけは全く認められない（図版71）。ロクロかわらけは伝統的な在地製作技法によるが、手づくねかわらけの製作技法は平泉藤原氏が京都から持ち込んだものである（八重樋2001）。したがつて、かわらけ消費のあり方と遺跡や構造の性格によって異なると考えられる。手づくねかわらけの構成比率が高い遺跡は、平泉藤原氏との結びつきが強いとみられる。

〔註3〕 下層出土山茶碗の産地や年代観については、京都国立博物館の尾野善裕氏、関西文化財調査会の吉川義彦氏、多賀城市埋蔵文化財調査センターの千葉幸弥氏からご教示いただいた。

〔註4〕 荒川2遺跡の年代については報告書で16世紀前半としていたが、報告者の一人である高桑登氏は、のちに16世紀後半と改めている（高桑登2003a）。

〔註5〕 岸壁廻廊について、福島市振興公社文化財調査室の福江格氏からご教示いただいた。

〔註6〕 出土した唐の計測値は、鉛取り終了後のものであり、本来はもう少し厚みがあったと考えられる。

〔註7〕 鉄地網象嵌飾の観察にあたっては、以下の文献を参考にした。

・岩手県埋蔵文化財調査センター（2000）『志羅山道跡第46・66・74次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第312集

・久保智康（2000）「鷺勢文庫象嵌鏡について」『志羅山道跡第46・66・74次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第312集pp.413～422

・久保智康（2002）「飾金具」『日本の美術』第437号至文堂

〔註8〕 鉄地網象嵌飾については、京都国立博物館久保智康氏、弘前大学の藤沼邦彦氏、岩手県埋蔵文化財センターの羽柴直人氏からご教示いただいた。

〔註9〕 平泉出土ロクロかわらけ塊は、時代が下るにつれて器高が低くなり盤形化する。こうした見方を適用すると、下層の塊は器高が高く羽柴編年の1～2周（12世紀前後）と共通する。下層の年代は、器高のわかる塊が4点と少なく、中野高柳道跡周辺では同時期の類例がないことから、現時点では以上の年代の較り込みは行わず、12世紀前半代という幅で捉えておく。

〔註10〕 平泉では、完形品のかわらけの一括廻葉土坑が認められるが、本遺跡では今のところ認められない。これは大規模な宴会儀礼が行われなかった、もしもはその回数が少なかったことを示すと考えられる。かわらけの様相に同じでも、その消費のあり方は道筋の性格によって異なる。中野高柳道跡は多賀国府の周辺に位置することから、かわらけの消費ランクとしては平泉藤原氏を頂点とする平泉～多賀国府～中野高柳といった3番目（在官庁人等の有力者）に位置するとみられる。また、柳之寺跡出土漆桶・皿のはとんどは、黒色漆

仕上げである（岩手県埋蔵文化財センター1995）。S X1200から出土した漆桶は2点であるが、いずれも木目が見える稚拙なつくりで、仕上げは内外とも黒色漆である。中野高柳遺跡と平泉は、土器・陶器だけではなく、漆器の様相も共通するとみられる。

(註11) 平泉の手づくねかわらけ皿(=大型手づくねかわらけ)は、第4四半期になると小型化し、その目安は口径13.5cm前後と指摘されている(松本1995)。

(註12) 18世紀中期の例があるが、屋敷内の建物構成がわかるものとして宝解7(1757)年二月の石母田氏「家中屋敷改帳」には、「居家、長屋門、表門、中門、広間、台所、附屋、物置、長屋、蔵、馬屋(厩)、小家(小屋)」などの建物名がみられる(佐藤巧1979 p.270)。今回の調査で付属建物を考えたものは、これららのうち、附屋、物置、馬屋もしくは小屋にあたるものと思われる。そして、付属的建物の規模がよくわかる例として、「一道真坂村富塚長門屋敷并下中居家改帳」(享保3(1718)年、「真坂村白川家文書」)にみえる建物は、馬屋が最小で2×1.5間、最大で5×2.5間のものがあり、およそ3×2間(約5.4m×約3.6m)が平均的な規模である。また、小屋は最小で3×1.5間、最大で6×2.5間の規模で、およそ4×2間(約7.2m×約3.6m)程度が平均的なものである(前出佐藤巧pp.301~314)。区画Fの南東隅で検出した建物跡は、これらと比較しても規模の面で大きさにかけ離れるものではない。

〈引用・参考文献〉 (著者別、五十音順)

- 秋田県教育委員会 (2000) 「西崎遺跡」 秋田県文化財調査報告書第303集
- 飯村 均 (1996) 「平泉から鎌倉へ出土かわらけらみる東国」 (財)サントリー文化財団研究助成報告書
- 飯村 均 (1997) 「中世食器の地域性－東北南部－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 pp.58~76
- 飯村 均 (1998) 「東国のかわらけ」『中近世土器の基礎研究』III pp.13~26 日本中世土器研究会
- 飯村 均 (2004) 「土器から見た中世の成立」『中世の系譜』考古学と中世史研究 pp.169~178 高志書院
- 伊藤義 (2000) 「鎌倉の御家人たち」『仙台市史編史編2－古代中世－』 pp.214~236 仙台市史編さん委員会
- 入間田宣夫・大石直正編 (1992) 「よみがえる中世7～みちのくの都多賀城・松島」 平凡社
- 入間田宣夫・本澤慎輔編 (2002) 「平泉の世界」奥羽史研究叢書3 高志書院
- 岩手県埋蔵文化財調査センター (1995) 「柳之御所跡第21・23・28・31・36・41次発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集
- 岩手県埋蔵文化財調査センター (2000) 「志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第312集
- 宇野隆夫 (1989) 「考古資料にみる古代と中世の歴史と社会」 真陽社
- 宇野隆夫 (1997) 「中世食器様式の意味するもの」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 pp.377~428
- 及川 司 (1998) 「岩手県における11～19世紀の土器―かわらけを中心として―」『東北地方の在地土器・陶器』 pp.65~69 東北中世考古学会・福島県考古学会
- 及川 司・杉沢昭太郎 (2003) 「陸奥北部1～岩手県」『中世奥羽の土器・陶器』 pp.37~48 東北中世考古学会
- 大石直正 (1992) 「みちのくの都の中世」「くらしを支える市場」「よみがえる中世7～みちのくの都多賀城・松島」 pp.28~37、99~107 平凡社
- 大石直正 (1995) 「平泉と多賀国府」『中世都市研究』第2号 pp.73~102 中世都市研究会
- 大石直正 (1998) 「仙台市の板碑」『仙台市史特別編5－板碑－』 pp.494~505 仙台市史編さん委員会
- 大石直正 (2000) 「深まる動乱」『仙台市史通史編2－古代中世－』 pp.354~375 仙台市史編さん委員会
- 岡田清一 (2000) 「村と市と在家」『板碑のこころ』『仙台市史通史編2－古代中世－』 pp.237~257、263~270 仙台市史編さん委員会
- 小野正敏編 (2001) 「解説・日本の中世遺跡」東京大学出版社
- 小野正敏 (2004) 「中世武士の船、その建物系譜と景観」『中世の系譜』考古学と中世史研究1 pp.179~206 高志書院
- 久保智康 (2000) 「駕籠象嵌馬具について」『志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第312集 pp.413~422
- 久保智康 (2002) 「飾金具・日本の美術第437号」至文堂
- 古代学協会 (1984) 「法住寺跡」 平成京跡研究調査報告第13輯
- 斎藤利男 (1992) 「多賀国府の都市プラン」「よみがえる中世7～みちのくの都多賀城・松島」 pp.44~62 平凡社
- 佐藤 巧 (1979) 「仙台藩における「破綻諸土屋敷」「近世武士住宅」」 pp.246~368
- 佐藤 洋 (2003) 「陸奥南部2～宮城県」『中世奥羽の土器・陶器』 pp.29~36 東北中世考古学会・高志書院
- 柴組勇夫ほか (2004) 「東海地方山茶碗研究の現在と課題」文部科学省科学研究費・特定領域研究(2) 「中世土器・陶器編年研究と流通様相の年代的解明」 球
- 白河市教育委員会 (1997) 「小峰城跡」白河市埋蔵文化財調査報告書第21集
- 白鳥良一 (2003) 「多賀城から中世多賀国府」、「白い国のは」平成15年11月号(通巻567号) pp.4~13
- 白根晴大 (2000) 「莊園と公領」『仙台市史通史編2－古代中世－』 pp.176~187 仙台市史編さん委員会
- 仙台市教育委員会 (2000) 「王ノ塙遺跡」仙台市文化財調査報告書第249集
- 仙台市史編さん委員会編 (1998) 「仙台市史特別編5－板碑－」
- 仙台市史編さん委員会編 (2000) 「仙台市史通史編2－古代中世－」
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター (1990) 「新田遺跡第4・11次調査」 多賀城市文化財調査報告書第23集
- 太宰府市教育委員会 (2000) 「太宰府塙坊跡－陶器分類編－」 太宰府市の文化財第49集
- 高桑 登 (2003 a) 「奥羽南半における「伊達氏系遺物」の分布について」『研究紀要』創刊号 pp.136~145 山形県埋蔵文化財調査センター

- 高桑 登 (2003 b) 「東北」『中世土器研究の今日的課題—土器研究と中世史研究—』 pp.5~18 日本中世土器研究会
- 高桑弘美 (2003) 「瓦質土器」『中世奥羽の土器・陶磁器』 pp.95~110 東北中世考古学会編 高志書院
- 高野芳宏 (1990) 「宮城県における9~13世紀の土器」『土器からみた中世社会の成立』 pp.19~28 シンポジウム実行委員会
- 高橋博志 (2002) 「陶器生産と陶磁器流通」『鎌倉・室町時代の奥州』奥羽史研究叢書4 pp.228~249 高志書院
- 田中朗和 (1992) 「「山沿いの屋敷跡」『丘の上の世界』『よみがえる中世7~みちのくの都多賀城・松島』』 pp.93~98, 145~161 凡人社
- 田中朗和 (1995) 「仙台市域の中世城館・集落跡」『中世都市研究』第2号 pp.32~48 中世都市研究会
- 田中朗和 (2000) 「屋敷と路の跡から探る中世」『戦国期のまちとくらし』『仙台市史通史編2—古代中世』 pp.271~282 仙台市史編さん委員会
- 田中朗和 (2002) 「陸奥国「国府城」の考古学的様相」『鎌倉・室町時代の奥州』奥羽史研究叢書4 pp.50~77 高志書院
- 千葉季弥 (1992) 「武士の屋敷の発見」『よみがえる中世7~みちのくの都多賀城・松島』 pp.66~92 凡人社
- 千葉季弥 (1995) 「多賀城から府中へ」『中世都城研究』第2号 pp.13~31 中世都城研究会
- 千葉季弥 (1997) 「考古学からみた中世の多賀城」『多賀城史1—原始・古代・中世』 pp.549~591 多賀城史編纂委員会
- 築城部教育委員会 (1993) 「『平治城跡—平成4年度発掘調査報告書』」築城部文化財調査報告書第6集
- 東北大学院中世史研究会編 (1994) 「『中世陸奥国城の研究』」
- 東北中世考古学会編 (1998) 「東北地方の在地土器・陶磁器」
- 東北中世考古学会編 (2001) 「『樹立と堅穴—中世構造論の課題』」高志書院
- 仲田茂司 (1999) 「東国中世の漆器」『考古学研究』第46巻第1号 pp.72~90 考古学研究会
- 中野晴久 (1994) 「生産地における編年について」『中世常滑焼をとおって』資料集 pp.7~181 日本福祉大学知多半島総合研究所
- 中野晴久 (1997) 「「土器系中世陶器の生産」『研究紀要』第5編 pp.7~24 潤戸市埋蔵文化財センター
- 水原慶二編 (1995) 「常滑焼と中世社会」 小学館
- 根岸美術館学芸部 (1996) 「『甦る鎌倉—遺跡発掘の成果と伝世の名品』」根岸美術館
- 日本考古学協会2001年度盛岡大会実行委員会編 (2001) 「都市・平泉—成立とその構成—」日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集
- 日本中世土器研究会編 (2003) 「『中世土器研究今日の課題—土器研究と中世史研究—』」
- 羽柴直人 (2001) 「『平泉遺跡群のロコロかわらけについて』『岩手考古学』第13号 pp.41~62 岩手考古学会
- 羽柴直人 (2003) 「『平泉におけるかわらけの用途と機能』『中世奥羽の土器・陶磁器』 pp.289~302 東北中世考古学会
- 平泉文化財センター編 (2000) 「『常設展示図録』 柳之御所資料館
- 平田祐三 (2003) 「『陸奥南部1—福島県—』『中世奥羽の土器・陶磁器』 pp.17~28 東北中世考古学会
- 福島県考古学会中近世部会編 (1996) 「かわらけ編年の再検討—11世紀から19世紀—(その1)」『福島考古』第37号 pp.65~85
- 福島県考古学会中近世部会編 (1997) 「かわらけ編年の再検討—11世紀から19世紀—(その2)」『福島考古』第38号 pp.67~85
- 福島県考古学会中近世部会編 (2000) 「東北地方南部における中世集落系の諸問題—樹立柱建築跡を中心として—」
- 藤澤良祐 (1982) 「『廬古古窯址群』『研究紀要』」 潤戸市史民資料室
- 藤澤良祐 (1994) 「『中世瀬戸窯の動態』『古窯』をめぐる中世陶器の世界」資料集 潤戸市教育委員会・潤戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 (1997 a) 「『中世瀬戸窯の動態』『研究紀要』第5編 pp.43~58 潤戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 (1997 b) 「『近世瀬戸窯の編年』『東北地方の在地土器・陶磁器』」 東北中世考古学会
- 藤宿裕康 (1991) 「東北地方出土の常滑焼・瀬美焼について」『知多半島の歴史と現在』3 pp.29~56 校倉書房
- 藤宿裕康 (1992) 「『石巻市水沼窯跡の再検討と平泉藤原氏』『石巻の歴史』第6巻(特別史編) pp.364~419 石巻市史編さん委員会
- 藤原良章 (1988) 「『中世の食器・考』『列島の文化史』5
- 北陸中世考古学研究会 (2001) 「『中世北陸の井戸』」
- 堀江 (2003) 「『崖跡』『中世奥羽の土器・陶磁器』 pp.255~266 東北中世考古学会編 高志書院
- 松本達彦 (1993) 「『柳之御所跡出土の土器・輪編年版解説』『紀要』 III pp.53~60 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 松本達彦 (1994) 「『ロクロかわらけと手づくねかわらけ』『岩手考古学』第6号 pp.23~44 岩手考古学会
- 松本達彦 (1995) 「『平泉のかわらけと平安京のかわらけの比較』『紀要』 pp.72~82 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 松本達彦 (1996) 「『船形器に見る器とその解釈』『解説』第60号 pp.46~59
- 馬渕和雄 (1997) 「『中世食器の地域性—鎌倉』『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 pp.311~330
- 宮城県教育委員会 (1990) 「『花山寺跡』『大貴館跡』『花山寺跡』」宮城県文化財調査報告書第137集 pp.127~148
- 宮城県教育委員会 (1999) 「『发掘ダイジェスト』山王・市川橋遺跡—」
- 宮城県教育委員会 (2003) 「『中野高柳遺跡』」宮城県文化財調査報告書第194集
- 宮城県教育委員会 (2004) 「『中野高柳遺跡』」宮城県文化財調査報告書第197集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 (1982) 「『多賀城跡—政府跡本文編—』」
- 宮城県多賀城跡調査研究所 (1988) 「『第50次調査』『年報1987』 pp.3~47
- 村田晃一・吉野 武 (2002) 「『中野高柳遺跡』『木簡研究』第24号 pp.76~77 木簡学会
- 村田晃一 (2004) 「『中野高柳遺跡の中世道路跡と屋敷跡』『中世みちのく研究会第7回研究集会』資料 pp.39~54
- 八重畠忠郎 (2001) 「東北における中世初期陶磁器の分布」『都市・平泉—成立とその構成—』
- 日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集 pp.67~76
- 八重畠忠郎 (2002) 「『平泉藤原氏の支配領域』『平泉の世界』」奥羽史研究叢書3 pp.112~126 高志書院
- 八重畠忠郎 (2003) 「『奥羽における瓦質土器・陶磁器の受容』『中世奥羽の土器・陶磁器』 pp.269~278 東北中世考古学会 高志書院
- 柳原敏郎・飯村 均編 (2002) 「『鎌倉・室町時代の奥州』」奥羽史研究叢書4 高志書院
- 山形県埋蔵文化財調査センター (1997) 「『荒川1~2番地遺跡発掘調査報告書』」山形県埋蔵文化財調査センター調査報告書第43集
- 山形県埋蔵文化財調査センター (1999) 「『米沢城跡発掘調査報告書』」山形県埋蔵文化財調査センター調査報告書第66集
- 四柳嘉章 (1995) 「『漆器』『概説中世の土器・陶磁器』 pp.522~538 中世土器研究会
- 四柳嘉章 (1997) 「『北陸の漆器考古学』『北陸の漆器考古学—中世とその前後—』第1分冊 pp.1~41 北陸中世土器研究会

報告書抄録

ふりがな 書名	なかのたかやなぎいせき 中野高柳遺跡							
副書名	宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書							
卷次								
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第201集							
編著者名	村田晃一・白崎恵介							
編集機関	宮城県教育委員会							
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3-8-1 022-211-3685							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかのたかやなぎ 中野高柳 遺跡	みやぎけん 宮城県 せんだいし 仙台市 みやぎのく 宮城野区 なかのあがけんどうまえ 中野字県道前	04100	01146	38度 16分 11秒	140度 58分 55秒	1次調査 199410~11 2次調査 199907~08 3次調査 20000703~0929 4次調査 20010409~1106 5次調査 20020408~1112 6次調査 20030407~1117 7次調査 20040412~1109	約1,050 約950 約3,250 約6,500 (確認300) 約10,400 (確認1,120) 約6,930 約8,200	土地区画整理事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
				使用測地系	日本測地系 (改正前)			
中野高柳 遺跡	烟跡	平安時代 中頃	烟跡 区画溝跡 河川跡	土器類 須恵器 赤焼土器		南に流れる河川両岸の自然堤防上を烟として利用している。烟は、河川に接続する溝で「コ」字状に区画されている。灰白色火山灰の降灰で廃絶した。		
		集落跡	平安時代 末期	遺物包含層	かわらけ (ロクロ+手づくね) 中世陶器 青白磁・白磁 木製品 漆製品 石製品 金属製品 動物遺体 植物遺体		河川は平安時代中頃以降、度重なる洪水によって埋まり、湿地化する。遺跡北半の湿地跡は、12世紀にごろ捨て場となっており、焼土や灰、炭化物などとともに土器・陶磁器・漆製品・木製品・石製品・金属製品・動植物遺体が出土した。特に鉄地網象嵌唐物は、平泉の製作技法と共に、同地で製作されたものの可能性が高い。また、土器・陶磁器の組合せも当時の政治的・宗教的・経済的中心地であった平泉に特徴的にみられるものである。こうしたことから、遺跡に屋敷を構えた主は、平泉藤原氏と密接な関係にあったと考えられる。	
		鎌倉～ 江戸時代	屋敷跡 区画溝跡 掘立柱 建物跡 井戸跡 土壙 溝跡	中世陶器 近世陶磁器 青磁・白磁 木製品 漆製品 石製品 金属製品 動物遺体 植物遺体		鎌倉時代以降は、幅3mの大溝によって方形に区画された在地領主の屋敷が場所を変えて営まれている。今回は15世紀～16世紀とみられる屋敷と17世紀以降の屋敷を報告した。前者は、主屋・雜舎・前庭・井戸・ゴミ穴などが一定の場所に配置されていることがわかった。こうしたあり方は他の屋敷と共通しており、屋敷内部の場の使い分けは、時代を超えて基本的に変わらなかったことを示すと考えられる。		

宮城県文化財調査報告書第 201集

中野高柳遺跡

- 宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書 -

平成 17年 3月 25印刷

平成 17年 3月 31発行

発行 宮城県教育委員会

仙台市青葉区本町三丁目 8番1号

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町 24- 24
